
G・F～ガールフレンド～

南条仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G・F〜ガールフレンド〜

【Nコード】

N3402Q

【作者名】

南条仁

【あらすじ】

「先輩が好きです！」出会ったばかりの美少女の後輩、琴乃にいきなり告白された翔太。恋愛経験ゼロの彼はその告白を受け入れて2人は恋人同士になる。初めての恋人。彼らは初めてながら恋愛経験を重ねていく。だが、琴乃が翔太と付き合うにはある目的があるようで……？惹かれあうことが運命だと思える恋をしたことがありますか？初恋ラブストーリー！

序章：出会って10秒、即告白

【SIDE：井上翔太】

これは俺の幼い頃の記憶だ。

夢に見たのはある一つの光景、俺の目の前には同世代の幼い少女。楽しそうに笑う女の子は俺に抱きついてくる。

『ねえ、今度はいつあえるの？』

『分かんない。でも、きつとすぐにあえるよ』

甘える仕草、可愛い彼女に俺はそう答えていた。

初恋だったのかもしれない。

それはまだ恋を恋だと認識できない年頃だったから明確には言えないけれど。

2

『ホント？それじゃ、ぜったいにまた会いにきてね？』

『うんっ。約束するよ』

小指同士をからめ合う子供の約束をかわす。

照れを交えながら俺はその指をそつと離れた。

『約束だからね。もし、会いに来てくれなかったら、私が会いに行つてあげる』

そう言つて笑った彼女の笑顔だけが印象的に覚えている。

それは子供の頃の消えてしまいそうなくらいに遠い昔の記憶。

……あれから何年も経つけれど、俺はひとつだけ後悔している事があった。
それは……あの約束を俺は守れずに、それ以来、彼女に会う事がなかったのだ。

俺の名前は井上翔太（いのうえ しょうた）。

平凡な家庭に生まれて、平凡な人生をおくる、平凡な高校2年生である。

「お兄ちゃん」と呼んでくれるとびつきり可愛い義妹がいるわけでもなければ、かいがいしく世話をしてくれる万能幼馴染もいないし、さらに部活には美人の先輩がいることもなく、本当に女性と縁のない普通の高校生である。

俺の容姿レベル、そこそこ……イケメンとは言えないがブサイクでもない。

学力も運動神経も普通、まさに特徴という特徴のない普通の平均的な高校生だった。

自分で言っていて悲しくなる、恋人いない歴〃人生。

女友達のひとりすらいるはずもなく、ちよつとさびしい。

まあ、別に女にモテないから辛いわけでもない。

モテる人間にはモテる人間なりの苦労がある。

ならば俺はあえてその苦労をしないだけだ。

……ごめん、言ってみただけのただの妬みです。

女の子にモテたいです、可愛い恋人が欲しいです。

思春期の男なら誰でも思うそんな野望を俺は抱えながら生きていた。

季節は春、新入生が入り、ようやく高校2年の生活になれてきた4月の後半。

「……人生って何が起こるか分からないから人生なんだ」

「いきなり何だよ？」

昼休憩、食事を終えてのんびりしていた俺にクラスメイトの中山（なかやま）は説教をする口調で語り始める。

「宝くじで1億当たるのも人生、可愛い彼女が突然、恋人になるのも人生。世の中、何が起こるか分からないとは思わないか？もちろん、幸運もあれば不運もあるわけだがな」

「まあ、可能性だけは何でもあるよな」

あくまでも可能性であって、その幸運の確率は極僅かだろうが。

「だからさ、期待だけはしておけということだ」

「期待はしてもいいけど、実際に起きるとは限らないだろう？」

「分からんぞ。いきなり親が再婚して可愛い義妹ができるかもしれない」

「……うちの親にそれを期待するのはやめておくよ」

俺は母子家庭で、父親という存在は記憶にもない。

それ自体はもう慣れてかまわないが、あの親が再婚とかいまいちなさそうだ。

「義妹はともかく、恋人はどうだ？」

「これまでまったく彼女の一人もできていないんだぞ？中山もそうだろうが」

「俺は違う。なぜならば、昨日、恋人ができました」

自信満々に言い放つ中山。

なるほど、妙な事を言い出しと思っただけそう言う事が。彼の憎たらしい程の嫌な笑みに俺はうんざりしながら、

「一応聞こうじゃないか……どんな子だ？」

「年上美人のお姉様だ。バイト先の先輩でさ、昨日、バイト帰りに告白してみたらOKしてもらえたんだよな。相手にされると思わなかっただけに嬉しいぜ。マジでサイコー！」

「そりゃ、よかったな……。騙されているんじゃないか？」

「はははっ。お前の妬みなど痛くもないね。羨ましいだろ？人生、何が起きるか分かんないんだからよ。お前も何かあるかもしれない。いろいろと覚悟しておけてことさ」

彼女ができたことに喜ぶ中山は置いとくにしても、日常に変化が欲しいのは事実だ。

これまでの俺には平凡という日常がなく、刺激的な事が何一つない。

「……恋愛か。一度くらいちゃんとしてみたいものだ」

「いいぜ、彼女つてのは……今日も放課後にはデートなのさ」

「あつそ。存分に楽しんでくるといい」

恋人ができた瞬間、優越感にひたり自慢げに語る友人がムカつくが、それは恋人がいるという事に対しての嫉妬だろう。

恋人が欲しいのなら自分で行動すればいい。

告白するなり、出会いを求めるなりしなければ何も起きない。

俺にはどうにもそのやる気がないんだよな。

本気になれないと言つか、望んでるわりに臆病だというか。

「恋人とかいれば人生、ちょっとは変わるんだろうか」

俺は独り言をつぶやきながら浮かれる友人の惚気話を聞かされる。誰かに告白でもされないかな。

できれば可愛くて面倒見のいい美少女を希望する。

スタイルもよければマジで最高。

……なんてな、そんなの宝くじが当たるような幸運的なイベントでしかない。

俺の人生は残念ながらそこまでラッキーじゃないさ。

放課後、彼女との初デートだと意気込んで帰る中山を見送り、俺は校内を歩いていた。

「……やれやれ、面倒な雑用を押し付けられた」

両手には化学の授業で使われた実験器具。

教師に日直だからという事で持つていくように言われたのだ。化学室にその器具を届けた帰りの事である。

ふと、特別校舎の屋上に出たくなり俺はそちらに足を向けた。何となく外の空気を吸いたくなったのだ。

ガチャッと重い扉を開けると春らしい陽気に包まれた太陽の光。すっかりと温かくなりはじめた4月らしさを感じる。

「うーん、良い風だな」

俺は軽く伸びをしながら、フェンスに持たれて空を眺める。

ゆっくりと流れていく雲、そよ風が心地よくて眠くなる。

こうしてのんびりとした時間を過ごすのは楽しい。

「……昼寝でもしたくなるな」

俺は欠伸をして、瞳をつむりそうになる。

あちらこちらから聞こえて来るのは体育系の部活の運動する声だ。

俺はどの部活にも所属していない帰宅部である。

中学の頃までは剣道部をしていたが、この学校には剣道部がなく、他の部活をする気にもなれずに今にいたる。

何か部活でもしていれば少しは自堕落にならずにすんだらうに。

アルバイトもしている事はしているが、ほとんどの日は暇だ。

睡魔に負けないように俺は一呼吸してから立ち上がる。

「さて、そろそろ帰るとするか」

青春を無駄遣いしている気がして俺はちょっとさびしくなる。

恋も部活もせずに、無駄に過ごし続けている高校生活。
何かこの際、はじめてみたいと思うのは当然のことだろう。
部活は今さらだが、入部してみるのも悪くない。

その時だった、俺の視界に入ってきたのはひとりの女の子だった。
彼女はひとり、日陰のベンチに座り、本を読んでいた。
少し距離が離れているせいもあり、向こうはこちらに気づいていない。

「……こんな場所で読書か？」

図書室で読めばいいのに、と思いながら俺は彼女に視線を向け続ける。

ぱつと見て、可愛い子である。

まだあどけなさの残る顔立ち、新入生だろうか……？

「あつ」

少女が声をあげて、俺に気づいた。

こちらを直視して驚いた声を上げる彼女。

よもや、俺を不審者扱いしてきたのではないだろうか？

今の時代、登下校時の小学生に「さよなら」を言うただけで「この付近に声をかけてくる怪しいおじさんがいるので気をつけてください」という通報をされて警告が出される悲しい時代だ。

「挨拶はきつちりしなさい」と教えておきながら人に声をかけられたら無視をしろという、矛盾すぎる今の日本教育と現実の寂しさを覚えるのは俺だけだろうか。

不審者に気をつける時代なのは分かるが敏感すぎないだろうか。
そんな世の中で視線があうだけで気まづくなる。

俺はピンチなのかもしれない。

もしや、俺を通報するのでは？

すみません、可愛いから見惚れていただけです。

悪気なんてひとつもなく、何かするつもりはないからごめんなさい。

そんな風にビビっている俺に彼女は本を置いて立ち上がった。

真っすぐに俺を見ると、彼女は唐突にある発言をしてくるのだった。

「好きです。私と付き合ってください」

告白の常等句、定番のセリフに俺は呆然としていた。

出会ったばかりの目の前の彼女は微笑しながら俺に告白してきた。すらっとした細身の身体ながら胸のあたりの発育もよし。

顔は小顔でどこか猫に似ている可愛さのある美少女だ。

その彼女から何がどうなっけいきなり告白されているのか。

「……はい？」

俺は出会って10秒の出来事に驚くしかなかった。

笑顔で告白してきた少女に硬直する俺。

……人生、何が起きるのか分からない。

そんな友人の言葉が脳裏をよぎっていた。

第1章：初めての恋人

【SIDE：井上翔太】

人生において告白される経験というのはごく一部の人間だけの行為だと信じてきた。

井上翔太、平凡に生きていた普通の男にはありえないシチュエーションだった。

それが何だ、俺は今、幻想のような現実のど真ん中にいる。

「好きです。私と付き合ってください」

出会ってわずか10秒の美少女から告白された。

「……はい？」

初対面の相手に告白されて、その告白を受け入れる人間はどれくらいの割合だろうか。

漫画とかではよくこういう時には「友達から始めよう」「ごめん、俺、好きな子がいるんだ」という展開になり、ほとんどの場合、即告白を受け入れる人間はいない。

というか、そもそも、事前に心の準備が必要なラブレターで呼び出す展開がないと、本当にびっくりするんだぞ。

「えっと、キミとは初対面だね？」

悲しいが俺の知り合いに美少女はいない。

記憶にある限り、俺はこの子に会った覚えがない。

「……」

彼女は無言で俺の顔をジッと見る。

そのジト目、俺はドキッとさせられる。

何か責められているような気がするのには気のせいかな？

「え、あ、あの、会ったことがあったっけ？」

「いえ、初対面ですね。私が勝手に先輩の事を知ってるだけです」

……何と、向こうは俺の事を知っていた。

驚く事もないか、好きと告白する以上、誰でもいいわけじゃないわけだし。

でも、自分が誰かに好かれてるなんて考えた事もなかった。

俺はあることに引っかけかきを感じて尋ね返す。

「……先輩？という事はキミは1年生かな？」

「そうですよ。“初めまして”、私は藤原琴乃（ふじわら ことの）
今年、入学してきたばかりの1年生です」

なおさら疑問だ、俺は1年生と接点なんて微塵もない。

そもそも、知り合いになることがなければ好きになることもないわけ。

「あのさ、何で俺なわけ……？」

「人を好きになるのに理由は要りますか？」

「……普通はいると思うぞ。何かきっかけがあるものだろう？」

俺の事をカッコいいと思ったり、すごいと感じたり……。自分で言っているものすごく悲しくなってきたぞ。でも、大抵は容姿だったり性格だったり、何かあるよな。

「うーん、別にないです」

「ないんかいっ!？」

思わず地の関西弁になっちゃってしまう。

それはつまり俺には好きになる魅力がないと言う事ですか？地味にシヨックだぜ、その一言は胸に来た。

「あつ。先輩が悪いんじゃないんですよ」

そのフォローがきついつす。

彼女は俺に「私が一方的に想ってるだけなんで」と笑う。

「気づいたら好きだった。それでは理由になりませんか？」

「……うーん。納得はできないけど、理解できるような気がしないこともない」

「そう言う事です。というわけで、お付き合いしてください」

どうやら交際宣言自体は本物らしい。

俺は驚くしかないわけだが、彼女は大いに真面目な様子で、

「ダメですか？先輩って彼女いませんよね？むしろ、今まで女の子に告白された経験もなさそうですし……いいチャンスだと思いませんか？」

んか？」

「なぜに初対面の少女に断言されているのか、そこに疑問があるが事実だから肯定しておこう。めっちゃ、泣きたくなるけど。チャンスって？」

彼女は自分の胸に手を当てて自信を持って俺に言う。

「私って可愛いと思いませんか？」

「……可愛い、と思うよ。一般的には」

見た目はかなりの美少女と言っていていいだろう。
セミロングの黒髪もよく似合う美少女だ。

「でしょう？可愛い女の子から告白されてノーと言える人はいませんよね？」

「……可愛いのは認めるけど、ちょっといい？」

俺は頭を抱えなくなる気持ちを抑えながら彼女に問いかける。
彼女が自分に自信を持っているのは人それぞれだからいいとする。
だが、こういう押し売りの告白はどうなのだろうか。

「何ですか？先輩？」

「あのね、藤原さん。俺とキミは初対面だろ？」

「琴乃と呼んで下さい。で、初対面ということが気になりますか？」

「普通は気になるだろ？」

俺は常々思っていたのだ。

初対面の呼び出し告白においての成功率について。

そりゃ、俺も告白されてーとか思ってたましたが、実際になるとびつくりだ。

「もうお互いに名前を知り合い、こうして会話をした時点で私達は知り合いです。このままお別れしても、どこかであえば挨拶ぐらいはできる仲です。そう、自己紹介をした時点でもはや見知らぬ他人ではありませんから」

「……ものすごく強引な気がするが」

「よく考えてくださいよ。先輩が普通に学生生活していて私みたいな美人な女の子に告白される可能性はほとんどありませんよね？」

グサツ、痛いところをつかれた。

俺の人生でそんな経験がないのは事実だ。

しかし、それを女の子に言われるのは本気でキツイ。

「恋人が欲しいとは思ったことありません？それとも好きな人がいるとか……？」

「そんなことはないけど」

「私、こーみえて、スタイルも自信ありますよ？先輩を納得されられると思います」

胸元を強調させる仕草に俺はドギマギする。

本当にこの子が可愛いのは認めます。

「……俺って恋人がいたことないからさ。そんな風に告白もされたことないんだよ」

「だったら、私は先輩の初めての恋人ということですね」

「何でそこまで自信があるんだか」

「ちゃんと“自信”を持てるだけの努力してますからっ」

満面の微笑みで言い切る琴乃さん。

すげえよ、この子、普通なら自意識過剰だと言いたいが、努力しているという意味では否定できない。

何かちよっぴり尊敬できたぞ。

やっぱり、自信っていうのは努力がなければダメなんだな。

「……琴乃さんってすごいな」

「呼び捨てでいいですってば。恋人同士なんですし」

「じゃ、琴乃ちゃんで……というか、まだ恋人じゃないから」

「今、まだと言いましたね？ということとは？」

恋する女子ってすごいとしか言いようがない。

ああいえば、こう責めて来るのでこちらは大変だ。

そもそも、告白されてーと思っていた俺には断る理由なんてひとつもないわけだ。

人生って何が起るかわからない。

そう考えてみると、俺は一つの結論を出す。

「分かったよ。その、俺と付き合ってみる……?」

「はいっ。それじゃ、今日から恋人同士ですねっ。よろしく願います」

俺の返答に嬉しそうに彼女は頭を下げる。

……何だろう、こんなにも自分が誰かに好かれていた現実が嬉しい。

人生で今まで誰ひとり付き合ったことのなかった俺に生まれて初めての恋人ができた。

この恋の始まり、俺にとってはただの恋愛じゃないのだが……それを知るよしもない。

俺にとって初めての彼女、琴乃ちゃん。

彼女は自信家であり、積極的な女の子である。

「井上先輩、お互いに理解を深めあう必要があると思いませんか?」

帰り道、俺達は同じ方向に家があるようなので一緒に帰宅することになった。

彼女の方が家が遠いので中学は別だったみたいだ。

「それじゃ、さっそく先輩の家に行ってもいいですか?」

「ぶーっ!?!?」

俺は思わぬ発言に吹く、いきなりかい！？

「そ、そういうのは、もう少し関係を深めてからでいいのでは？」

「そうですか？まずは家族の方にご挨拶をするのは当然でしょう？」

「……あつ、そっち。そっちでしたか、すみません」

男の子ですから変な方向に考えてしまいました。

琴乃ちゃんは「変な先輩？」と不思議そうにいう。

彼女の知識ではその辺はまだ想定していなさそうだ。

「俺の家に来るのか？うーん、家族って言ってもなあ」

俺の家族、つまりは俺の母さんなわけだが。

母子家庭である俺は母親と二人暮らし。

母さんは夜勤も多い地元病院の看護師なので、家にいついるかわからない。

「先輩って母子家庭ですよ。ぜひ、挨拶しておきたいんです」

「……そんな期待されても。普通の人だが……ていうか、何で知ってるんだ？」

俺はまだ話していない自分の事を知る彼女に驚く。

「ふふつ、先輩の事なら何でも知ってますよ」

彼女は手元に手帳をちらつかせて言い放つ。

ばっちり情報収集されてるわけね……何かすごい印象から怖い印

象に変わったぞ。

「一応、家に電話してみる」

母さんに連絡すると今日は家にいるようだった。

『彼女できたの？連れてきなさいよ、母さんにも見せて欲しいわ』

そう言つて母さんの許可が下りたので俺は琴乃ちゃんを家に連れていくことになる。

何ていうか、展開のスピードについていけない自分がいた。

ほんの数時間前まではこんな可愛い恋人がいなかったわけで。

俺は隣を歩く彼女を横目で見つめながら思う。

「まあ、いいや。深く考えないようにしよう」

実際、彼女ができた事はものすごく嬉しい事だ。

ただ、相手の素性を知らないのは問題かもしれないが、そもそも俺には相手を選ぶこともないのだ。

どんな経緯であれ、美少女とお付き合いできた今日の俺は幸運だろう。

恋人が出来てから1時間経過、さっそく親に紹介することになりました。

第2章：意外な接点

【SIDE：井上翔太】

俺の住む家は築15年のマンションの一室だ。

8階建てマンションの3階、エレベーターを待つより、階段の方が若干早い。

俺達は階段をのぼりながらそれぞれの事を話し合っていた。

「先輩ってお母さんとふたりぐらしなんですよね？」

「そうだよ。親父という存在は記憶にもない。亡くなったって話は聞いてないから、どこかにまだ生きているんだろうが」

どこかで生きてると思われる父親に会いたいと思った事もない。物ごとろついた頃から母さんとのふたりぐらしだ。

他の家とは違う、そういう事は感じているが、父親という存在を知らない以上、それにどれだけの存在価値があるのかも分からない。

「まあ、今時、片親ってのは珍しくないからな。琴乃ちゃんは？」

「私は両親いますよ。お父さんとは普通の関係ですね。嫌いってわけでもありませんから」

「そうなんだ。おっと、ついたよ、ここが俺の家だ」

互いの家族環境を何となく察した俺達は家に着いた。

「先に言っておくけど、汚い部屋だから。一応、リビングはマシだ

けどね」

まずはそう断っておかねばいけない。

女の子を家に上げる日など来ると想像したこともなかったからな。俺はドアを開けて思わぬ光景を目にする。

「ただいま……って、なんじゃこりゃ!？」

いきなり俺を出迎えたのは、綺麗に掃除された部屋だった。

おかしい、今朝まではこんなに綺麗ではなかった。

普段ならゴミが散らかっている汚い部屋なのだ。

なぜならば、うちの母は掃除をあまりしない、というか苦手な方だ。

俺は適度に片付けてるが、それを越す勢いで散らかすのが母なのである。

「あ、ありえない。あの汚い部屋を散らかすことしかできない母さんが部屋を整理していたなんて……ぐぼお!？」

俺の顔面を直撃するのはスリッパだった。

それを投げた張本人、俺の母さんは睨みつけながら言う。

「そこ、失礼なことを言わない。非番で気が向いたから朝から掃除していただけよ」

「そうだったのか。ごめんなさい。母さん、えっと、その……」

親に彼女を紹介するって難しいぞ。

俺が何と云うか悩んでいると彼女の方から自己紹介する。

「今日から井上先輩の恋人になった藤原琴乃ですっ」

「……あら？えっ、琴乃ちゃん！？」

何だ……母さんがびっくりしているぞ？

彼女は琴乃ちゃんの姿を見るや、びっくりした顔で迫る。

「久しぶりねえ、琴乃ちゃん。高校生になったんだ？」

「はい、おば様。お久しぶりですね」

……はい？

軽く抱き合うふたり、懐かしそうに笑い合う。

どうやらふたりは顔見知りらしい。

呆然とする俺をよそにふたりは話を始めてしまう。

「翔太の恋人ってことは……ふたりは付き合い始めたわけ？うわあ、ホントに？」

「ええ。今日から付き合い始めることになったんです。まずは報告したくて」

「そうなんだ。嬉しいわ、琴乃ちゃんがそういう気になってくれて。翔太って全然、女の子と縁がなくて。彼女の一人くらいいつになったら連れて来るんだって心配していたのよ。その相手が琴乃ちゃんだっただなんて……」

おーい、勝手に話を進めるな。

俺を置いてけぼりにしないでくれ。

俺は放置され気味の寂しさを感じながら彼女達に、「ふたりは知り合いなわけ？」と尋ねてみることにした。

すると、母さんは「はあ？バカじゃないの？」的な視線を俺に向ける。

「何言ってるのよ、琴乃ちゃんよ？」

「いや、俺の方こそ何言ってるの？だが？」

「おば様。実は先輩は事情をあまり分かっていない様子です」

「そうなの？バカだと思っていたけどホントにバカなのね」

何で俺をここまでバカにされなければならないのだ。

場所を変えてリビングに連れていき、椅子に座りながら話を続ける。

母さんは紅茶を淹れながら俺に説明する。

「翔太、琴乃ちゃんのことを忘れたの？」

「忘れたも何も、今日、初対面なんですが？」

「そんなわけないでしょ。はあ、この鈍男は……」

何かえらい言われようですな。

「昔、会ったことあったっけ？」

初対面だと彼女は俺に言っただけでは？

「本気で覚えてないのね。記憶力ないわねー、だからテストで毎回赤点ギリギリなのよ」

「うるさいなあ。そんなことはいいから説明してくれ」

「翔太、子供の頃に預けてもらっていたの覚えてない？」

母さんに言われて俺はある出来事を思い出す。

あれは子供の頃の話である。

俺は一時期、母の親友に預けられていたことがある。

あれは確か俺がまだ小学1年か2年の夏休みの事だったろうか。

母さんは看護師に復帰をしたで忙しく、ひと夏の間を彼女の親友、藤原のおばさんの家族と共に過ごした記憶はある。

「藤原のおばさんって理沙（りさ）の事を呼んだの。忘れた？」

「あーっ！？初日から“おばさん”ではなく“おねーさん”と呼びなさいと子供心に恐怖感を植えつけられた、あの人か！？」

「……そういうところ、理沙らしいわね」

「すみません、母は歳をめっちゃ気にする人なので」

母の親友である藤原のおばさん、もとい、理沙さん。皆が俺を受け入れてくれてひと夏とはいえ、楽しい思い出になった。

「もしかして、あの時の？」

「そうよ。翔太を預かってくれていたのが、琴乃ちゃんの母親。だから、貴方達は小さな頃によく遊んでいたじゃない。忘れちゃうなんてひどいわねえ？」

「……昔のことですから。それに先輩の記憶力ってダメそうですし、ひどい言われようだ！？」

覚えていなかったのは俺の責任だが、その失望感からなのか、諦めに似た彼女の呆れた表情に傷付くつての。

それともやっぱり、怒ってるのですか、琴乃ちゃん！？
すっかりと忘れていたのは俺が悪いのだが……。

『約束してよ。また会えるって』

そっか、琴乃ちゃんってあの時の女の子だったのか。

時々、夢に出てきては罪悪感を思い出してしまう少女。

楽しい思い出だったからこそその後味の悪さみたいなものだろうか。

“記憶”では『琴乃ちゃん』と彼女の名前を呼んでいたことすら覚えていない。

子供の頃の話だ、小学生の頃のクラスメイトの名前を言えと言われても覚えていないのと同じことで、仕方ないことなのかもしれない。

「私は年に何度か理沙に会うついでに琴乃ちゃんにもあってるけど、翔太は本当に10年ぶりくらいの再会かしら？一緒に高校に通っていたのね」

「はい。私も最近、偶然に知ったんですよ」

琴乃ちゃんは紅茶を飲みながら俺を見つめる。

昔の彼女の事を思い出す。

いつも笑顔がたえない子で、元気いっぱい少女だった。本当に懐かしい記憶だ……って、ちょっと待て。

「それじゃ、俺と初対面って言ったのは嘘ってこと？」

俺が琴乃ちゃんに問いかけると彼女は頷きながら、

「どうせ、先輩は私の事なんて覚えていないでしょうから」

どこか寂しげな表情を見せて言うから俺にはチクチクと罪悪感が……。

「ホント、私の息子ながらダメなやつ。しっかりしなさいよ」

「うっさいよ、母さん。その、琴乃ちゃん。全然覚えてなくて、ごめんな？」

「気にしないでください。少しは思い出してもらえましたか？」

言われてみればどこなく面影が残ってる。

あれから10年、記憶の中の少女は本物の美少女へと変わっていた。

「そうか、あれから10年も経つんだな」

彼女と過ごしたひと夏の間は多くの思い出を作った。今、また俺の前に現れて、しかも恋人になったなんて。何だか信じられないと言うか、夢みたいと言うか。

「でも、これからまた一緒ですね」

彼女の笑みに俺は許された気がした。

その後は母さんが夕飯でも食べていきなさいと勧めて（ほとんど強引に）、彼女は家に連絡してみると席をはずす。

母さんは夕食の準備を始めながら俺に言うんだ。

「……翔太が琴乃ちゃんを彼女として連れて来る日が来るなんてね。私としては嬉しい限りよ。いい子なんだから大事にきなさいよ。浮気とかしたら、私が彼女の代わりに翔太をぶん殴るわよ?」

「暴力反対!? それなりに努力するけどさ。ホントに今日会ったばかりなんで混乱してるんだよ」

「まあ、あれから私も忙しくて、全然、翔太を理沙のところへ連れて行ってあげなかったからね。ちゃんと会わせてあげなかった私も悪い。それにしても、琴乃ちゃんもずいぶん明るい子になったわねえ。高校デビューってやつかしら」

そう言っ、母さんはフライパンを取り出して油を入れる。

彼女の言葉に俺は「?」と疑問を浮かべる。

「明るくなったって?」

「琴乃ちゃんって昔はものすごく大人しい子だったのよ。覚えてない?」

「……いや、アレを大人しいと言うとどれが大人しいか分かんないけど。俺の覚えている限り、小さな頃の琴乃ちゃんは明るく元気な

子だったぞ。俺もよく振り回されていたくらいだからな」

俺よりも体力もあって、いつも後ろを追いかけるのが大変だったのは覚えてる。

『遅いよ〜っ。そんなんじやおいて行っちゃうからね!』

大人しいとか、そんな言葉の似合う子ではなかったのは確かだ。

「……ふーん？私の前と子供の前じゃ違うものかしら。それにしても、琴乃ちゃんが翔太を好きになるなんて……。あとで理沙に電話して報告しておいてあげる。きっと、理沙もまた翔太に会いたいって言うに違いないわ」

「また機会があれば挨拶にでも行くよ」

俺は母さんにそう言うと、部屋に戻って来た琴乃ちゃんに話しかける。

その日の夕食は懐かしい過去の話をしながら3人で盛り上がった。

第3章：想い出の少女

【SIDE：井上翔太】

……。

小学2年の夏、俺は母の都合で母の親友、理沙おばさんの家に預けられた。

夏休み、まさにひと夏だけの家族体験。

『へえ、挨拶もしっかりしてるし、可愛い子じゃない』

『よろしくおねがいします。おばさん』

『おばさんじゃないわ。いい？私の事はおねーさんって呼びなさい。いいわね？』

俺にグイグイと迫る彼女の迫力に負けて俺は『お、おねーさん』と呼びなす。

顔が怖かったよ、ホントに。

『よろしい。翔太君、遠慮しないでくつろいで。私の娘も呼んでくるわ』

理沙おばさんが連れて来たのはひとりの可愛い女の子。

俺の方を見るとすぐに近づいてきて笑顔を振りまく。

俺はその子につられて笑みを見せながら言うんだ。

『夏の間だけど、よろしくね。俺は翔太って言うんだ。キミは？』

彼女は長い髪をそつと揺らしながら、

『私は……私は琴乃だよ。仲良くしようね、翔太君っ!』

それが俺と彼女のひと夏の思い出の始まり。

淡い初恋の記憶。

思い返してみれば、確かに琴乃ちゃんと俺は会っていた。
そついや、そつだったなあ。

初対面の記憶を思い出しながら、俺はエレベーターのボタンを押す。

「先輩、わざわざ送ってくれなくてもいいですよ?」

「そつはいかないだろ。こんな時間になつちやつたし」

時計の時刻は8時過ぎ、さすがにひとりで帰すには忍びない。
俺達はやってきたエレベーターに乗りながら1階にたどり着く。

「琴乃ちゃんの家つてここからどれくらい?」

「歩いて20分つてところでしょうか? 普段は自転車通学なんです
……今は壊れて修理中なんですけどね」

「そつなんだ。まあ、中学の学区違いで遠いとは思ってたけど」

ちょうど俺の家から離れた場所の居住区は中学の学区が違う。

同じ中学だったらもつと早く再会できたかもしれないな。
俺はそう思いながら自転車を出す、2人乗りの方が早い。

「自転車で送るよ。それならいいだろ？」

「……はいつ」

遠慮がちな彼女に俺はそう言うと、後ろに乗るように指示する。
ちょこんと座る彼女を確認してから俺は自転車を漕ぎだした。
夜の街並みを自転車はゆっくりと駆けていく。

「一応、俺の後ろにでもつかまっておいて」

「……ふふつ、何か雰囲気の良いシチュエーションですね」

彼女の言葉に俺は照れくさくなる。
そー言われると、照れるじゃん。

「あのさ、琴乃ちゃん。言いそびれていたんだけど、ごめんな」

「何がですか？私を忘れていたことですか？」

「それもあるけど。覚えていないか？俺たち、約束しただろ？」

そう、俺と琴乃ちゃんは約束をかわしていたのだ。

『約束しよ？また会えるって』

そう言ったのに、俺は彼女に会えずにいた。
忙しい母さんの都合もあったんだが、毎年の夏休みは友人と過

すことを優先してたので、次第に歳を重ねることに約束すら忘れてしまったのだ。

それに機会がなかったというのは言い訳だろう。
家の距離も、昔は遠いように感じたが、今なら普通に行ける距離だ。

子供だった俺が忘れてしまった約束、その罪悪感が今さらながらにわいてくる。

「……約束、ですか？」

琴乃ちゃんは思い出すように小さな声でささやく。

「覚えていないかな？」

「え、えつと……」

彼女はいいよどむと、突然、「きゃっ!？」と叫ぶ。

少し石に乗り合わせてしまい、自転車の車体が揺れたためだ。
バランスは崩さなかったが、振動は強く、背後の琴乃ちゃんに声をかける。

「あつ、大丈夫？悪い、2人乗りも慣れてなくて」

「いえ、大丈夫です。……その、約束ってなんの約束ですか」

そりゃ、そうか。

いきなり言われても、どの約束の事が分からないよな。

「琴乃ちゃんと別れる間際に『また会おうね』って約束したのを覚えていない？」

「……」

今度は彼女が黙り込んでしまった。

あれ、覚えていないか？

これだけ覚えていた俺の記憶違いということもあるまい。

「……約束、思い出しました。そういう約束もしてましたよね？」

「ああ。10年も前だけども、ホントにごめんな。俺、あの後、会いにいけなくてさ」

会いに行くと言ったのに、約束を破ってしまった。

彼女に実際に会うまで思い出せもいたのだから仕方ない。

素直に謝ると彼女は「……約束」と小さくつぶやく。

「約束は気にしてません。また会えただけでいいです」

「琴乃ちゃんはいつ俺に気づいたんだ？」

「入学式の後ぐらいでしょうか。どことなく面影があるなって……それで、知り合いの先輩に名前を聞いたら本当に井上先輩だったんです。その、今日の告白、変な風になってごめんなさい。変に興奮して焦っちゃったんです」

なぜかいきなり謝られた。

そりゃ、出会って10秒の告白には驚いたが……。

今は事情も大体分かってるのでそれ程、変とは思わない。

「私もびっくりしたんですよ。いつか機会をみて挨拶をしようとは

思ってたけど、あんな風に会うとは思っていませんでした。先輩の事、好きだったんでつい口から出ちゃったんですね。強引に迫ったりしてびっくりしたでしょ？普段はあんなことしないんですけど、勢いって怖いです」

「……俺の事をねえ？」

「先輩は覚えていないみたいでしたけど、私はずっと先輩に会いたかったんです。……ずっと、好きでしたから」

それだけ愛されていると俺も嬉しくなる。

でも、10年か……長いよなあ？

あの小さかった子一（俺も同じくらいの年齢だが）がこれだけ美少女に成長するくらいの年月。

俺達の人生では、10年と一言で言うには長すぎる時間だ。

「……ありがとう」

「え？」

俺は自転車を止めて、振り返ってもう一度彼女言った。

「……ありがとう。好きでいてくれて」

俺の言葉に彼女は少しだけ瞳を潤ませる。

「きつと、俺は琴乃ちゃんの事を好きになる。そう思えるんだ」

……こういう形で始まる恋愛があってもいい。

俺はそう思いながら、「嬉しいです」と喜ぶ彼女に微笑んだ。

「あつ、先輩。ここでいいです」

彼女が俺を止めたのは住宅街のど真ん中、その家の外見に見覚えがある。

俺の家から自転車で15分程度、あまり来ない地域だがこれほど近かったとは……。

「送ってくれてありがとうございます」

「いいよ、これくらい」

「家に寄っていきますか？母もいると思いますけど？」

「いや、今日は遅いからもうやめておくよ。また別の日にでも挨拶にくるから」

というより、理沙おばさんに会うのは心の準備がいりそうだ。

あの人もうちの母さんの親友ってだけあってすごい人だからなあ。顔を合わせるの日は改めることにしよう。

「あの、先輩。携帯電話の番号を教えてもらってもいいですか？」

「携帯？いいよ」

俺は携帯電話を取り出して、赤外線で番号を交換し合う。

「先輩の番号……メールとかしても？」

「全然いいけど。そういうのって、何か恋人らしいな」

そう言うやり取り自体に憧れたりする。

琴乃ちゃんは玄関の前で俺に向き合った。

「井上先輩。今日は本当にありがとうございました。先輩と恋人になれたこと、本当に夢みたいで……。私、変なところもあるかもしれないけど、よろしく願います。先輩のために頑張りますからっ」

女の子にそう言われて、断る奴、一回手をあげてみてくれ。そいつは男じゃないね、俺は男だからもちろん受け止める。

「俺の方こそ、琴乃ちゃんに会えて嬉しい。俺も恋愛経験ないんで不慣れだけだな。お互いに、楽しくやっていけたらいいな」

「はいっ」

俺達は玄関先で別れて、再び俺は自転車に乗る。

しばらくしてから俺の携帯電話に一通のメールが届いた。

相手は琴乃ちゃんから、さっそく送ってきてくれたようだ。中身を見て俺はふっと顔をにやけさせる。

「先輩。大好きです。よろしく願いますねっ」

その一言だけで十分だった。

俺の中にも彼女を想う気持ちが芽生え始める。

俺はきつと彼女を好きになる。

そう確信できるだけの気持ちが溢れて来る。

こういう恋の仕方もあるのだ、と俺は感じていた。

「人生、何が起こるか分からない。本当にそうだな」

数時間前の俺とは人生が変わったとはつきり実感できる。

初めて女の子に告白されて、恋人ができた。

その子は過去と一緒に遊んだことのある淡い初恋の相手。

また再び出会っただけでなく、恋人になれるなんて……。

「……恋愛か。俺も本気でやってみるか」

爽快な気分で、春の夜の道路を自転車で走る俺は期待に満ち溢れていた。

第4章：恋人の温もり〈前編〉

【SIDE：井上翔太】

人生〓恋人いない歴の俺に初めて彼女ができました。

という事実は思っていた以上に、俺にとって影響のある事だった。

「……恋人ねえ？」

朝、目が覚めた時にメールがさっそく来ていることに気づく。
相手は俺の恋人になったばかりの女の子、琴乃ちゃんだ。

『おはようございます、先輩。今日のお昼に会えませんか？』

さっそく昼食の誘いをされるとは……。

何ていうか、嬉しくなるじゃないか。

俺も男だから女の子と楽しく会話したりするってのは憧れだった。
あいにくと相手には全く恵まれずにいたのだが。

「……夢じゃなかったんだな」

俺は携帯メールを眺めながら独り言をつぶやく。

俺に恋人ができた経緯を思い出す。

あまりにも突然であつというまの出来事だった。

「しかも、相手はあの子だった、と。偶然にしちゃ出来過ぎだな」

遠い昔の記憶、10年も前の思い出だ。

思い出の少女といえば、ロマンティック度もあがるだろう。

実際は本当に近くに住んでいながらこれまでその存在を忘れていた。

「母さんも言ってくればよかったのに」

同じ市内に住んでいるのならばまた会う事も容易にできた。

その事を探ねなかった俺も悪いが、母さんだって教えてくれる事はできたはずだ。

「……なんて愚痴っても仕方ないね」

俺はさっさと制服に着替えながら、彼女の事を考える。
会えなかった10年の間に彼女も俺も成長した。

琴乃ちゃんは美少女になっていたし、俺だって少しは男らしくなった。

過ぎ去ってしまった時間は取り戻せない。

どうしても、取り戻せないのなら今を大事にしていこう。

「やべえ、俺、マジで意識してるじゃんかよ」

思いのほか、俺は琴乃ちゃんに惹かれていたようだ。

好きとか言ってくれる相手、今までいなかったからなあ……。

女の子に言われて嬉しくない奴なんていないさ。

俺は顔がにやけるのを止めながらさっさとリビングへ行くことにした。

リビングではのんびりとテレビを眺めている母さんがいる。

朝食は既に作ってくれているようだ。

「ん、おはよう。翔太」

「おはよう。今日は仕事じゃないのか？」

「夜勤よ。あんまり夜更かしせずに寝なさい。夕食はいつものとおりね」

「分かってるよ。看護師つてのも大変だな」

看護師として病院勤めをしている母さんが夜勤でいないのも珍しくない。

今までがそうだったように、これからも変わることがない生活のひとつだ。

「昨日、理沙と電話したんだけど、翔太に会いたいつて言ってたわよ。琴乃ちゃんが翔太の事を好きだったのもびっくりしてた。理沙も想像外だったみたいよ。貴方達の組み合わせってのはね」

「……俺もびっくりしてる」

「ホントよね？10年よ、10年。片思いし続けてたなんて知らなかったわ。琴乃ちゃんとは年に何回かあつてはいたけど、素振りすらみせてなかったし……。こんなことなら機会を見つけて何度か会わせてあげればよかったわ」

母さんは「だからと言って、翔太に会いたいなんて言われても困るけどね」と失笑する。

我が母ながら息子の存在価値を過小評価していないだろうか。かなり失礼な人である、怒らせると怖いので反論はしないでおく。俺は朝食のパンを食べ終えて、さっさと学校へ行くことにした。

「それじゃ、行ってきます」

「いつてらっしゃい。……翔太、女の子の扱いが下手のは仕方ないとしても、泣かせるようなことだけはしないでよ?」

「俺はそこまで粗暴でもない。ちょっとは息子を信用してくれ」

一体、俺をどんな目で見ているのやら。

こっちは泣かせるどころか、どう接しようか考えてドキドキしてるっての。

学校に登校してクラスにつくと、友人の中山がげんなりとした様子で椅子に座っていた。

肩を落として机へ視線を落とす彼。

昨日の鬱陶しいくらいのご機嫌さは微塵もない。

「中山、どうした?」

声をかけるかどうか、俺は判断に迷ったが一応かけてみることにする。

彼はこちらに頭を上げると今にも泣きそうな顔をする。

「よう、井上。人生ってのは何が起きるか分からないから人生だな」

「……そりゃ、昨日のお前のセリフだろう」

出会いから10秒で告白されたりするのも人生だって。

ホントに人生って分からないものだと思ったださ。

「何だ？昨日は彼女と初デートを楽しんできたんじゃないのか？」

「うおおおおお、初デート！！！！！」

いきなり声を荒げて彼はぐしゃつと髪をつかみながら頭を抱える。
クラスメイトは何事かと彼に冷たい視線を向けた。

「ふつ、人生とは……悲しいものだ」

一瞬で場の空気を変えたお前の存在は確かに悲しい。

「で、何があつた？聞いてやるぞ？」

「さっそく、恋人にふられました。あっさりと」

「……ご愁傷様。何が原因だ？」

見事に敗れた中山、まさか交際2日で終わる恋とは驚きだ。

「交際自体が嘘だったとかではない。騙しもなければどつきりでもなかった」

「それじゃ、何でふられたんだ？元彼でも現れたか？それとも……？」

「そういうんじゃない。昨日、繁華街を一緒に歩くと言っ定番デートを試してみた。腕組んだりしてそりゃあ、雰囲気も良かったんだよ。だが、ある一軒の店が俺の人生を変えてしまったんだ」

何か複雑な理由でもあったのか？

「お店？どこに行ってきたっていうんだ？怪しい店か？そりゃ機嫌を損ねるな」

「そんなところ行くか。……ペットショップだ」

「ペットショップ？動物の？何でそこで喧嘩するんだ」

なぜ事件が起きるのか俺には到底理解できないんだが？

中山は遠い昔を見つめる顔をしながら、

「人には譲れないものつてのがあるだろ。俺もそうだった。彼女はペットショップに入るやいなや、犬コーナーに近づいて楽しそうに見ていた。だが、俺は猫派だ。犬なんて存在そのものを受け入れられない」

「……はあ？」

「お前には分からないのか？まあいい、お前に言う事ではないな。ともかくだ、俺は猫派、彼女は犬派だったわけだ。俺達は恋人になって初めて意見が対立した。言い争いに発展してしまっくらいにな……その結果は……うおおおお」

うなだれて泣き崩れる中山、クラス中から哀れな視線を向けられる。

よくわからないがお互いに譲れない――（？）犬派と猫派という言い争いが修復不可能な亀裂を生んだ。

それで中山は落ち込んでるわけか。

「しょーもないな」

喧嘩した理由はおいとくとしても、付き合って二日でそれとは嘆かわしい。

俺はつまらないことで時間を割いた事を後悔しながら彼に言う。

「そんなお前に報告するのは酷かもしれないんだが……」

「しれないんだが？」

「実は昨日、俺に彼女ができたんだ。美少女の後輩に告白されてさあ」

中山にとめとばかり言ってやると「ちくしょーっ！」と彼の叫び声がクラスに響いた。

昼休憩になった、これほど時間が待ち遠しかったのも久々だ。俺はさっさと片付けて食堂へ行く準備をする。

「そっぴゃ、お前の恋人ってどんな子なんだ？」

何とか復活した中山は興味ありげに俺に言う。

自分の失恋のショックを俺をからかう事で憂さ晴らしする事にしたらしい。

「どうせ、美少女って言うても冗談だろ？なぁに、お前の事だ。そ

「こそこ普通の子でも可愛いって言ってそうだからな」

「何を勘違いしているか分かんが、めっちゃ失礼な奴だな」

俺はともかく、女の子相手に失礼極まりない発言だ。

「気になるなら見せてやるよ。彼女、この部屋に寄っていくから」

1年の教室は3階で、2階のこの教室へ降りて来ることになっている。
しばらく待っていると教室にこちらをうかがうひとりの少女がや

ってくる。

「……お待たせしました、井上先輩っ」

琴乃ちゃんは俺に気づくと彼女は安心したような表情を見せる。

他クラスでしかも、学年が違えば緊張もするだろう。

とびつきの美少女の登場にクラスはざわつとした雰囲気になる。

「琴乃ちゃん。それじゃ、行こうか」

「ちょ、ちょっと待て!?!、井上、マジか。その子がお前の恋人
だとおっ!?!」

「そうだ……昨日から付き合うことになった俺の恋人の琴乃ちゃん
だ。ホントに可愛い子だろ?」

俺がそう言つと琴乃ちゃんは頬を赤らめる。

あー、思わず抱きしめたくなる可愛さですよ

「先輩にそう言ってもらえると嬉しいですね」

「……言った俺も照れくさいけどな。混む前に食堂へ行こうか」

俺の後ろで啞然としている中山、面白いから放っておこう。

「井上の恋人が……そんなバカな……本物の美少女だと……嘘だ、そんなはずがない!？」

彼の嘆きの叫びに耳を傾ける必要はない。

「何でアイツが、あんなに可愛い子と……な、なぜだあーっ!？」

くくっ、勝った。

俺は内心ほくそ笑みながら、ショックで落ち込んだ中山を放置して歩きだす。

「あの、いいんですか？先輩の知り合いでは？」

「いいんだよ。あんなのは放っておいていいんだ」

他にもクラスメイト達の羨ましそうな視線を感じる。

美少女が恋人つてのはそれだけで価値があるな。

俺は優越感にひたりながら彼女に笑いかける。

「……そついや聞いてなかったが、琴乃ちゃんは食堂派？それとも弁当派？」

「気分で違いますよ。私、自分でお弁当を作ってるので。今日は先輩と一緒に食堂で食事したいと思ってます。先輩と一緒に食事した

いんです。昨日から楽しみにしてたんですよ」

そう言ってもらえると、こっちまでたのしくなってくるじゃないか。

俺たちが離れていた時間を埋め合わせるくらいに仲良くなればいい、それが今の俺の偽りのない気持ちだ。

琴乃ちゃんと恋人になって2日目。

恋人がいるって素晴らしいことだと俺は実感していた。

第5章：恋人の温もり〈後編〉

【SIDE：井上翔太】

授業が終わってから俺は中庭で琴乃ちゃんを待っていた。
恋人として付き合い始めてから2日目。

今日は俺が理沙おばさんに挨拶に行く番である。

「理沙おばさんか」

お世話になってた頃から悪い人ではないけれど、怖い人ではある。

「お待たせしました、先輩。掃除が長引いてしまって」

「いいよ。それじゃ、行こうか」

琴乃ちゃんは今日も歩きらしいので、俺の自転車の後ろに乗せてあげる。

「自転車はまだ直らないのか？」

「今日ぐらいには直ってると思います。お母さんが勝手に乗って壊したんですよ」

「……そりゃ、大変だな。今はバスで通学しているんだ？」

「そうですね。さすがに家から歩くのは遠いですから」

バス通学の方が楽だけだな。

俺も雨の日はバスで通うこともある。

「先輩、少しだけ寄り道してもいいですか？」

「寄り道……？」

「向かってもらえれば分かります」

彼女の案内するままに俺は自転車を走らせる。

自転車の二人乗りをしていると背中の方に意識が集中する。

俺の制服を掴む彼女の手。

もうちよつと、ぎゅつとした感じで掴まってもらえると俺としては嬉しいのだが。

男の野望など彼女は気にするはずもなく、話を続けて来る。

「昨日、夢を見たんです。先輩の夢でした」

「……どんな夢だったんだ？」

「先輩との思い出のことです。私も昔のこと、それほど覚えているわけじゃないんです。さすがに時間が経ってますから……」

俺が小学2年生の時は、1歳年下の琴乃ちゃんは小学1年生。

覚えていえると言う方が無理なような気がする。

でも、昔の記憶って成長した時の記憶より印象的に覚えているものが多い。

なんとなく、ではあるけれど、イベントとして脳が記憶している。俺の住むマンションの前を過ぎ去り、しばらく進むとあまり馴染みのない住宅地に入る。

ここから先はあまり俺も来たことがない。

それゆえに、自転車で数十分という距離ながら琴乃ちゃんに会う機会もなかった。

「夢で見た光景。久しぶりに私も行ってみたい場所があるんです。いいですか？」

「もちろん。俺もどんな場所か気になる」

彼女が案内したのは彼女の家付近にある高台の公園だった。整備された森林公園で、俺達は自転車から降りて歩く。

「昔、よくふたりでここで遊んだよな？」

「ふたりで……。あ、はい。家から近いのでよく遊びに来てました。お母さんが子供は家より外で遊んできなさいって言ったんですよ。夏休みでしたから暑くて大変でした」

「そっぴゃ、そうだったか」

小さな頃の俺はあまり外で遊ぶタイプではなかった。

住んでるマンションにも歳の近い子はいなかったので、遊び相手がいなかったんだよな。

だから、琴乃ちゃんと遊んだ時間は特別だったので記憶に残っている。

しばらく進むと高台から街全体が見下ろせるようになっていた。

「展望台公園か。いい景色じゃないか」

「先輩が預けられてた時にはよくここに来ていたんです」

琴乃ちゃんと遊んだ思い出の場所のひとつ。

かくれんぼしたり、はしゃいで遊んだのはこの公園だった。

見渡す限り、それほど記憶と変わらない。

遊具があつて、展望台がある普通の公園だ。

「懐かしいな。どことなく覚えているよ。昔はもっと大きなイメー
ジがあつたが」

「先輩も私も成長してますからね」

大人になつて視点が変わると見える世界が変わってくる。
都市化した駅前周辺と比べて比較的に緑の残る森林公園。
俺が適当に歩いていると目の前に大木が見えた。

「あの大木……そうだ、あれだ」

俺は近づくとこの公園で一番大きな木の前に立った。
そつとその木に触れて過去を懐かしむ。

「懐かしい木だ。よくこの木に上つたつけ」

「先輩。無茶して落ちそうでしたよね？」

「……実際、一回落ちて泣きそうになつたけどな」

女の子の前で泣くのは恥ずかしかったので必死にこらえた記憶が
ある。

今となつてはそれほど高い木ではないのだが、あの頃は上るのも
大変だった。

……。

『待つてよ、琴乃ちゃんっ！危ないって』

彼女と公園で遊んでいた時、俺達はこの木を見つけた。
巨木で子供がのつた程度ではびくともしない。
最初に上ろうとしたのは、琴乃ちゃんの方だった。

『これくらい簡単に上れるでしょっ。ほらっ！』

彼女は木に手をかけて上り始める。

器用に木のぼりした彼女は大きな枝の上に座った。

『翔ちゃんも早くきてよ。ここからすぐく眺めがいいよ』

『……無理だつてば』

『男の子なら大丈夫。早く上っておいで』

俺は仕方なく彼女を追うように木に登り始める。
それまで木のぼりなど一度も経験がないので難しかった。
何とか苦労してのぼった枝の上で俺は彼女の横に座る。

『少し高い木にのぼっただけなのに景色が違うね』

『ホントだ……すごいなあ』

そう彼女は楽しそうに笑って言った。

巨木から見た光景は、ちょうど今の俺からの視界くらいだろうか。
……そう言えば、あの時は降りるのも苦労したっけ。

「あの頃の琴乃ちゃんってホントにすごかったよな。こんな木でも軽く上っちゃうし。ついていくのが大変だったよ」

「……」

彼女は黙ってその木を見つめる。

俺は「琴乃ちゃん？」と呼びかけるとハッとしたように、

「え？何ですか？すみません、ボーっとしてしまっ」

「いや、この木を琴乃ちゃんは軽くのぼっていたなあって」

「……そうですね。私、木をのぼるのは得意でしたから」

なぜか俺から視線をそらすと彼女は思案顔をする。
どうかしたのだろうか？

「あつ、誰かいますよ」

だが、彼女は何事もなかったように話題を変えるように子供たちを指差す。

小学生の兄妹だろうか、男の子と女の子が一緒に公園で遊んでいる。

「俺達もあれくらいの年だったんだろうな」

小さな子供たちは備え付けられている遊具にのって遊んでいる。
兄の方は滑り台に簡単にのぼれるが、妹の方は中々上れない。
そりゃ、あの年頃の体格差なら仕方ないさ。

子供の頃の1年って結構、体格に差がひらいているからな。
妹の女の子が上り終えるまで待って、彼らは再び遊び始める。
俺達も昔はあんな感じだったんだろっか？

「何かほのぼのしてるなあ」

「……先輩。そろそろ時間ですから行きましょうか？」

彼女が俺の手を自然にひいて公園から出ようとする。
その小さな手の温もりに俺は心地よさを抱いていた。
女の子と手を握った記憶もあんまりないので緊張する。
積極的な性格で、俺の方が翻弄されることが多いのは今も昔も変
わらない。

……だけど、何か気にかかることがあるんだ。
過去の話をする時に彼女は時折寂しそうな顔をする。

俺はまだ何か忘れてしまっていることでもあるのだろうか……？

第6章：焦がれる想い

【SIDE：井上翔太】

琴乃ちゃんの母親である理沙おばさんは美人である。

我が母いわく、学生時代はものすごくモテていたらしい。

今でも十分美人だから、真実なのだろうが。

俺が琴乃ちゃんの家にながらせてもらって数分。

俺は警察の取り調べとばかりに理沙さんに詰め寄られていた。

ちなみに琴乃ちゃんは制服から着替えるためにリビングにはいない。

「久しぶりに会ったと思ったら琴乃の恋人ってびっくりしたわ。翔ちゃんがねえ？」

「その、翔ちゃんってのは……さすがに恥ずかしいですが」

「あら、娘だって昔はそう呼んでいたじゃない」

そりゃ、琴乃ちゃんが呼んでも悪くないが、おばさんに言われると嫌なのだ。

ほら、よく親戚に小さな頃の失敗話を笑ってされてムツとするのと同じだよ。

……そう言えば、昔、琴乃ちゃんには“翔ちゃん”って呼ばれていたっけ。

今では先輩扱いだ、しかも名前じゃなくて名字だし。

今度、名前で呼んでもらうようにしよう。

それはさておき、理沙おばさんは俺と琴乃ちゃんの関係にひどく

興味津々。

琴乃ちゃんがあまり話してくれないから俺から聞き出そうとして
いるようだ。

「昨日、琴乃が翔ちゃんを恋人に射止めたって聞いて本当に驚いた
のよ？あの子、恋愛には疎い方だって思ってたのに。親に隠れて想
いを抱き続けていたのねえ」

「……普通は想いつてのは親に隠すものでは？」

「そう？私に話してくれば葉月に言っただけで無理矢理でも翔ちゃんを
連れてきてもらえばよかったじゃない。葉月ってば、私が連れてき
てっただけでも面倒だってあれ以来、翔ちゃんを連れてきてくれな
かったし」

葉月（はづき）っていうのは俺の母さんの名前だ。

母さんと理沙おばさんはいわゆる幼馴染って奴で幼稚園から仲が
良かったらしい。

「でもね、翔ちゃんが琴乃の恋人っていうのは安心できる」

「……信頼されてます？」

「何かあったら葉月が動くもの。葉月の子供ってだけでまず遊び半
分にポイ捨てされる心配はゼロよ。もちろん、翔ちゃんがそんな真
似をするわけないって信じてるけど」

あつ、そういう意味っすか。

むしろ、今のは警告だろうか？

うちの娘につまらんことをしたらどうなるか分かってるんだらう

な、的な？

迂闊なことはできそうにもない、する気もないけど。

「でも、あの内気な琴乃が変わろうとしたのはいいことよ。最近、オシャレに気を使ったりしだしたから何かあるなって思っていた。高校に入って何か影響されてるのかも、そう思っていたけど違ったのね。好きな人がいたから変わっただけ」

俺の顔を見つめながら理沙おばさんはにこやかな笑みを見せる。

「琴乃ちゃんってそんなに大人しい子でしたっけ？」

母さんもそうだったが、どうにも周囲のイメージと俺の小さな頃のイメージが合わない。

琴乃ちゃんに振りまわされた過去を持つ俺は、元気で明るい子という感じなのだが。

「……琴乃は前から大人しいわよ。私の子ながら全然性格も似てないし？」

「それは当然では……いえ、何でもないです」

おばさん、怖いから睨むのは勘弁してください。

「俺はそう思えないんですよ。俺の前では昔も今も、琴乃ちゃんって大人しいタイプには全然見えません。今回の告白も結構強引でしたから。実際と違うのになって少し気になって……」

「強引なのは恋をしているからでしょ？そんなものよ。親が知る子供の姿と本当の子供の姿が違うのは普通じゃない？子供ってバカじ

やないもの。親には隠したい一面くらいあるもの。でも、翔ちゃんの前で本当の自分を見せるってのはあの子も女の子なのね。可愛い所、あるじゃない」

やはり、考え過ぎなのだろう。

俺もそこまで言えるほど、琴乃ちゃんを深く知らない。

この関係が続けるためにも早く仲を深めあいたい。

「……何の話をしているんですか、先輩？」

着替え終わった彼女がリビングに出てきたので俺とおばさんは話をやめる。

変なことではないけど、本人に聞かせる話でもない。

「翔ちゃんと会ったの久しぶりだなんて。琴乃は翔ちゃんのことを覚えていた？」

「私にとっては大切な思い出だったもの。先輩、夕食ができるまで私の部屋にきてもらっていいですか？」

「……娘が自室に男を招くシーンを見ることになるなんて。心の準備はOK、琴乃？」

「変なことを言わないで。先輩に見せたいものがあるだけ」

「ごめんなさい、俺も変な期待をしていました。

だって、女の子からそう言われたら嫌でも期待するじゃん。

「ここはお母さんに任せて、行きましょう、先輩」

「ええーっ。私も翔ちゃんとお話したいのに」

「また今度にして。今日は私、優先だから」

理沙おばさんは「ホントに何かいつもの琴乃じゃないわ」と微笑する。

俺は食事ができるまでの間、琴乃ちゃんの部屋に行くことにする。

彼女の部屋はリビングからすぐ近い部屋だった。

室内は女の子らしさ抜群の何だかいい香りのする部屋だ。

内装も女の子っぽくて何かいい、すごくいい……。

こうして女の子の部屋に入るのって初めてだから緊張する。

「……俺に見せたいものって？」

「先輩は覚えていないでしょうけど、小さな頃の写真です」

「へえ、昔の写真か……。見せてもらってもいい？」

琴乃ちゃんが俺に差し出した写真に写るのは幼い頃の俺だ。

その隣にいる可愛い女の子は琴乃ちゃんだろう。

仲良く二人で写っている写真を眺めていると昔を思い出す。

「……あれ？」

俺が気になったのは1枚の写真だった。

俺と琴乃ちゃんの後ろに隠れるようにして小さな女の子が写っている。

記憶にはないけど、俺達と遊んだことのある女の子だろうか？

「ねえ、琴乃ちゃん……この子は？」

「それは……」

俺が彼女に尋ねようとした時に、理沙おばさんから声がかかる。

「ご飯できたわよ？……もしかして、お邪魔？」

「別に変な事はしていないから。夕食できたの？」

「残念、何かいい雰囲気だったら邪魔しようと思ったのに。翔ちゃん、琴乃が可愛いからって襲わないでよ？」

「……襲いません」

俺の発言になぜか琴乃ちゃんが拗ねる。

「はつきり断言されると悲しいです」

「そうよ、翔ちゃん。まだ、とか、いつかはって言ってあげないと」

あれ？何で俺が責められているんだろう？

ここで襲うと言ったら間違いなく、出ていけて展開になるはずなのに。

どちらにしても反応しづらいっ！

女心というものにもなれていかないかね。

「ほら、ご飯が冷めちゃうから早く来てね。今日は頑張ったのよ」

俺は「うわぁ」と引きずられるように理沙おばさんに連れて行か

れるのだった。

……。

部屋に一人残った琴乃は翔太の見ていた写真を手にする。
写真に写るのは幼い頃の琴乃ともう一人の少女。

「先輩は“この子”を覚えていないの？」

それは10年前の思い出の光景、忘れられない恋の始まり。

「……思い出して欲しい気持ち、思い出して欲しくない気持ち。どちらが私の本音かな」

琴乃は寂しそうにつぶやくと元のアルバムに写真を仕舞いこんだ。

第7章：キミを知りたい

【SIDE：井上翔太】

琴乃ちゃんと恋人関係になってから1週間ほどが過ぎていた。初めての恋人、お互いに関係に慣れ始めてきた。女の子と付き合い始めたことで俺の日常は劇的に変化した。恋愛なんて漫画やドラマだけの話だと思っただけに縁がなかった人間、恋をすれば変わるものだ。

「……翔太、琴乃ちゃんとデートはしたの？」

それは土曜日の朝、何気ない母さんの一言から始まった。夜勤明けで帰って来たばかりの彼女は眠そうな顔をして言う。

「な、何だよ、いきなり……」

「理沙がその辺、気にしているのよ。2人の進展具合、琴乃ちゃんのはつきり言ってくれないみたいだから、翔太に聞こうと思って。実際、どうなの？おふたりはどこまで行ったわけ？」

「そっいうのは仲が良くなってからというか、タイミングってものが……」

簡単に言ってくれるがデートひとつ誘うのも緊張するっての。

琴乃ちゃんは別に何も言っただけなのに、今は仲を深めるのを優先している。

相手の事を知り、恋を深めていきたいのだ。

「デートのひとつもできないの？」

「うるさいなあ……だから、タイミングってのがあろう？」

「ヘタレ？我が息子ながら情けないわねえ」

ヘタレ言っな、地味に傷つく。

母さんは「デートぐらい年上の翔太が誘えばいいじゃない」という。

「デート代のお金くらいバイトでもして稼げ。仕方ないから今回は援助してあげるわ。琴乃ちゃんをちゃんと楽しませなさい」

母さんからデート代をもらった俺はデートという事を考える。

「……デートか」

考えたことがないわけではない。

恋人としてどこかに一緒に出かけたりするのは普通の事だと思うし、俺だって琴乃ちゃんと出かけてみたい気持ちはある。

しかしながら、まだその段階に進めないのは緊張や勇気がないのだ。

「ふわあ……私はもう寝るわ。明日、デートの約束しなきゃお金を返しなさい。それじゃ、お休み」

そう言って母さんは自室へ戻る。

明日って、いきなりすぎて無理っ！？

慌てる俺の反論は当然、母さんには通用しないだろう。

……まあ、こうしてある種のきっかけを与えてもらったのには感

謝しよう。

俺はとりあえず、今日の予定でもあったリビングの搜索を開始する。

この間、琴乃ちゃんと写った昔の写真を見せてもらったが、我が家にも1枚くらいあるのではないかと探して見ることにした。

基本的に写真なんてあまり撮らないのでアルバムはそう多くない。

「こういうのは母さんが寝ている時しかできないからな」

前に別件で写真探しをしたことがあるのだが、母さんに怒られた。父親関係の事を探していると勘違いされたらしい。

今となっては顔も覚えていない存在の事は正直、どうでもいい。それでも、変に誤解させないようにタイミングを見計らっていたのだ。

リビングにある押し入れの中を探して数十分、ようやく奥にしまいこまれたアルバムを発見。

そこまで奥の方に封印しなくてもいいだろうに。

「俺の小学生時代の写真はどれだ？」

適当にページをめくっていくと、所々に空白がある。

その空白こそ、父親という存在の跡なのだろうか。

確定情報ではないが、俺の父親は医者だったという話を聞いた事がある。

看護婦だった母さんと病院で知り合っただけ……ホントかどうか知らないけどな？

こうして改めてアルバムなど見る機会はなかったので懐かしさもある。

そして、俺はようやく琴乃ちゃんと写っている写真を何枚か発見する。

「これだ、俺の家にもあったか」

何枚か、一緒に写っている写真の中にそれはあった。

琴乃ちゃんの部屋で見せてもらった時、気になっていたもう一人の女の子。

「この子は……？」

俺とツーショットで写っている写真もあり、俺は素直に驚いていた。

この子に関しては記憶がまったくない。

一緒に遊んだとか、思い出などとも思い出せない。

「……まあ、いいや。これだけ抜き取っておこう」

俺はその数枚の写真を手元に残してアルバムを片づける。

そして、自室に戻り、懐かしい写真を眺めていた。

主に写真の背景は展望台の公園の写真が多い。

琴乃ちゃんと遊んでる俺という構図の写真。

それと、謎の女の子と写る写真も数枚ある。

年齢は俺や琴乃ちゃんよりも幼く感じる、2、3歳は下ではないだろうか。

「……こんな子、いたかな？」

記憶を思い出すのに苦労しながら俺は考える。

その子は黒い長髪の女の子だった。

俺の隣で微笑む琴乃ちゃんは茶髪っぽく見える髪質なのだろう。

笑い合う俺達を見つめるようなもう一人の少女。

それは、楽しいとかではなく寂しそうにも見える。

「この写真だけ、笑顔っばいな？」

俺とのツーショット写真。

少女は微笑を浮かべているように見える。

可愛らしい子なので今となったらすごい美少女になっているに違いない。

「琴乃ちゃんはこの子を知っていた、となると……誰だ？」

直接、本人に尋ねるのが一番だろうが、どうやらそんな雰囲気ではなかった。

あの時はおばさんに邪魔されたが、俺がそれ以上追及できなかったのはその時の彼女の表情が暗く思えたからだ。

「……聞かれたくない素振りだったよな？」

となると、思いつくのは幾つかの仮定。

亡くなったとか、引越してしまっただとか……？

「ホント、誰なんだろうね？」

思い出せないことに歯がゆさを覚えながら、俺はその写真を見つめる。

母さんにでも聞けば……いや、あの当時の事を母さんがどれだけ知っているか。

この当時、10年前は母さんが看護師に復帰した頃だ。

俺が預けられていた時に母さんは忙しくて、ほとんど顔を見せなかった。

それを思えば、一緒に遊んでいた子など覚えていないだろう。

「理沙おばさんに聞くか？」

本当にこの子の正体を知りたいのならそれが一番確実な方法だ。
この写真を撮ったのは彼女だろうし、内緒話にしてもらえば話してくれそうだ。

それも選択の一つだと考え、俺は写真を机の中に仕舞いこむ。
今すぐに思い出せなくても、いずれ思い出すことがあるかもしれない。

焦って思い出すことでもないのだから、ゆっくりと思いだすしよう。

「キミは一体、誰なんだろう？」

俺の記憶の中にいるはずの少女の存在が気になっていた。
どうして、俺は覚えていないのか。

それにも意味があるんじゃないのか、そんなことさえ思う。

「……なんてな、ドラマじゃないんだから考え過ぎだろ」

大抵、小学生の記憶ですら曖昧なのだから、覚えてないのは仕方ない。

下手に考え込むと混乱するだけだ。

気にはなるが、気にし過ぎはやめておく。

それよりも、俺には問題があるのだ。

「琴乃ちゃんをどうやってデートに誘うか。それが問題だ」

俺は携帯電話を片手に約1時間ほど脳内シミュレーションをしな

がら、ようやく琴乃ちゃんに連絡をして「明日、デートしない？」と誘う事にした。

ホント、デートの約束するのって大変なことなんだなあ……。

結果、明日のデートを何とかこぎつけ、次はデート場所で悩むのだった。

悩んではかりの初体験に苦労するが、悪くはない。

こういうのも楽しみのひとつだ。

恋愛って思っていた以上に面白いな。

第8章：ファーストキス、じゃない？

【SIDE：井上翔太】

琴乃ちゃんとのデート当日、俺は昨日から眠れずにいた。

初めて女の子と出かけると考えただけで……うまくいけばキスくらいはできるかもしれない、その後は……むふふっ。

いかん、変な方向に妄想してしまうのは男の性さがって奴だろうか。そりゃ、お年頃の男が考えるというアレがアレして、こうしてしまうものだ。

「……琴乃ちゃんと普通に遊ぼう」

俺は軽く自己嫌悪しながら冷静さを取り戻す。

今日のデートは街中でショッピングという普通のデートなのだ。

俺にとっては人生初デートなので浮かれる気分は仕方がない。

朝飯を食ってから俺は待ち合わせ場所へと向かう。

待ち合わせていたのは俺の住むマンションの前だ。

「……ホントは駅前とか、そう言う所で待ち合わせるものでは？」

いかにもデートというのなら、そうなのだろうが、今日行く予定の繁華街は駅側ではないので、俺の家からの方が近い。

まあ、下手に琴乃ちゃんがナンパなどされて嫌な思いをするよりはマシだろう。

「琴乃ちゃん、可愛いからなあ」

本当に俺の恋人になってくれたのが奇跡だろう。

普通なら縁もない、そういうレベルの相手なのだ。

「……今日のデートが終わったら告白しよう」

そして、俺の気持ちもひとつにかたまっていた。

最初は彼女の勢いに負けて付き合い始めた関係だ。

だが、昔の事や琴乃ちゃんを見ていて俺は自分が彼女が好きだと思っようになっっていた。

恋している自分に気づけた時、俺は本当の意味で告白しようと思ったのだ。

「これで正真正銘の恋人同士か」

嘘も偽りもない、恋人になれると言っ事は嬉しい。

これからもずっと関係を続けていきたい相手だ。

「さて、そろそろ来るはずだが……？」

腕時計を見ると約束の時間になり始めていた。

「先輩、お待たせしました」

彼女が到着したのは約束の時間、ちょうど。

「おはよう、琴乃ちゃん。いきなりデートに誘って大丈夫だった？」

昨日の今日だ、驚くのも無理はない。

「いえ、全然問題はないです。先輩から誘ってもらえて嬉しかったんですよ」

「そっか。それはよかった」

母さん、グッジョブ。

俺は内心、母に感謝しつつ琴乃ちゃんに微笑みかけた。

自転車に乗ってきていたので、俺のマンションにおいて歩いて繁華街へ向かう。

「……え？映画が見たい？」

琴乃ちゃんにどこか行きたい所があると尋ねたら、彼女はそう言った。

「はい。先輩と一緒に見たい映画があるんです。ダメですか？」

「オッケーだけど、何系の映画？」

俺が好きなのは派手なアクション満載のハリウッド映画だ。
琴乃ちゃんのイメージからすると、やはり恋愛モノかな？

「……ホラー映画です」

彼女は頬を赤らめて、小さな消え入るような声で呟いた。

「ホラー？怖い系の？」

「はい、そうです。先輩は苦手ですか？」

「いや、苦手というか……琴乃ちゃんは大丈夫なんだ？」

意外な趣味だ、としか言えない。

琴乃ちゃんの見た目的にホラーだと「怖いっ」て感じがするの
だが？

「平気ではないんですけど。何て言っんですか。怖いもの見たさっ
ていうか」

「何となく分かる気がする」

怖いものが苦手な人ほど、怖いものが好き、みたいな？
そっぴや、CMでホラー映画の新作をすると見た気がする。
話題になっているホラー映画か……。

「先輩が苦手ならやめておきますけど」

「いや、いいですよ。全然、大丈夫です。任せてください」

「……震えてますけど？」

怖いものは苦手なんだーっ！！

と、大声で叫びたい気持ちを我慢しながら俺は精一杯の作り笑顔
で、

「問題ないから行こうよ。琴乃ちゃん」

「はいっ。楽しみですな」

俺は全く楽しめそうにないのだが……。

俺に与えられた試練だと思って耐えるしかないのか。

男には好きな女の子の前で意地を張るのも大事なのだ。

映画の上映は昼からだだったので、昼食を先に済ませてから映画館に入る。

話題の映画とあってか、ホラー映画というジャンルながらカップル連れも多い。

トイレも先に行ってきたので少しは耐えられるはず。

「井上先輩……顔色悪いですよ？」

俺の方を笑いを抑えながら琴乃ちゃんが尋ねて来る。
分かって言ってるのなら、彼女は意地悪さんだろう。

「べ、別に何でもないさ」

「そうですか。本格的なホラーらしいので、心臓が弱い方はやめた方がいいらしいです」

「ははっ。だから、変な心配しなくてもいいから。楽しもうじゃないか」

ホラー系の映画くらい見れるっての……ちゃんと見たことがないけどな。

自分から好んで見ないだけで、怖くなんてないんだぞ。

「先輩。怖くなったら私の手を握ってもいいですから」

そつと俺に耳打ちした琴乃ちゃんは何だか楽しそうな顔をしている。

くっ、年上の男としてのプライドがそんな真似をするはずが……。上映開始から20分後、俺はさっそく琴乃ちゃんの手を握っていた。

「……あうあう」

薄暗い映画館、スクリーンに広がる光景と抜群の効果音と音声に俺は驚かされていた。

映画の内容は洋館に閉じ込められた主人公たちが未曾有の恐怖に襲われると言うタイプのホラー映画だった、現在の画面は殺人シーンで目を覆いたくなる。

うぎゃーっ、超怖いつす、リアルに怖くて仕方がない。

これは夜中に見たらひとりでトイレに行けないレベルだ。

「ふふっ」

映画ではなく、震えながら琴乃ちゃんにすぎる俺の姿を彼女は微笑していた。

男のプライド完全崩壊、でも、琴乃ちゃんが楽しんでいるのならそれでもいい。

「……先輩。ここからが本番なので頑張ってくださいね」

小声で俺に言う彼女、俺はその手を強く握り締めながら恐怖と闘う。

……それから先の事はあんまり思い出たくない。

映画館から出た後の琴乃ちゃんは大笑いをしていた。

「……先輩、ものすごく可愛かったです」

終始、彼女にすぎる情けない男を演じていた俺。

普通は立場逆じゃないか、ちくしょーっ!?

怖がる彼女を優しく落ち着かせる理想の男像からかけ離れていた。

「そ、それより、琴乃ちゃんは平気そうだったな？怖くなかったのか？」

映画は大迫力で恐怖倍增、俺としては今日は悪夢に悩まされそうな気配だ。

「怖かったですよ。でも、楽しかったです」

ホラー映画が好きっていうだけあって、恐怖を楽しめるとは……本当に意外な趣味だと言っておこう。

「それに怖がる先輩も、普段は見れませんからね」

「今度はちゃんとした恋愛映画でも見ようじゃないか」

「そうですね。次はぜひ、先輩と楽しめるものを見ましょう」

俺はずっと繋ぎっぱなしだった手に視線を向ける。

「……先輩が痛いくらいに繋いでくるので安心できましたよ」

「ごめん。痛かったか？」

俺が離そうとすると彼女は別の手を添えてやんわりと断る。

「いいえ。せっかくですから家まで繋いでいいですか？」

「ああ……」

めっちゃ可愛いじゃんかよーっ。

俺の事まで気にしてくれるいい子だ、お兄さん、感動中……。恋人ってこんなに楽しくていいものだったのか。

俺は恋人関係に充実感を抱き、感動していた。

俺のマンションについてからは家まで彼女を自転車に乗っておく
る。

その途中で俺は彼女を展望台公園に誘った。

「今回のデート。とても楽しかったですよ」

俺はビビってばかりだったけどな、と自嘲したくなるが。

「俺も楽しかったよ。琴乃ちゃんの意外な一面も見れたし」

「……またデートに誘ってくださいね」

「もちろん。だって、俺達は……」

そこまで言っ言葉を止めると、俺は自分の思いを口にする
ことにした。

「あのさ、琴乃ちゃん。俺、ちゃんと言っていなかったから言わせ

て欲しい」

「何ですか？」

「俺は琴乃ちゃんが好きだ。だから、ホントの意味で恋人になりたいんだ」

片思いではなく両思い、恋人としての始まりの瞬間。

俺の言葉に彼女はきょとんとしていたけど、やがて涙を浮かべていた。

「嬉しいです。先輩がそう言ってくれるなんて……。不安だったんですよ、私が勝手に付き合ってるだけで、先輩はそんな気もないんじゃないかって。好きと言ってもらえるの、夢じゃないんですよね？」

「きっかけはどうにしろ、今の俺の気持ちは本物だよ」

俺はゆっくりと彼女を抱きしめて、深呼吸しながらその瞳を見つめる。

この瞬間を待っていた、夢にまで見たファーストキス。彼女は瞳を閉じて俺に唇を突き上げてきた。

キス、してもいいんだよね？

俺は焦らないようにその唇に自分の唇を重ね合わせる。

小さく水音をたて、重なり合う唇同士、やがて唇を離れた俺は感動の嵐が駆け抜けていた。

「……ファーストキス、だな」

俺が彼女に微笑むと意外な一言を切り出される。

「……え？私は……ファーストキスじゃありませんけど」

真っ赤な夕焼け空の下、俺は氷のように硬直してしまう。
キスが初めてではない……そ、それは、つまり、その？

「ファーストキスじゃありませんよ？」

彼女の素直な言葉にショックを受ける俺がいた。
いまどきの若い子ってそんなに進んでいたのか、というか、琴乃ちゃんって……俺以外に前に彼氏がいたとか？

キスが初めてなのは俺だけだったのか！？

第9章：ゼロかイチか

【SIDE：井上翔太】

琴乃ちゃんに告白してスタートし始めたかに思えた俺達の関係。だが、思わぬことに彼女にはキスの経験があったという事実。べ、別に相手が自分よりも経験があっても悪いわけじゃない。ただ、俺自身……彼女の印象的に意外だったと思ったただけだ。

「ファーストキスじゃありません」

彼女の言葉にある程度の動揺をする。

だけど、やっぱりシヨックなのはシヨックなのだ。

経験の有無は大きい、0と1とは大きく違うものだ。

「へえ、そうなんだ。琴乃ちゃんって前に彼氏がいたりした？」

「……はい？え？あ、あの、何か勘違いしてませんか？」

「勘違い？」

きょとんとする俺に彼女は慌てた様子で言う。

「ち、違いますよ？恋人は先輩が初めてで、キスだって……先輩が初めてなんです」

赤らむ頬から察するに、嘘はついていないようだが。夕焼けがやけに眩しくて俺は目を細めながら、

「……どういうこと？」

「昔、先輩としたことがあります。だから、セカンドキスですね」

「なるほど、そういうことか……って、ええ!？」

俺のファーストキスが10年前だって？

全然、記憶にないんですけど、マジでそんなことがあったわけ？
俺は琴乃ちゃんとの過去を思い出すがそのような事があった記憶がない。

「そんなこと、あった？」

「ありましたよ。先輩は覚えていないでしょうけど」

グサツと突き刺さる一言。

彼女は少し膨れながら拗ねている。

マズイ、思い出せよ、俺。

琴乃ちゃんを傷つけるわけにはいかんのだ。

展開的にあつても不思議ではないが、小学1年の時にキスの意味をどれだけ知っていたかと問われると微妙だ。

「キス、ねえ……?」

どう頑張っても思い出せない事に俺は焦りを感じていた。

このままではいけない。

「思い出せないならそれでもいいです。先輩は私の事、あんまり覚えてくれていないみたいですから気にしてません」

ガーンツ、彼女から見放されかけている!?

これ以上、信賴を落とすわけにはいかない。

俺は必死に記憶をさかのぼると、それっぽい事をした記憶が……。

「ほら、先輩。もういいです。そろそろ、帰りましょう」

「ま、待ってくれ。琴乃ちゃん、ここは思い出さないと」

「別にいいですよ？前にも言いましたけど、ホントに小さな頃の記憶ですから思い出せなくても普通です。私は責めたりしません。ただ、寂しいだけですから」

寂しげな表情を見せられて「じゃ、帰ろっか」なんて言えるはずもなく。

「……あつ」

しばらく考えていて、俺はようやく記憶の断片にたどり着く。それは10年前、琴乃ちゃんとキスをした。きっかけはありきたりなものだったと思う。テレビの影響か、そんなものだったような。

「キス、したことがある。そうだ、この場所で俺は……」

確かにキスのような真似ごとをした、かもしれない。

『……これがキスなの？私の初めてのキス』

恥じらう女の子とキス、人生初めてのキスながら記憶に埋もれていた。

だが、思い出せないのはその光景だ。

本当にあれは琴乃ちゃんだっただろうか？

なぜだか、俺は違和感のようなものを抱いていた。

記憶の中で俺は大事な何かを忘れているような気がするのだ。

「……琴乃ちゃん」

「もういいです。思い出は思い出です。先輩、そんなに昔の事を思い出さないでください。私も、意地悪しませんから」

「意地悪？どういう意味だ？」

俺が尋ねると彼女はそつと俺の身体に身をゆだねて来る。

「……最初からそうでした。私は先輩を試していたんです」

「試す？俺を試していた？」

潤んだ瞳で上目づかいをする彼女。

「確かめておきたかった、ということです。10年前、私は先輩を好きになりました。その相手が私を覚えていくれているかどうか。それが知りたかった。普通なら思い出せなくて当然なんです。だから……」

「ごめんな。俺って記憶力悪くてさ。その、琴乃ちゃんを傷つけた」

「いいえ。私もこだわりすぎていました。過去は過去です。今、先輩が私を好きだって言ってくれたのは過去の私じゃない、今の私を見て言ってくれたんですよね？」

「ああ、そうだ。そうだよ、琴乃ちゃん」

それだけははっきりと言える。

昔も初恋めいたものがあつたかもしれない。

だけど、今はそれ以上に琴乃ちゃんが好きだと言つ気持ちがある。

「もう昔の話はあまりしないようにしましょう。先輩に“色々”とされた記憶はありますけど、過去の事です」

「ちよつと待つて。いろいろつて何？俺、何かした？」

「……いろいろは、いろいろですよ。昔の事です。気にしないでください」

過去の俺よ、琴乃ちゃんに何をした！？

「そんなに慌てなくても変なことじゃありません。何だかホツとしたら、喉が渴きました。先輩、ジュースでも飲みませんか？」

「そつだな。あつ、俺が買つてくるよ。ここで待つていて」

俺は恥ずかしさもあつて、さつさと自販機の方へと歩きだす。

過去は過去、か……。

そつだよな、俺が好きになつたのは昔の琴乃ちゃんの記憶だけじゃない。

大事なのは今なんだ、過去の思い出よりもたくさんの思い出を作ろう……そう決めていたじゃないか。

これからの幸せな日常の始まり、俺はそれを感じていた。

俺達の過去が、俺と琴乃ちゃんの関係にどれほど重要な意味を持

っていたかを知るのは、まだまだ先の話だった。

……。

翔太の後姿を見つめながら、琴乃は小声で想いを呟いていた。

「先輩、思い出せなくて当然ですよ。だって、私は……」

彼女は朱色の夕焼けを眺めていた。

それは10年前のそれと変わらない光景、10年という時間だけが過ぎていた。

「キスしたんだ、私。嬉しいけど……何でこんなに寂しいんだろ」

先ほど、互いに触れ合わせた唇を指先で撫でる琴乃。

「ずるい、よね。怒るかな？私は、本当にずるいな……。いつまで先輩をだまし続ければいいの」

琴乃は静かに瞳をつむり、誰もいないその場所で言葉を口にした。

「ごめんね。私、それでも先輩が好きだから、この“嘘”をつき続けるよ」

第10章：記憶の彼方へ前編

【SIDE：井上翔太】

キスの一件から俺と琴乃ちゃんの関係はかなり深まった。

キスという行為は心を許すものなのか。

きっかけひとつで俺は彼女を本気で好きになっていた。

俺の可愛い恋人、琴乃ちゃん。

今ではすっかりと自分の心の中に彼女が大切な存在としている。

交際開始から2週間が経過してまもなくGWも近づく、4月下旬。

「井上先輩。お昼一緒でもいいですか？」

「いいよ。今日も食堂にする？」

「購買でパンでも買って外で食べませんか？今日はいいお天気ですから」

琴乃ちゃんの提案で俺達は適当にパンを買って外で食べる事にした。

向かった先は屋上、俺達以外にも食事をする人間はいるが、数は多くない。

空いているベンチに座り、食事することにした。

「良い風だな。この学園の屋上って風が涼しいから好きだな」

思い返せば、琴乃ちゃんと出会ったのもこうして涼みに来たのがきっかけだ。

「風の通り道なんでしょうね。私も好きな場所です」

俺は総菜パンを食べながら青空を見上げる。

本格的に春になり、温かい日々が続いている。

寒がりな俺としては心地よい春の季節だ。

「先輩。そう言えば、昨日の夜にお母さんから聞いたんですけど、3日ほど、おばさんが不在になるって本当ですか？」

「ん？ああ、本当だよ。俺もその話を今日の朝、聞かされた。何で、理沙おばさんの方が先に知ってるのかは微妙だが」

話は今日の朝まで遡る。

俺は今朝の事を思い出していた。

……。

今朝、登校の準備をしていたら、母さんが言ったのだ。

「あ、言つのを忘れていたわ。翔太。私、今日から3日ほど、この家に帰らないから。いつものように自分でしておいて」

「……別にいいけど？夜勤が続くのか？」

看護師なんていう仕事をしていると、夜勤が連続つても珍しくはない。

地味に大変な仕事だというのは分かってるつもりだ。

大抵、夜勤のときは俺が食事をしたり、最低限の家事をこなす。

料理は苦手なので自炊はしないが、掃除洗濯は人並みにできるよ
うになっていた。

「夜勤というより、私、仕事場が変わるのよ。ほら、隣街に私立病
院があるの知ってる？あそこで勤務することになって」

「え？そうなのか？」

隣街と言ってもうちからだとなんかに遠い場所ではない。

評判も高いし、有名な先生も多い私立病院だ。

もちろん、私立なので金は高いが設備は充実していると聞いている。
る。

そこで働くと言う事は、悪い話ではない。

「そう。私は忙しいから翔太は適当にしておいて」

「もっと前から言ってくればいいのに」

「別にいいでしょ」

あっさりと言われてしまつと反論できない。

どうせいつもと変わらないので、無駄に慌てる必要もないのは事
実だ。

「……それと、これは……いえ、何でもないわ」

母さんはため息をつきながら何かを言い淀む。

「言いかけて止められるとすごく気になるのだが？」

「翔太は知らなくてもいいことよ。何で今頃になって……はあ」

彼女はもう一度嘆息すると、「さっさと学校に行きなさい」と促す。

「へいへい。俺は俺で適当にするさ」

鞆を持って俺は出かけようとする。

横目で母の顔色をうかがうが、やはり複雑そうな顔をしていた。母さんが小声で囁いて俺の耳に届いたその言葉。

「何で今頃になってあの人は……」

……あの人って誰だ？

母さんが嫌がる（？）相手って想像つきにくい。

「誰かと再会したってことか？誰なんだろうね。どうせ、俺には関係ないだろうけど」

母さんのプライベートまで気にする俺ではない。

それよりも俺は遅刻しそうな時間だと気づいて慌てて学校に登校したのだった。

……回想終了。

というわけで、しばらくは自由の身だ。

2、3日の事だからいつもとそんなに違いはないけどね。

琴乃ちゃんはカスタードがたっぷり入ったクリームパンを美味しそうに食べる。

俺も焼きそばロールを食べ終わり、カフェオレに手を伸ばす。こうして屋上で食事するのもたまにはいいな。

「おばさんって看護師さんでしたよね。夜勤も多そうですけど、先輩っていつもはどうしているんですか？自炊とか？」

「してない、するはずないって。俺、包丁で野菜とか切る事できても炒め物とか、鍋とか使うのが超苦手でさ。味付けとかワケ分かんなさすぎる。大さじ1杯半ってどんだけだ、とか悩んだ時点で負けた。細かいことって苦手なんだよな」

料理ぐらいできれば、と挑戦した時代もあったが、結果、俺には向いてないと諦めた。

もとい、「キッチン汚すならキッチンに入るな」と母さんから禁止された。

今では大抵、夕食はファミレスかコンビニ弁当のお世話になっている。

「ふう、ごちそうさまでした」

ふたりとも食事を終えてからのんびりとした時間を過ごす。思い出したように、琴乃ちゃんは話題を先ほどの話に戻した。

「そうだ。あの、先輩。今日の夕食は私が作りましょうか？」

「夕食を作る？」

「はい。先輩さえよければ、私が作ってもいいですよ。お母さんか

らその話を聞いた時におばさんから先輩の面倒を見るように頼まれていたんです。井上先輩は放っておいたらどうせ不規則な生活をするだらうって」

「……俺は子供か。やれやれ。琴乃ちゃんにも変な迷惑かけてるな」

昔と違うのだから、ひとりで適当に生きていける。

……そりゃ健全な生活ができる確証はないけどな。

「迷惑じゃないですよ。私も先輩のお世話したいですし」

「おっ、今の言い方。ちょっとグツと来たかも。ホントに琴乃ちゃんはいいい恋人だな」

「ふふっ。褒めてもらえると嬉しいです。それで、どうしますか？」

別にいつも通りに外食でもかまわないが、まだ食べた事のない恋人の手料理が食べてみたいという期待もある。

琴乃ちゃんって料理がうまいと聞いているので、何気に期待していたのだ。

「それじゃ、琴乃ちゃんに頼んでもいいかな？」

「はい。任せてください。それじゃ、放課後は買い出しですね」

「そうだな。琴乃ちゃんの料理は楽しみだ」

俺がそう言つと彼女は照れくさそうに笑う。

「私の得意なのは和食ですけど、先輩の好みは？一応、一通りは作

れますから」

「琴乃ちゃんの得意なのでいいよ。俺って別に好き嫌いとかないからさ」

「……それじゃ、私が考えておきますね」

いつ、すごくいつ。

恋人が手料理作ってくれるシチュエーションとか想像したこともなかった。

それが今、現実になろうとしている。

恋人って実に素晴らしい。

「楽しみにしているよ。琴乃ちゃんがどっという料理を作ってくれるのか」

「期待に応えられるように頑張りますね」

俺は期待に胸を膨らませながら放課後が来るのを待ちわびていた。

第11章：記憶の彼方へ後編

【SIDE：井上翔太】

琴乃ちゃんが俺のために手料理をふるまってくれと言うっ。

恋人がいて本当に良かった。

家に帰る途中、俺達はスーパーによりながら材料を買いそろえていた。

「お魚メインがいいですか？それともお肉メインの方が好きですか？」

「出来れば肉がいいなあ。あんまり魚は好まない」

「分かりました。だとしたら、この辺の材料で考えます」

彼女はメニューを決めたようで次々と材料をカゴに入れていく。カゴ持ちの俺は彼女の行動を見ているだけだ。

普段から料理しているようで、買い物もすぐく慣れている。

俺なんて同じ野菜でもどれがいいとかさっぱり分らん。

彼女はジャガイモをカゴに入れると思いだしたようにポツリとつぶやく。

「先輩とこうしてお買い物していると……」

「してる？」

「何だか新婚さんみたいな気分になりませんか？」

純粋な女の子って素晴らしいです。

照れくさそうに微笑する琴乃ちゃんが可愛過ぎる。

……めっちゃいいっす、最高ッ。

男としてこれだけ女の子に好かれて嬉しくないわけがない。

「何ていうか、ずっと恋人に憧れていたんですよ。先輩の事が好きって気持ちもそうですけど、昔からの夢だったんです」

「……恋人と買い物をする事が？」

「それを含めて、一緒に何かを楽しむことです。街中で見かけるカップルとか、楽しそうだなって思ったことありません？自分もしてみたいなってずっと思っていて。実現できるなんて思ってたんですけど」

それはある、俺だってそうだ。

恋人に憧れないと言う男はいないだろう。

「先輩のおかげでまたひとつ私の夢が叶いました」

「あははっ、そう言ってもらえると嬉しいな」

「もうしばらく買い物に付き合ってくださいね」

傍にいただけでいい。

よく漫画とかで聞くセリフだが、実際に体験して初めて知った。好きな女の子が傍にいただけで心が満たされる。

恋愛って今まで自分に関係なかったから興味なかったけど、いいものだな。

「……先輩。別に待つてくれていてもいいんですよ？」

買い物を終え、家に帰った俺達はキッチンで夕食作りの最中だ。狭いキッチンなので、ふたりが並ぶのも結構キツイ。だが、せめて少しくらいは手伝うべきだろう。

「野菜とか肉とか包丁で切るくらいはできる」

「……ホントですか？」

「琴乃ちゃんの邪魔はしないってば」

「いえ、先輩がお手伝いしてくれるならそれでいいんです」

俺は包丁で野菜を切り刻んでいく。

今日のメニューは肉じゃが、サラダ、お味噌汁……極めて基本的な和食メニューである。

和食って言えば煮物系だよなあ。

俺は地味に慣れた手つきで包丁を動かして野菜を切る。

「うわっ、先輩、すごく上手に切れているじゃないですか!？」

「……まあ、これくらいはできるさ」

料理は出来ないが雑用だけは子供の頃から母さんに強制させられていた。

真面目にやらなきゃ母さんに怒られてきたからなあ。

母子家庭も大変です、いろいろと母さんの指導が怖かった……。

「先輩のおかげで早くできそうですね。ここからは任せてください。先輩の好みの味付けって濃いめですか、薄めですか？」

「うーん。俺は濃いめが好きかな」

「分かりました。そうします」

俺は自分のやれる範囲の事を終えたので、ここから先は琴乃ちゃん任せだ。

食器や箸の準備をして大人しく待つことにする。

「……琴乃ちゃん、か」

俺はエプロン姿で調理する彼女の後姿を眺める。

いつもと違う光景、そこに立つ人間が変わるだけで雰囲気が大きく変わる。

料理中の彼女に俺は満足しながら出来上がるのを待つ。

自分のために料理を作ってもらう事って、意識した事がなかったけれど幸せな事だ。

「琴乃ちゃん。エプロン姿、可愛いね」

「え？せ、先輩、変な事を言わないでください」

「変なことじゃないよ」

「もつつ、調子いいこと言って……。あんまり私を喜ばさせすぎないでください」

本当に可愛いから言っただけなんだが。
今までこんな風に女の子と会話した事がなかったから、どうにも
恥ずかしい。

「……俺も恋人ができて変わったかもな」

自分の変化、それもまた恋愛の影響を受けているようだ。

琴乃ちゃんの手料理は予想していたよりもずっと美味しかった。
味付けも俺好みに仕上げてくれた。

これがあと数日続くってのはマジで嬉しい事です。

「今日はありがとう、琴乃ちゃん」

いつものように彼女を家まで送る。
すっかり辺りは暗くなり始めていた。
時刻は7時過ぎ、日も暮れてきている。

「先輩の役に立てるのなら嬉しいですよ」

「……十分だよ。その、明日も頼んでいいかな？」

「はいっ。任せてくださいね」

琴乃ちゃんは尽くしてくれるタイプだからすごくこちらとしては
有難い。

「あれ、こっちの道は今日は使えないのか？」

琴乃ちゃんの家近所まで来て、住宅街へ入る道が「工事中」と看板が立っていた。

「朝までは使えたはずですけど……道路工事中みたいですね？」

「ここからだとうするんだ？」

「こっちの別の道から行けばいけますよ。家に帰る時は、普段はあまり使いませんが、こちらの方が近いんです。実際、私は登校する時はこちらを使いますから」

ただし、急な坂になっているので、帰る時はあまり使いたくはないらしい。

なるほど、この坂を毎日のぼって帰るのは大変そうだ。

行きはよくても帰りは地獄って奴だな。

ふたりで自転車をつきながら坂道を登っていく。

「この道ってあの展望台公園の反対側になるんだっけ？」

「そうですね。あちら側の道は住宅街を回りこむようにして上りますが、こちらは直接住宅街の中を通ってるんです」

高台の上付近にある彼女の家はまだ先だ。

「あつ……」

ふと、琴乃ちゃんが声をあげて立ち止まる。

その視線の先には古びた教会があった。
錆ついた鉄扉、草木は生い茂り、つたが壁をはっている雰囲気のある教会だ。

「ボロ教会？」

「ダメですよ、先輩。そう言う事を言っちゃダメなんです」

「ごめん。ここって、琴乃ちゃんの知ってる所？」

「うちの近所ですから。小さい頃はよく集会みたいなものがあって、皆でいろいろとしましたよ。神父さんも優しい方で……」

俺達が話していると、庭の方から誰かがこちらに歩いてくる。

好々爺という言葉がよく似合いそうな人の良さそうなお爺さんだ。

「おや、琴乃さんかい？久しぶりだねえ」

「神父様、お久しぶりですっ」

神父様が……いかにもそれっぽい服装をしている。

彼は琴乃ちゃんと俺を見比べるようにして言う。

「この男の子は琴乃さんの恋人かな。キミも恋人のできる年頃になったのかい」

「はい。お付き合いさせてもらっていますよ。私の大切な人なんです」

そんな風に言われると照れないはずがない。

「そうか。私は川島かわしまと言う。この教会で長年、神父をしているものだ。琴乃さんは子供の頃によくこの教会に遊びに来ていたんだよ。キミの名前を教えてもらってもいいかい？」

「あつ、はい。俺は井上翔太です。琴乃ちゃんの学校の先輩でもあつて……」

俺が名乗ると彼は「井上……？」と何か思い出すような仕草を見せる。

やがて、川島さんは俺に言うのだ。

「井上君か。キミ、昔、この教会に来たことがあつただろう？覚えていないかい？」

「……え？」

「あれは何年前だったかな。琴乃ちゃんが連れて来たんだ、そうだったよね」

俺がここに来たことがある？

隣にいる琴乃ちゃんに視線を向けると彼女はゆっくりと頷いて、

「ええ。昔に何度か先輩もこの場所に来ています」

「やっぱり、そうだったかい。明るい男の子が琴乃ちゃんの傍にいたのを覚えているよ」

古びた教会はどうにも俺の記憶にない。

「ここに来たことがある……?」

俺はもう一度、教会を眺めながら自分の過去を振り返ろうとする。
記憶の彼方に俺はまだ忘れていることがたくさんあるようだ。

第12章：お兄ちゃん

【SIDE：井上翔太】

古びた教会、俺はそこに10年前に来たことがあると言う。
神父様の案内で俺達は中へと入ることにする。

「へえ、中は綺麗なものだ」

外は手入れがされていなかったので心配したが内装は綺麗だ。
ステンドグラスに礼拝堂、教会ってこんな風になっているのか。

「今でも月に何度かミサをしたり、人が集まるからね」

なるほど、そりゃそうか。

教会内部を歩いていると、俺はどことなく懐かしい気持ちになる。

「……覚えていないけど、ここに來た気がする」

「先輩は礼拝堂に来たら前の席に座っていたんですよ」

「何のために？」

琴乃ちゃんの話によると俺がここに來たのは子供たちが集まった
時だそうだ。

今でも近所の子供たちを集めて遊んだりするらしい。

「そう言えば、琴乃ちゃん以外にも俺は何人かの子に会ったような
……」

うーむ、ホントに昔の記憶って覚えていないものだな。
何か自分の記憶力に普通にショックを受けるぞ。

「ここに座っていたのか」

俺は昔よく座っていたと言う椅子に座ってみる。
礼拝堂の真正面のステンドグラスがよく見える位置だ。
正面には祭壇っぽいもの、右側にはオルガンがある。
琴乃ちゃんと神父様が雑談をしているので、俺はそれを横目に昔を思い出そうとする。

「お兄ちゃん」

俺は誰かに呼ばれた気がして振り返る。
今の幼い女の子の声は何だろうか？
辺りを見渡すも、琴乃ちゃんと神父様以外はいない。

「気のせいかな？」

変に疲れているのだろう。

気のせいだと思い込み、俺が祭壇に触れた時、

「翔お兄ちゃん」

聞こえた、今度は俺の耳に直接響いてきた。

「……なっ!？」

俺はびっくりして祭壇から手を離す。

「何だ、今は……？」

幽霊か、変な怪奇現象なのか？

そんなことはない。

それは昔の記憶、俺の脳裏に蘇った記憶のひとつだった。

「お兄ちゃん、か」

間違いない、俺はここで誰かにそう呼ばれていた。

琴乃ちゃんは『翔ちゃん』と呼んでいたはずだから、多分違う子だ。

俺には心あたりがひとりだけある。

「あの写真の女の子……？」

俺を「お兄ちゃん」と呼んでいたなら年下だろう。

俺と彼女はここで会ったことがある。

「……違う、それだけじゃない」

俺は何かもつと大事なことを忘れている気がする。

「この場所で俺とその子は何かをしたのか」

記憶にないがここは俺にとって何か大事な思い出のある場所のようだ。

どうして、思い出せないんだろうな？

「誰なんだろう？」

琴乃ちゃんに出会ってからどうにも俺には違和感みたいなものがある。

思い出せそうで思い出せない。

いくら10年前とはいえ、あの夏休みは特別なものだったはずだ。ひと夏の記憶を覚えていない事はないはずなのに。

「……どうかしたのかな？」

「いえ、どこか懐かしさを感じたので」

「そうか。いずれ思い出す時が来るかもしれない。井上君、また来なさい」

「ええ、そうさせてもらいますよ」

お兄ちゃん、俺をそう呼んでいた相手が誰なのか。

神父様が俺の事を知っているのなら過去の事も知っているかもしれない。

琴乃ちゃんがない時にでも聞いてみるとしよう。

「先輩、そろそろ行きますよ。それじゃ神父様。また来ますね」

俺達が外を出ると周囲は完全に夜になっていた。

綺麗な月明かりに照らされて俺達は再び自転車に乗ろうとする。

「あ、あのさ、琴乃ちゃん」

「はい？」

俺は直接本人から聞くのはやぶさかではないと思ったのだが、気になって尋ねていた。

「昔、俺を『お兄ちゃん』って呼んでいた子っていた？」

核心を突く質問に俺なりに緊張する。

琴乃ちゃんは軽く視線を俯かせて言う。

「……何で、そんなことを？」

「あの教会でそんな記憶を思い出したんだ。その、どうしても気になつてさ」

「どんな事を思い出したんですか……？」

これまでと違い、悲痛な面持ちで俺を見つめる彼女。

俺は何か聞いてはいけない事を聞いているのか？

「具体的には全然、思い出せないんだけど……俺をお兄ちゃんって呼ぶ子がいた気がしたんだよ。気のせいかな？」

「……っ……」

彼女は沈黙して何か思案してから言った。

「いましたよ」

「え？本当に……？」

「ただ、先輩の記憶に誰がいるのか、は分かりませんけどね」

「それはどういう意味だ？」

俺の記憶に誰がいる？

その答えは簡単だった。

「だって、あの時は私の友達も何人か先輩と接していましたから。その中には何人か先輩の事を『お兄ちゃん』って呼んでいた子もいました。多分、ですけど先輩の記憶になるのはその子達じゃないでしょうか？」

「なるほど……特別な意味はないってことか」

言われてみればそうかもしれない。

俺が勝手に特別に思っていただけで、現実はその特別な事などないのだ。

年下の子と遊んでいれば、そう呼ばれる事もあるだろう。

「琴乃ちゃんは昔、俺の事を『翔ちゃん』って呼んでいただろう？」

「……え、ええ。そうでしたね。変な呼び方ですみません」

今になって「ちゃん」付けされているわけじゃないので構わない。俺が気になるのは今の呼び名の方だった。

「昔は名前だったのに、今は井上って呼ぶじゃないか。最初に俺に会った時に言ったよね。名前で呼んでほしいって」

今は井上先輩って呼ばれるから、何か気になっていたんだよな。

「……そ、それは、だって……恥ずかしいですし」

「琴乃ちゃん。俺も恋人には名前で呼ばれたい」

俺の申し出に彼女は「……翔太先輩」と小さな声で名前を呼ぶ。

「あつ、今、琴乃ちゃんの気持ちが分かった気がする。やっぱり、名前で呼ばれると嬉しいな。親しい感じがするし。これからもそう呼んでくれたら俺も嬉しい。どうかな？」

俺の言葉に頷くゆつくり琴乃ちゃん。

彼女を家に送り届けるまでに何度か練習したりして、ようやく琴乃ちゃんから呼び名を変えてもらうことができた。

それよりも、俺を「お兄ちゃん」って呼んでいた子は誰なんだろう？俺は新たな疑問を抱きつつ、自宅に帰るまで昔の事を思い出そうと悩んでいた。

……何一つ、思いだせなかったけどな。

第13章：Forget me not〈前編〉

【SIDE：井上翔太】

……。

「……あ、あの、翔お兄ちゃん」

控えめな少女が俺の服の袖を掴んでいた。

俺は「どうしたの？」と彼女に声をかける。

普段から大人しい彼女、俺に話しかけて来るのは珍しい。

「翔お兄ちゃん、一緒に来て欲しいの」

「俺と一緒に？どこにいけばいいんだ？」

俺よりも年下の彼女は俺の手を引いていく。

「来てくれたら、分かるから……」

しばらく歩いていくと見えたのは教会だった。

何度か来たことのある教会、いつもほとんどいないのに今日はたくさん人がいた。

「人がいっぱいいるけど、何かあるの？」

「あのね。結婚式があるんだって」

「結婚式？へえ、そうなんだ」

よく見れば中には花嫁姿の女がいて、彼女の周囲に皆が集ま
っているようだった。

ふたりで綺麗だね、って話会っていた時だった。
そつと花嫁と新郎が互いに見合つてキスを交わす。

「キスつてあんなのなんだ？はじめて見た」

話では聞いたことがある。

キスっていうのは好きな人同士が唇を触れ合わせる行為だ、と。

「私も……見たのは初めて」

ほんのりと顔を赤める少女。

「ああいうのって楽しそうだね」

「楽しい……？」

彼女は何か考えるような顔をしている。

そして、普段の彼女からは想像もできな一言を告げる。

「翔お兄ちゃん。あのね……私とキスしてみない？」

教会の鳴り響く鐘に消されそうな小声で彼女は言った。

……。

「うぐっ、痛い」

俺はベッドから落ちて、目が覚めた。

こつ言つ形での目覚めほど目覚めが悪い時はない。
変に寝がえりでもうつたのだらう。

時計を見るとまだ朝の6時半過ぎ、いつもでも寝ている時間だ。

「……何か夢を見た気がする」

いつものしょうもない夢じゃなくて、何か意味のあるような……。

「何だっけなあ？」

俺は起き上がりながら考えて見るが、夢なんて思いだせないのが普通なのだ。

分からないものは仕方ない、と俺は諦めて私服に着替える。

今日は休日、午前中だけ琴乃ちゃんに会うことにしている。

午後からは彼女が都合が悪いので朝だけでも会う予定になっている。

「さあて、少し早いが出かける準備だけでもするか」

母さんが家を留守にして今日で3日目。

今日の夜にはこちらに帰ってくるらしい。

俺は食パンをトースターで焼いている間に身支度を整えておく。

「……むう、少し焦げすぎたか？」

顔を洗ってから取り出した食パンは焦げ目がついている。

まあいい、真っ黒じゃない限りは食べられるだろ。

俺は適当にジャムを塗って食べながら、アルバムを眺める。

このアルバムは前回の捜索で見つけたのとは違う、小さなものだ。

母さんがいないのもう一度探して見たら見つかったものだ。

主に俺の子供時代（推定7歳程度）の写真が飾られていた。

琴乃ちゃんや謎の女の子の写真もある。

それ以外にも数人の見知らぬ子がそこには写っていた。

「琴乃ちゃんの言ってた通りだな。確かに俺はあの教会に行ったことがあるらしい」

その教会前での写真は琴乃ちゃんではなく、謎の女の子との写真が多い事に気づく。

「教会絡みなのか、この子は……？」

だとしたら、あの神父様に聞いてみるのが一番だろう。

琴乃ちゃんにはあんまりこの話はしてはいけない。

それはこれまでに何度か話して思ったことのひとつだ。

過去の事を気にしてはいけない、彼女は俺にそう言った。

けれど、俺にはどうしても思い出せない過去がある。

この少女が誰なのか、それが知りたいだけなんだ。

「琴乃ちゃんが嫌がる相手……誰なんだ？」

きっと彼女は俺がこの少女の正体を知るのを望んでいない気がする。

隠された意味が必ずあるはずだ。

……どんな意味があるのか、確かめたいだけなんだよ。

琴乃ちゃんの家で、理沙おばさんと琴乃ちゃんのふたりと雑談をしていたら、あつという間に時間がきた。

昼食と一緒に取ってから俺は帰ることにした。

「すみません、先輩。今日は時間がなくて」

「仕方がないよ。これから、家族で用事があるんだろ？」

「今の私は先輩と一緒にいる方が大事なんですけどね」

彼女は苦笑しながら、「また明日、会いましょう」と俺を見送る。俺は彼女の家から出たのんびりと自転車を走らせる。

実は俺にはもうひとつ、今日は自分なりに予定を立てているのだ。それは、教会の神父様に会うことだった。

もう一度、ちゃんとあつて話をしてみたい。

俺の忘れてしまった記憶を少しでも思いだせるように。

「……あれ、神父様？」

教会前についたが、神父様は何やら作業中だった。

老人が持つには重い箱を持ちながら何かをしている。

「おや、井上君かい。今日は琴乃さんに会いにきたのかな？」

「ええ、会ってきた所です。その帰りなんですけど……何をしていますか？」

「教会の修理やら、草むしりなどだよ。ここの所しておらんかったからなあ。おかげで教会もすっかり古びてしまつて……。あと1カ月ほど先のことだが、この教会で結婚式を挙げる予定が入つてねえ。久々に手入れをしようとしているんだ」

なるほど、結婚式をするのにこの外面では都合が悪いわけだ。

塗装がはげた門、古びた外観の建物にはツタが生い茂り、草は生え放題だ。

せつかくの式を前に見栄えを良くしようとするのは当然だろう。いわゆる6月の花嫁つて言うのでこの時期は結婚式が多いらしい。

「毎年、この時期だけ、こんな教会でも結婚式をあげたいと言つてくれる人がいる。10年前までは普通の時でも受けていたのだが、なにせ私も歳をとつてね。今では6月くらいしか受け付けてはおらんのだ」

「そうなんですか。あつ、その、俺も手伝いましょうか？ どうせ、今日は暇ですから」

「いいのかい？」

「ええ、力仕事なら俺がしますよ。任せてください」

俺がそう言うとな、「キミは優しい子だな」と神父様は嬉しそうに笑う。

俺にとつても彼から話を聞きたいと思つていたので好都合だ。さつそく作業開始、まずは古びた門のサビを落として再塗装しなおす作業からだ。

神父様と協力しながら門をしあげていく。

「……昔の話なんですが、俺の事って覚えていますか？」

「ああ。覚えているよ。琴乃さんの家にひと月ほどだけ預けられていたんだろう？」

「ええ、そうらしいです」

「この教会には当時、近所の子供たちがよく集まっておつてね。ひとりだけ、見慣れぬ子が琴乃さんに連れられてきたのだ。すぐに子供たちと親しくなり、ここへ訪れるようになった。私が覚えているのは琴乃さんが、初めて“男の子”と遊んでいる姿を見たからだよ。だからよく覚えている」

俺は「初めて？」と聞き返してしまう。

昔の琴乃ちゃんの性格なら男女問わず、仲のいい子はいそうだったが。

「あの子は昔から男の子が苦手だったんだ。それが、キミだけは違った。優しさを感じ取ったのだろう。自分から手を取り、この教会に連れてきた。あの頃からきつと、彼女はキミに好意を抱いておつたのかもしれない」

俺が初めて、この教会に来たのは10年も前のこと。

薄っすらと記憶を思い出しかけてきた気がする。

俺は門に白いペンキを塗りながら語る。

「……琴乃ちゃん以外に、俺が親しくしていた子はいましたか？」

「琴乃さん以外に？変なことをきく……ん？」

すると神父様はなぜか黙り込んでしまう。

もう一人の少女の事を聞こうとしていたのだが、彼でもダメなのだろうか？

「前にも言っていたがキミは、過去の事をまったく覚えていないのかい？」

「残念ながら。どうしても思い出せていなくて。琴乃ちゃんと遊んだ記憶はあるんですが……他に誰かと遊んだと言っ記憶がほとんど思いだせないんですよ」

「……なるほど、キミはそう思い込んでいるのか。ならば、私がとやかく言っ事ではないだろう。井上君、琴乃さんの事が好きかい？」

「え？あ、はい。好きです」

いきなり言われたので俺は軽く照れながら言っ。

「その気持ちを大事にしなさい。今のキミに必要なのは過去ではない。今の心だけだよ」

彼は落ち着いた口調でそう言っ、「そろそろ休憩にしようか？」と話題を変える。

どうやら、はぐらかされてしまったようだ。

「もうこんな時間だったんですね」

「疲れだろう？おかげですいぶんと作業がはかどった」

既に作業開始から1時間半が経過していた。

ペンキを塗り終えた門は先ほどよりもずっと綺麗に見える。

残りはこのツタと草むしりをすれば見た目的には綺麗になるだろう。

「少し、待っていなさい。冷たい物でも入れてこよう」

神父様が中に入ってしまったので俺はしばらく外で待つ。

「……神父様にもはぐらかされた、か。こりゃ、ホントに何かあったのか？」

神父さまは「そう思いこんでいるのかい？」と俺に言った。

俺の過去、10年前に何があっただんだ？

俺はただ過去を知りたい、それだけなのに。

そんな時だった、俺の視界がいきなり真っ暗になる。

「え？」

慌てる俺の顔に触れるのは手の感触にドキツとする。
そして、“その子”は明るい声で俺に言った。

「ふふつ。だあれ、だ？」

……いや、全然分からないけど。
キミは一体、誰なんですか？

第14章：Forget me not〈後編〉

【SIDE：井上翔太】

『Forget me not』。

忘れな草、と言う花の名前だ。

花言葉は『私を忘れないでください』。

同じ言葉を俺は過去に誰かに言われた気がする。

『私の事、忘れないでね』

琴乃ちゃんと再会するまで、俺は彼女の事を忘れていた。

残念ながら彼女との約束を破ってしまったのだ。

今では少しずつ思いだしてきてはいる。

だが、俺にはまだ違和感のようなものがあつた。

どうしてそう感じるのかは分からないけどさ。

写真に写る大人しそうな美少女が誰なのか？

琴乃ちゃんはなぜ特定の過去に触れると嫌がるのか？

分からないことが多い中で、覚えていることはある。

俺は“もう一人”の女の子と再会を果たす。

教会で休憩中の俺にある再会が待っていた。

「ふふっ。だあれ、だ？」

笑い声と共に俺の瞳を手で覆い隠される。

真っ暗になる視界にびっくりするが、すぐに誰かが悪戯してきたのだと気づく。

「……誰だ？んー……って、分かるわけないじゃないか」

「そうかな？当ててくれたらすごいなって思うよ」

「……ヒントをください」

「ヒント？ヒントはね……久しぶりだね、“翔お兄ちゃん”」

俺の再会を祝う女の子の声。

「翔お兄ちゃんっ」

俺が知リたかった「翔お兄ちゃん」って言う呼び方をする相手。

まさか彼女があの写真の女の子だっていうのか？

早く顔を見たいと言う期待と裏腹に俺には相手が誰か想像もできない。

「……うう、分かりません」

だが、どう考えても記憶にはなかった。

「おっ、引つかからなかったね。ふふっ、だって、私はそう呼んでなかったし」

「ガクッ。な、何だよ？紛らわしい……何て呼んでいたんだ？」

目隠しされながら俺は相手を思い出そうとする。
こんなことをするような子はいたっけ？

「それじゃ、改めて。久しぶりだね、翔太くん」

だけど、その呼び方には覚えがあった。

「……もしかして、麻由美なのか？」

「正解つ。よくできました」

彼女は俺から手を離す、俺は明るくなった視界をすぐに後ろの彼女へ向ける。

そこに立っていたのはいかにも活発そうなスポーツ系の美少女。
雑賀麻由美（さいか まゆみ）、俺がかつてよく遊んでいた相手だ。

この子の事はすぐに思い出せた。

「本当に久しぶりだな、麻由美？」

「うん。おじいちゃんが翔太くんが来てるって言ってたから。はい、まずはジューズのプレゼント。教会の修復を手伝ってくれたんだって？ いいところあるじゃない」

「暇だったからな。ていうか、おじいちゃんって神父様か？」

「そうだよ、知らなかった？ ここの裏に私の家があるの」

麻由美とはよく公園の方で遊んでいた子だったので初耳だ。
この教会の繋がりにはちゃんとあったんだな。

「あのさ、琴乃ちゃんとは知り合い？」

「知り合いも何も、幼馴染だし。私も翔太クンと高校も同じだよ。こっちゃんが翔太クンと恋人になった事も知ってる。普通に相談受けてたもん。断れられるかもって不安だったからよかったよ。で、私もそろそろ会おうかなって思ったの」

「そうだったのか。……こっちゃんって？」

「琴乃のこと。昔からそう呼んでいたの、覚えてない？」

うーん、覚えてません。

何て言つと、琴乃ちゃんにものすごく失礼だろうか。

「俺、琴乃ちゃんの事ってあんまり覚えてないんだ」

「ひどっ！？あんなに小さい頃から慕っていたのに？昔は“3人”でいた事が多かったからかな……それでも覚えていないってひどすぎ。まさか、こっちゃんにその事を言ったりしてないよね？」

「……ごめんなさい」

俺がそう言つと麻由美は呆れた顔をして俺を責める。

「そりゃ、こっちゃんも傷付くわ。そーいう所、変わってないね。翔太クンらしいや」

「おいおい、俺だって少しは成長してるっての」

「あははっ。だって、昔もよくこっちゃんを困らせてたじゃない」

くすつと笑う彼女に俺は鼻先をかく。

麻由美とは10年ぶりの再会だというのに、全然そんな気がしない。

彼女の気さくな性格がそうさせているのだろう。

「これで鈴音がいれば……皆揃うのにね」

「鈴音？鈴音って誰なんだ？」

俺は彼女に迫ると、「な、何？」と困った様子を見せる。
失礼、つい勢いで迫ってしまった。

だけど、俺には大事な名前な気がする。

「鈴音は鈴音だよ？今は高校違うし、全寮制の高校だから、こっちにいないけど。私達、4人でよく遊んだの覚えていないの？覚えていないの？覚えていないの？」

「同じ事を3回言わなくても覚えてないものは覚えてない」

「……若年性健忘症？」

真顔で頭の心配されるとものすごく悲しい。

「違うって！？俺はただ、思いだせないだけで」

「それじゃ、ただの薄情者」

「……何だか扱的にそっちの方がひどい気がする」

薄情者って女の子に言われると何もしてなくても罪悪感を抱くではないか。

「だって、ひどいじゃない。こっちゃんの事も何となくしか覚えてなくて、鈴音に限っては記憶にもない？そんな薄情者に育っちゃったんだね。ひどいよ、翔太くん」

ひどい言われようだがまったくもって否定も言葉を返すこともできない。

幼馴染達を忘れると言うのは確かにひどい男である。

昔にこれだけ可愛い子たちに囲まれておきながら、さっぱりと記憶から抜け落ちている時点で俺にこれまで彼女ができなかった原因があるような気がするんだ。

俺はもらったジュースを飲みながら椅子に座り、その子の事を麻由美に尋ねる。

「……いや、琴乃ちゃんの事はそれなりに思いだしてきてるんだけどさ。鈴音って子は本当に思いだせなくて。その、一応聞くけどこの子だよな？ほら、この写真なんだが」

本当は神父様に尋ねようと思って写真を持ってきた。

何人かの集合写真、その中にかつての麻由美も今見ればいた（思い出しました）。

麻由美がすんなりと思いだせたのは俺によく絡んできた子だからだ。

「うわあ、懐かしいなあ。そうだよ、これがこっちゃん、鈴音もいるじゃん」

「やっぱり、その子が鈴音って子なのか」

彼女が指差したのは琴乃ちゃんが嫌な顔をした例の写真だ。

笑顔の琴乃ちゃんの後ろに隠れるようにしている控えめな少女が

……鈴音か？

俺のもう一人の幼馴染、それが鈴音と言う名前だと分かった。

「俺と鈴音って仲がよかった？」

「当然じゃない。むしろ、私達の間では一番よかったと思うよ？そんなことを言うところちゃんに怒られるかもしれないけどさ」

「そうなんだ。へえ、鈴音って名前の子なんだ」

一番仲がよかったのは琴乃ちゃんだと思っていた。
いつも傍にいて遊んでいたような印象があったからだ。

「……むしろ、こっちゃんの事を覚えている方が私としてはびっくりかも」

「そりゃ、またどういう意味で？」

「うつん。何でもないっ。変な事を言ったらこっちゃんに怒られるから。ほら、さっさとジュースを飲んで。それが終わったら外の草むしりを手伝ってね？おじいちゃんギブアップでお休みしちゃったから」

この炎天下に老人を外にいさせるのは危険だろう。

麻由美が変わりに手伝うことになったようだ。

俺はグイッとジュースを飲みほして、再び外へと出る。

「暑いなあ。まだ夏じゃないとはいえ、この陽気は結構来るものがある」

「私は部活で慣れているけどね」

「高校では何か部活でもやってるのか？」

「私は陸上部なんだ。まだ入部したばかりだけど楽しいよ」

見た目通り、スポーツが得意らしい。

昔から走るのは彼女の方が早かった気がする。

「麻由美は変わらないようだな……？」

「人間、成長してもそんなに根本的な所は変わらないよ。翔太くんが優しかったりするのね？そりゃ、こっちゃんがずっと思い慕うはずだよ」

「……そんなに前から俺のことを？」

出会って10秒での告白を思い出す。

あの積極的な告白から俺達は再び始まったのだから。

「初恋っていうのじゃないの？そういうのって覚えているものでしょ、大抵は……。あっ、私はダメだからね？私には心に決めた人があるの。いくら翔太クンの告白でも私の心は揺らがないから」

「……別に麻由美はいいや」

「んう？それはどういう意味かな？あること、ないこと、こつちゃんに吹き込んであげてもいいんだよ、翔太くん？」

琴乃ちゃんを使うのはやめて欲しい。

ただでさえ、今の俺は彼女に対して覚えていなかったという負い目がある。

今はそれなりに思い出せているとはいえ、それで傷つけていたのは事実だ。

「これ以上、変な心配させなくていい。ていうか、確か琴乃ちゃんと同じ年だよな？ちよつとは琴乃ちゃんを見習って俺の事を先輩扱いしなさい。まずは、俺の事を先輩と呼びなさい」

別にタメ口でもかまわないが、ここは年上の威厳つてものをだな。

「うん、それ無理。だって、翔太くんだし。今さら呼び名なんて変えられないよ」

あつさりと却下されたので、俺は諦めて仕方なく雑草抜きを始めた。

久々に再会した幼馴染、麻由美のおかげで俺はようやく理解してきた。

俺の記憶から欠如しているもう一人の幼馴染、鈴音というらしい。彼女を思い出すことが俺には必要なんだと思うんだ。

それが琴乃ちゃんを傷つける可能性がある、としても俺は過去を思い出したい。

私を忘れないで、その言葉が胸に深くつきささっていた。

第14章：Forget me not〈後編〉（後書き）

次回はヒロイン、琴乃視点の話です。

第15章：初恋の男の子へ前編（前書き）

ヒロイン、琴乃視点のお話です。

第15章：初恋の男の子へ前編

【SIDE：藤原琴乃】

大好きだった人がいた。

記憶に残り続けている小さな頃に一緒に遊んだ男の子。

ひとつだけ年上で、私にとっては初めて親しくなった男の子だった。

ひと夏だけの思い出を彼はたくさんくれた。

また会える日が来る事を期待して、私は彼の事をずっと思い続けていた。

……淡い初恋を今も抱き続けながら。

「琴乃、何をしているの！今日は入学式でしょ！」

「ふあい……うう、眠い」

「ホントに朝の弱い子ね？そんなので高校生活、大丈夫なの？学校も遠くなったんだから早く準備しなさい」

「はい」

私は眠い目をこすりながらベッドから降りる。

真新しい制服を着ながら登校の準備を済ませる。

春真つ盛り、今日は高校の入学式だった。

朝食を食べ終わった頃には急がないといけない時間帯。

「いってきますっ」

「気をつけるのよ？いつてらっしやい」

お母さんに見送られて私は自転車に乗る。
家を出てからすぐに急な坂道がある。
その手前で一人の少女が私の事を待っていた。

「遅いよ、こっちゃん」

「ごめんね。ついのにびりしちゃって。マユは時間通り？」

「当然じゃん。私はせっかくの高校生活を楽しみにしてたの」

ふんつと私を叱る彼女は雑賀麻由美。
私の幼馴染で同じ高校に進学している。

「ほら、早く行かないと入学式に間に合わないよ」

私達は気持ち急ぎながら自転車をこぎ出す。

「ねえ、高校に入ったらマユは何か部活でもする？」

「まだ決めてないけど、運動部は決定。陸上部とか面白そうじゃない？」

「マユには何でも合いそう。私は帰宅部、決定かな？」

「こっちゃんは運動苦手だからね。高校っていろんな部活があるんだから何かひとつくらいやってみればいいよ」

マユにそう言われて私は微笑で返す。

いろいろとありそうだけど、私は特に部活をしたいとは思っていない。

アルバイトとかしてみたいとも思っているし。

「考えておくよ。そろそろ高校だね」

私達は自転車置き場に自転車を止めて、自分たちのクラスを確認する。

「マユと同じクラスだ。よろしくね？」

「よかった。こっちゃんと一緒ならまたテストの時に助けてもらえるもん」

「え？それだけ？」

「それも本音だけど、こっちゃんと一緒になれて嬉しいよ」

やっぱり、初めての場所に知り合いがいてくれるのは心強い。入学式が行われてこの高校に入学したんだという自覚が湧いてくる。

体育館で校長先生の挨拶を聞いていると眠くなってくる。

「ふわぁ」

つい軽く欠伸をしてしまう。

春先って温かいからいい心地なの。

ウトウトしかけていると、私が眠ってしまう前に先生の話が終わった。

「……こっちゃん。寝てたでしょ？」

入学式の終了後クラスに戻る時にマユに注意される。

「寝てないって。寝そうになったけど」

「寝ちゃダメでしょうが。この後、先輩が学校の案内してくれるんだって」

わざわざ先輩が案内してくれるらしい。

しばらくすると私のクラスに何人か男の生徒たちが入って来た。校舎内を案内してくれる先輩達。

「へえ、結構広い校舎だ。思ったより迷子になりそう」

マユがそう言うのも頷ける。

五角形の形をした校舎なので、どこがどこなのか1度、2度では覚えきれない。

どこを通っても同じに見えるんだもん。

「でも、この学校の設備っていいね。図書館も広いからいろんな本があるよ」

私達が最後に案内されたのは図書館だった。

「こっちゃんって本を読むの大好きだから楽しめそうじゃない？」

「うん。それは言えている」

私の趣味は読書なのでこれだけ多くの本があると読み応えがありそうだ。

いくつか気に入った本を見つけて私は楽しみにしていた。

「……こっちゃん、どうしたの？」

ふとある事に気付いて私は辺りを見渡した。

「ごめん、携帯が見つからなくて……。あれ、どこかで落としたかな？」

「鳴らしてあげよっか？」

「うん。お願い。もしかしたら、落としたのかも」

マユが私の電話にかけてくれると、誰かが電話に出た。

「あ、はい。そうですか、ありがとうございます。これからそちらに行きます。はい……。と。こっちゃん、携帯見つかったよ」

「誰か出てくれたの？」

「うん。体育館に落ちていて、後片付けをしていた先輩が見つけてくれたみたい。今、預かってるから体育館に取りに来てってさ。先生に言っておいてあげるから取ってきなよ。拾ってくれていてよかったじゃない。ムダに探しまわる手間がはぶけた」

どうやら、入学式の際に体育館に落としてきてしまったようだ。

拾われていた事にホッとした私はすぐに体育館へと取りに行くことにした。

体育館では先ほどの入学式の後片付けで何人かの先輩達が椅子などを運んでいた。

「あ、キミね？はい、これ。椅子の下に落ちていたのよ」

体育館に入ると女の先輩が私に携帯を手渡す。

「持ち主がすぐに見つかってよかったわ。なくしちゃダメよ」

「ありがとうございます」

「うん。これからいい高校生活を始めてね」

「はい。頑張りますっ」

携帯電話がすぐに見つかってよかった。

先輩に私はお礼を言ってからその場を立ち去ろうとする。

その時、前から二人組の男の子が机を運んでいた。

「あつ、ごめん。そこをどいてくれるかな？」

私はそっと避けるとひとりの男のが「ごめんね」と軽く挨拶してくる。

私は通り過ぎていくその横顔を見つめていた。

「おい、中山。これが終わったら帰りにどこか寄らないか？」

「いいねえ。ゲーセンにでもよっていくか。そういや、井上って…」

井上、という名前に私はハッと振り向く。

優しい笑顔を浮かべる男の人。

その顔には確かな面影があった。

間違いない、あの人は……！？

彼らは倉庫の方へ立ち去ってしまったので私も教室に戻る。

私は高鳴る気分を抑えながら、あの人の事を思い返す。

「……井上、翔太……？」

私が幼い頃に出会った初恋の男の名前、それが井上翔太。

彼が同じ高校にいる、それを知った瞬間の高揚感と興奮は私を驚かせる。

だって、また彼に会えるなんて思っていなかったんだもの。

教室に戻り、今日の予定が終了してから私はすぐにマユを連れ出す。

「な、何よ？どうしたの？」

「あのね、見つかったの！」

「そりゃ、携帯電話は見つかったでしょう？先輩が拾ってくれたん

だもの」

「違うのよ、マユ。あのひとさつき会ったの。あれは絶対に間違いなく彼よ！そうに違いないわ。うわぁ、どうしよう？本当に？会えるなんてなんて思ってたのに、同じ高校だったんだ」

マユは興奮する私に「ちょっと落ち着きなさい」と軽く額を叩かれる。

「……彼って誰よ？誰かに会ったの？」

「うんっ」

「こっちゃんがここまで興奮する相手って……もしや、翔太くん？」

彼女も以前に彼と会ったことがあるので、すぐに名前を思い出したようだ。

「そうよ。間違いないって。本当にまた会えたの〜っ」

「喜ぶのはいいけど、それって間違いなく本人？」

「決まってるじゃない。話はしてないけど、間近で顔は見たの。本人だったわ」

「話してないのに断言できる？あれから何年経っていると思うのよ」

あの思い出の日々から過ぎ去った年月は遠い。

「9年と8ヶ月。もうすぐ10年目よ」

「……こっちゃん、よく覚えているね？私も覚えているけど、そこまで詳しくは覚えていないって。さすがに恋している女の子は違うわね。それで、翔太くんはこの先輩だったの？」

「ええ、井上先輩にまた会えるかもしれない」

そう思うと嬉しくて仕方がないの。

彼の母親は私の母と親友なので、付き合いはある。

けれど、先輩本人の話は私もしないのでこれまで会えずにいた。ほぼ10年の月日を経て、再会できたことの喜びは大きい。

「ていうか、何で井上先輩って呼ぶわけ？昔はちゃんと名前で呼んでいたのに。そんな他人行儀にいきなりならなくても」

「だって、今さらそう呼ぶのは恥ずかしいでしょ？」

「……よく分かんないけど、よかったじゃない。こっちゃんがずっと好きだった相手なんだから、恋人になれるといいね？」

彼女の何気なく言った一言に私は愕然とする。

「恋人……？」

そうだ、あれから10年経って先輩も変わっているはず。

「もしかして、恋人のひとりやふたりもいたらどうしようっ！？」

「……こっちゃんってそんなキャラだったけ？」

運命的な再会に喜ぶ私に呆れるマユ。

それは桜の散り始めた春のお話、この物語が動き出すまであと少し。

第16章：初恋の男の子へ後編（前書き）

ヒロイン、琴乃視点のお話です。

第16章：初恋の男の子へ後編

【SIDE：藤原琴乃】

井上先輩との再会。

私が長年思い続けてきた人はすっかりと成長していた。けれど、少しだけ会う時間が遅かったかもしれない。

「よかったじゃない。こっちゃんがずっと好きだった相手なんだから、恋人になれるといいね？」

彼女の何気なく言った一言に私は愕然とする。

「恋人……？」

そうだ、あれから10年経って先輩も変わっているはず。

「もしかして、恋人のひとりやふたりもいたらどうしようっ!？」

何たる失態、この時までその可能性は全く頭になかった。

いつか私が先輩の恋人になりたいという漠然とした憧れと夢。

小さい頃に出会っただけの男の子。

それでも、ずっと思い続けてきた私にはその事実はかなりショックだった。

もっと早く、会う事ができていれば……未来は違ったのかな？

「……そっか。先輩に恋人がいるんだ？」

「おーい、こっちゃん？」

「あれからもう9年8ヶ月も経ってるんだもん。先輩に恋人がいるのも、仕方なくて……仕方ないから……ぐすっ」

「え？あ、ちよつと待って！？こっちゃん、早まるな！？まだ何も知らないんだってっば。ホントに恋人がいるかも分らないんだよ？今日会ったばかりで本人かどうか分からないんでしょうが」

そう言えばそうだった。

先ほど会ったばかりだと言うのに、思わぬ想像で私は自分自身を傷つけていた。

何も彼に恋人がいると決まったわけではない。

「まだ私にも可能性くらいはある？」

「十分すぎるほどにあるってば。その先輩が本当にあの翔太くんなのか、確認して、色々調べてみればいいじゃない。恋人とかの話はそれからでしょ？ね？」

マユの励ましに私は落ち込んだ気分から少しだけ回復する。

「……うん。調べてみよう」

「よしっ。とりあえず、今日はこのまま帰ろう。明日から私もお手伝いしてあげるから。今日は入学気分を味わおうよ？帰りに、駅前のケーキが美味しいお店にでも……」

親友の励ましくて結構大きいものだった。

たった一言で余裕のなかった私を落着かせてくれたのだから。

数日後、私は出来る限りの方法を使って先輩の事を調べた。

この学園に通う知り合いの先輩達への聞きこみで分かったのは：

…。

「先輩はやっぱり、井上先輩だよ。間違いなかった」

昼休憩、マユとお互いにいろんな人から聞いてきた情報を交換し合う。

「……どうやら、本物みたいな感じ。母子家庭でお母さんが看護師って言うのもあってるんでしょ？部活は所属なし。現在は帰宅部。頭も特別いいわけでもなく、運動神経もそれほどでもない、ごく普通の男の人って印象が強いね？ていうか、これだけ平凡というか普通の子が翔ちゃんだったんだ？」

「変な事を言わないで。井上先輩はやればできる子なの」

「……それ、思いっきり失礼な発言だってことだって気付いてる？」

だって、普通とか言われるとなぜかムツとするんだもの。

それはさておき、間違いなく先輩があ那时的男の子だってことは判明した。

「こんな遠まわしな事をせずに、こっちゃんのお母さん経由で調べてもらえれば楽だったんじゃないの？親友でたまに遊びに来たりするんでしょ？」

「それは、そうだけど……恥ずかしいじゃない」

肉親に自分の好きな人を知られるのって結構恥ずかしい。
両想いならまだしも、まだ片思いでしかないんだから……。
お母さんに知られたら絶対にからかわれるに違いない。

その羞恥に耐えてまで、彼女を頼むという選択肢は選べなかった。

「で、目的の男の子が翔太くんだと判明して、こっちゃんはどうするの？」

「……しばらくは様子を見たいの。まだ、正式に恋人がいなか分らないから」

「残念ながらいないっぽいよ？いないというより、世間的にはあんまりモテないっていうか……あつ、別に翔太くんの容姿とか性格がどうかって言うんじゃなくて、女の子受けする側の子じゃないっただけだよ？そんな怖い顔をしないで？」

私が睨みつけると彼女は慌てて言葉を言いかえる。

先輩の恋愛関係における情報はほぼ皆無だった。

浮いた噂も話も特になし。

実際に聞いてみなければ分からないけれど、先輩には交際している女性はいないようだ。

「様子見て、それだけ好きなら告白しちゃえばいいのに？」

「簡単に言わないで。『好き』とかすぐに言えるはずがない」

「そうやってのんびりしてても、恋人はできないんじゃないの。ウジウジしてたら誰かに先を越される可能性も無きにしもあらず。ま

あ、こっちゃんが奥手な純情っ娘ってのは知っているからしょうがないけどさ」

「……分かったわ。今すぐにでも告白して来る」

マユは「ま、待つて。からかってごめんっ」と急いで私を止めてくる。

でも、彼女の言うとおりなんだと私は理解はしていた。
何もしないで好きな人を手に入れることなんてできるはずがないんだ。

入学式から早数週間、ようやく高校生活に慣れ始めてきた。
中学の時とは違う生活習慣に最初は戸惑ったけれど慣れるのは早い。

私は屋上があまりにも気持ちよかったので図書館で借りてきた本を読んでいた。

心地よい風と穏やかな日差しを感じながらの読書はそれなりに雰囲気がいい。

私は本を読みながら、つい考え事をしてしまっていた。

「……来週にでも先輩に挨拶しよう。私の事を覚えていてくれるかな？」

私と井上先輩が過ごしたひと夏と言う時間は短いものだった。

小学校1年生の初めての夏休み。

私の家に預けられた男の子がいた。

母の親友の息子、それが井上先輩だったの。

最初は私に興味はあまりない感じだったけれど、少しずつ私の事を受け入れてくれた。

優しくて、彼の傍にすることがすごく楽しくて。たったひと夏だけの思い出が……私にとって忘れられない一生の思い出だったの。

「覚えてくれているといいな……」

私は思い続けてきたから先輩の事はよく覚えている。

でも、先輩はどうなんだろう？

私の事なんて忘れてしまっているかもしれない。

その不安は常にあつて……不安を隠すために私は自分に勇気を与える。

「頑張れ、私。先輩に会って告白しなきゃダメなんだから」

これまで思い続けて来た気持ちを無駄にしたくない。

ダメかもしれないけど、自分なりにここまで頑張ってきたつもりだった。

高校生になり、先輩と出会ってから私は自分を変えてきた。

「ここまでは何とか準備はしたつもり。後はタイミングと運がよければ……」

近いうちに私は先輩に告白するつもりなんだ。

それだけのために今日まで準備をしてきたの。

これまで気にしていなかった容姿だって、自信を持てるように化粧なども覚えた。

お世辞程度かもしれないけど、クラスメイトの男子からも評判はいい。

それに私は決めたんだ。

先輩に告白して断れるまで自分からは諦めないって。

例え、私の事を覚えてくれなくなたっていい。

先輩にとってはそこから始まりでもいいから、私を受け止めて欲しい。

我が侬だよね、すつごく我が侬な自分の気持ち。

「……でも、好きな気持ちは止められない」

止められないの、自分ではもうこの気持ちを抑えることなんてできない。

私は本を読むのを止めて、腕時計を眺める。
そろそろ家に帰ろうかな。

立ち上がろうとした時、私は気づいたんだ。

いつのまにか、屋上には人がいた。

誰かいたのに私は気づいていなくてドキツとする。

考え事に集中し過ぎていたらしい。

こんなところを人に見られるなんて恥ずかしいなあ。

私は慌てて本を片づけようとする。

「あつ！」

私を不思議そうな視線で見つめていたのは男の人だった。

彼は私に気づいて、こちらをジッと見つめている。

嘘だと目の前の現実を疑った。

そんなはずない、これは私の妄想かもしれない。

こんなに都合のいい現実が起きるはず何かないんだって。

「……っ……！」

思わず持っていた本を落としてしまう。

そこにいたのは、井上先輩だった。

偶然にしては出来過ぎていて、必然とか言っちゃうとドラマの見過ぎだと笑われてしまうかもしれないけれど……。

私はその偶然に似た必然を信じた。

これは神様が与えてくれた私へのチャンスなんだ。

あの10年前の夏から恋い焦がれ続けてきた相手。

「好きです。私と付き合ってください」

思わず自分の口から出てきた言葉に一番自分が驚いたと思う。

あまりにも素直に、自然に、当然のように口から出た一言。

恥もなく、身体が震えてしまうこともなく。

本当に想いのままに、彼への気持ちが溢れ出た。

さっきまでどう告白しようかシチュエーションを考えていたのがバカらしく思えるほどに、あっさりと現実と言うのは動き出す。

「……はい？」

彼は呆然としながらそう呟いた。

ずっと忘れることのない思い出がまたひとつ、出来上がる。

ほぼ10年の歳月をかけた再会、そして告白。

私はこの初恋を成就させたい。

好きな人に好きだって想いを伝えて、大切な人と結ばれたい。
恋している人間ならば誰だって思うことでしょうか？

井上先輩、大好きです。

第17章：告白と痛み（前書き）

ヒロイン、琴乃視点のお話です。

第17章：告白と痛み

【SIDE：藤原琴乃】

井上先輩とまさか偶然にも出会ってしまった。
夕刻の朱色の日差しが少しだけ眩しい。

「……先輩、好きです」

先輩は「へ？」と啞然とした様子で私を見ていた。
こうして改めて見ると先輩には昔の面影があった。
成長してすぐく男の子らしくなっているけれど、雰囲気はあの頃
から変わらない。

「私と付き合ってください」

自分がその台詞を言う時が来るなんて思ってもみなかった。
先輩は残念ながらすぐには私の事を思い出してくれなかった。
予想してたけれど、寂しいのは仕方ない。
だけど、突然の私の告白にも関わらず、先輩は私を受け入れてく
れた。

恋人同士。

夢にまで見た先輩との恋人関係。
言葉にしても、どこか現実味がなくて、私はドキドキと興奮して
いた。

胸の高揚を抑えることができず。
私は先輩と別れて家に帰ってからひとり幸せにひたっていた。

「……琴乃、ちょっと来なさい?」

部屋にいた私にお母さんがリビングへ連れ出す。

「な、何なの?」

「私に報告すべき事があるんじゃない?」

彼女はソファに座るようにうながす。

こういう時の母に逆らっても後でひどい目にあうだけ。

大人しく従い、お母さんと向き合う。

「……さつき、葉月から電話があつたのよね?」

「へえ、おばさんから?」

「それがすつごく嬉しそうだったからどうしたのかなって思ったら、息子の翔ちゃんに恋人ができたんだって」

おばさん経由でバレるのは想定していたけど、こういう形で追及されるのは恥ずかしい。

「あははっ。まさか琴乃が翔ちゃんの事を好きだったなんてね?」

「うぐっ……」

お母さんからそう言われるとものすごく嫌な感じ。
祝福されているのは分かるけど、照れくさい。

「よかったじゃない。琴乃が翔ちゃんのことを愛してたなんて初耳だけど?」

「いいでしょ、別に……私が誰を好きでも、んにゃっ!？」

いきなりお母さんが私の頬をむにと触れてくる。
びっくりするじゃない!？」

「何するのよ、お母さん?」

「笑顔を見せなさい。琴乃は笑えば可愛いんだから」

「笑わなくても可愛いです」

「ふふつ。そうね、私の娘だもの。でも、最近になって妙にオシャレに気を使いだしたりとかしだして、変わって来たなって感じていたけど、恋愛をしてたんだ」

私が先輩を好きだったのは本当にずっと昔だ。
ほぼ9年近くは実際に会えずに漠然とした想いを抱えたままだった。

それでも、会いたい気もちに変わりはなくて。
住んでいるらしい場所にも何度か足を運んだけど、会えずじまい。
いつか会いたいと願いつけてきた相手が井上先輩だった。

「それにしても一途に思い続けてたなんて、私は気付かなかったわ」

「……からかわれるの分かってたし」

「やだなあ。この私が娘で遊んだりしないわよ?」

信用できない、お母さんのモットーは「面白ければよし」だもん。

「琴乃が私を少しでも信用してくれたら、もっと早くに再会できてたのに？」

「それは……」

何度が尋ねようと思った事はあった。

彼に会いたくて、話だけでもしたかったから。

学区が違うので小学校も中学校も同じじゃなかった。

「それはもういいの。結果として再会できたんだから。自分の力で会えた事に意味があるの」

「……よく我慢してたわね。初恋が実ってよかったじゃない。そう
だ、この事をお父さんにも報告しなさい」

「それは無理！？」

「何で？あの人、琴乃に恋人ができたらぜひ相手連れてきてって
言ってたわよ。ほら、うちって女の子ばかりだから男の子に憧れて
いたんでしょ。お姉ちゃんにも後で連絡しておいてあげるわ」

「もうっ、恥ずかしいからやめてよっ！」

私は顔を赤くしながらお母さんを否定する。

だって、家族相手に報告なんて羞恥以外の何物でもない。

それに、特に自分の姉にバレたら嫌なもの。

「もういいからっ。私、部屋に戻るね」

「からかいすぎたかしら？ 琴乃、これだけは言っておくわ」

お母さんは優しい笑顔で私に言った。

「翔ちゃんはいいい子よ。いい人を好きになれてよかわったわ。おめでとっ」

「……うんっ」

私はお母さんに微笑みで返した。

自室に戻り、私は懐かしいアルバムを広げる。

先輩が1カ月間ほどこの家に預けられていた時期の写真は何枚も残っている。

ずっと私が大事にしてきたアルバムは宝物だった。

「……今日はいろいろとありすぎて疲れた」

偶然にも先輩と再会を果たして、勇気を持って彼に告白して、付き合ってくれる事になって……。

それだけで心が満たされて幸せなの。

この10年間、抱き続けてきた想いが実った事の達成感が大きい。

「今日から恋人なんだ。どうしよう、すごく嬉しい」

私は写真を眺めながら、何枚かの写真を抜きだす。

それを手にしながら、私は目をそむけてきたある現実と向き合う。

「でも……先輩は私のことを……」

小さな頃の私が写る写真。

私は優しいお兄ちゃん的存在だった先輩に幼心に惹かれていた。初めて親しくなった異性に心を奪われてきた。

「先輩に嘘ついちゃったな」

ポツリと呟いた一言に興奮が少しずつ冷めていく。

私は嘘をついた、先輩に嘘をついてしまった。

だって、先輩が……ううん、先輩は悪くない。

悪いのは否定しなかった私、嘘をついてしまった私が悪いんだ。

先輩に嫌われたくなかった。

だから、嘘をついてしまった。

その罪悪感に押しつぶされてしまいそうになる。

「これからも嘘をつき続けなきゃダメなのかな？」

先輩にある嘘をついたこと、それが後の私を苦しめることになる。それを分かっていたいながらも、今の関係を壊したくなくて。

「……仕方ないよね。嘘つくのは嫌いだけど、嫌われるよりマシだもん」

私は嘘をつき続ける覚悟を決めた。

いつかはバレるその時が来る事も可能性にいれて覚悟をしたの。

「私は幸せになれるのかな？」

写真で笑顔を見せる小さな頃の私に言う。

あの頃とは違う、この胸に突き刺さる小さな痛みを抱えての恋の始まり。

ずっと夢に見ていた、私と先輩との交際が始まったんだ。

第17章：告白と痛み（後書き）

次回からまた翔太視点に戻ります。

第18章：ガールフレンドへ前編

【SIDE：井上翔太】

懐かしい夢の光景。

響き渡るのは教会の鐘の音。

礼拝堂の十字架の立つ祭壇の前で俺はステンドグラスを眺めていた。

「またここにいたんだ、翔太くん？」

「……麻由美？俺を呼びに来たのか？」

「うん。こっちゃんも鈴音も待ってるよ。早く遊びに行こうよ」

麻由美が俺の手を引いて教会の外へと出ようとする。

「待つて。俺、もう少しだけここにいたいんだ」

「何かあるの？」

「この“すてんどぐらす”って言うの、すごく綺麗だから」

何かを綺麗だと思ったのはこれが初めてだった。

光の加減で美しく輝くステンドグラス。

色彩豊かなガラスが描くのは天使の絵だった。

「別に珍しくないと思うよ？」

「麻由美には見慣れているかもしれないけど、俺はここに来て初めて見たんだ」

「そうなの？翔太くんがそう言うなら待ってあげる」

教会と言う場所に来たのも、ステンドグラスを見たのもこの教会に来て初めてだ。

それだけに何度か来てみては興味津々に中を見て回っていた。その中でも特に気に入っていたのがこのステンドグラスだ。

「天使が可愛いよねえ。私も好きだけど、ここの教会のステンドグラスは小さいよ。私、もっと大きいを見たことがあるの」

「大きいってどれくらい？」

「あのね、隣街にある教会はすごいんだよ。“ぱいぷおるがん”っていう大きなオルガンと、ステンドグラスもたくさんあったの。天使とか女神とか、すっごく色が多くて綺麗だったなあ……」

それほど綺麗ならば一度、見て見たい。

「教会って結婚するための場所なんだろう？」

「結婚式もする場所。おじいちゃんが言ってた。教会は神様にお祈りをする所なの。皆が幸せに生きていけますようにって」

麻由美の言葉に俺は「そうなんだ」と頷いて椅子に座る。

「翔太くんは今、幸せ？」

「今はお母さんがいなくて寂しいけど、皆がいてくれるから幸せだよ」

母のいない寂しさを癒してくれるのは友達がいるからだ。
この夏で新しくできた何人もの友達のおかげで寂しくない。

「……そろそろ、行こうか」

「うんっ。今日はいつもの公園で遊ぼうよ」

でも、俺は一つの不安を抱きつつあった。

この夏が終われば皆と離れ離れになってしまうのではないか。
せつかく仲良くなれた子たちとまた別々になってしまうのはすごく辛い。

母に会いたい気持ちと友達との別れ。
どちらも俺にとっては寂しい事だった。

……。

どうやら、夢を見ていたようだ。

「おーい、起きろ。もう昼休憩だぞ?」

俺を揺さぶる中山の声で目が覚める。

4時間目の数学は先生が不在で自習時間だったために昼寝していたのだ。

「んっ。男の声で起きることほどむなしい事はないな」

「人が善意で起こしてやったのに、何たる言い草だ。それには同感だが。起こされるなら、女の子がいいのは当然だろ」

中山は呆れた顔で俺に言う。

「まっただな。しかし、何か夢を見ていたのだが……どんな夢だった？」

「知るか！？お前の夢物語なんて興味ない。エロい夢でも見てたんだろ？恋人とくんずほぐれつか？良い御身分だな」

「違っつての。うーん、最近、妙に変な夢を見るんだよな。何でだろ？」

夢を見ると言うより、何かを思い出すというか……。

夢から覚めてもほとんど覚えていないんだが、どうにも変な気分になる。

「夢つてのは『脳が記憶の整理するためのもの』だってよく言うぞ？どうせ昔の記憶でも思い出してるんじゃないのか？大抵、夢は覚えてない事が多いんだから気にするなよ」

中山の言うとおりかもしれない。

いちいち夢を気にしていたらきりが無い。

例え、過去の記憶だとしても、起きてからも覚えてないなら意味がないからな。

「そっぴや、お前の携帯、震えてたぞ？」

俺は起き上がると、マナーモードだった携帯を取り出して履歴を見る。

不在着信が1件、相手は……麻由美？

一昨日の土曜日、久々に再会を果たした幼馴染のひとりだ。

麻由美も琴乃ちゃんと同じこの学校の生徒だった。

「何だろう、かけ直して見るか？」

俺が電話をかけるとすぐに麻由美が出る。

『気づくの遅いっ！今すぐ、屋上へ来てよ、翔太くん』

「今から？いや、今は無理。琴乃ちゃんが……あれ？」

琴乃ちゃんが俺を迎えに来ているはずだが、教室には来ている様子がない。

『こっちゃんなら、ただいま買い出し中。翔太クンのパンもついでに買ってきてくれるから、急いでこっちに来て。一緒にご飯を食べようって思ったの』

どうやら、お昼のお誘いらしい。

普段は琴乃ちゃんと一緒に食べているが、麻由美も参加するようだ。

「了解した、すぐに行く」

『ダッシュで来てね。あと3分以内に私の所に来なきゃ、罰ゲームだから。それじゃ、スタート！』

罰ゲーム？と気になる発言で止めた彼女は電話を切ってしまった。くっ、ここから3分で屋上に行くには廊下を走らなきゃならない。まったく、面倒な事をさせやがるが、麻由美の性格的に提案にのらなかったても不戦勝で罰ゲームだろう。

俺は急いで階段を上って屋上に出る。

時間は2分30秒過ぎ、何とか間に合った。

俺が屋上の扉を開けるがそこには麻由美の姿はなかった。

「……あれ、いないぞ？」

昼食を食べる何人かの生徒はいるが、琴乃ちゃんも麻由美もいない。

再び、携帯電話が鳴るので出て見ると、

『あと10秒だよ？間に合わないの？どうしたのかな？』

「屋上についたが、どこにもいないぞ？お前、今どこにいる？」

『ヒント。そこから真つすぐ前を見て』

「前？前なんて見ても、特別何もない……って、ええ！？」

俺の目の前から数十メートル先、誰かが手を振っている。

『残り時間、3秒、2秒……』

「ちょっと待て。それはずるい、ここじゃないってことか!？」

『1秒、0！っ！はい、残念でした。翔太くん、間に合わなかったから罰ゲーム』

麻由美は『何にしようかな?』と楽しそうに笑いやがる。

電話が無慈悲にも再び切られて、俺はガツクリと肩を落とす。

この学校の校舎は五角形の形をしている。

いわゆるペンタゴンみたいな形状で、屋上が繋がっているためにかなり広い。

麻由美がいたのは何を思ってたか、この入口から一番離れた反対方向のベンチだった。

「これは普通に反則だろう」

何て言っても言い訳にしかない。

あの麻由美が昔と変わっていない証拠だ。

昔から俺をからかったりするのが好きだったのだ。

「……さっさと行くか」

俺は諦めて罰ゲームを覚悟しながら彼女達の元へと向かった。

「はい、お疲れ様。惜しかったね、翔太くん」

屋上の片隅のベンチで俺を待ち構えていたのは麻由美と琴乃ちゃ

んだ。

特に琴乃ちゃんは申し訳なさそうな顔で「すみません」と苦笑い。

「麻由美のずるさを責めてもいいか？」

「私はちゃんと屋上だつて言ったもの。罰ゲームは……後でいいや。まずは食事にしよう。私、すごくお腹が空いてるんだ」

「へいへい。俺もご飯にするか。あつ、琴乃ちゃん、買ってきてくれてありがとう」

琴乃ちゃんが買ってきてくれたのは俺の好みを把握してきているのか、俺の好物のパンばかりだ。

俺はお金を支払ってパンを手にする。

「いただきます」

挨拶もそこそこに俺達は食事を始めることにした。

大好きな甘いクリームパンをかじりながら、琴乃ちゃんに言う。

「琴乃ちゃん。麻由美も同じ学校だったんだな」

「はい。そうですよ。何度か紹介しようと思っていたんですけど」

「こっちゃんの恋愛を優先してたの。せつかくの再会に私が水を差すのもアレでしょ？しばらく、様子を見てからと思っていいたら会えちゃったんだよ。翔太クンと出会ったのは偶然なんだからね」

本当ならばGWくらいに俺と顔をあわせる予定だったようだ。そんなことを気にしなくてもいいと思うのだが。

俺と麻由美が話をしていると、琴乃ちゃんが控えめな声で尋ねてくる。

「あの、マユの事は覚えていたんですか？」

「え？ああ、マユって麻由美のことか。そうだな。ものすごく明るい女の子がいたのは覚えていたからさ。麻由美と会ってすぐに思い出したよ。麻由美は昔と全然、変わっていなくて……どうした、麻由美？」

俺の目の前で何やら手を動かして、よく分からないジェスチャーをする麻由美。

俺は分らず「何やってんだ？」と疑問を抱く。
その理由はすぐに分かった。

「へえ、そうなんですか。マユはすぐに思い出したんですね？」

「え？あれ？琴乃ちゃん？」

「……私の事なんて、全然……思いだしてくれなかったのに。マユはすぐですか？いいなあ、マユ……羨ましいですねえ」

俺、地雷を踏みました……。

俺の発言に落ち込む琴乃ちゃん、麻由美は「あゝあ」と軽く肩をすくめる仕草をする。

「何て冗談ですよ？別にいいんですけどね。先輩にとってはマユの方が記憶に残る女の子だっただけですから。私の事なんてどうでもよかったと言う事ですから。残念ですけど、私、まったく気にしてませんからっ！」

実は内心はめっちゃ怒ってますか、琴乃ちゃん？
珍しく不満そうに頬を膨らませる彼女に俺は戸惑う。
恋人を怒らせるとはやっちゃまったぜ……ガクッ。

第19章：ガールフレンドへ後編

【SIDE：井上翔太】

琴乃ちゃんをふとした事で怒らせてしまった。

彼女を思い出せずにいた事は俺にとっても負い目を感じている。

俺は何とか言い訳をしようと必死に考えた。

「違うんだ、琴乃ちゃん。これは、その、変な意味ではなくて……」

「別にいいワケなんていりませんよ」

「違うんだってば。ほら、麻由美も何か言っただげてくれ」

「何で私が翔太クンのフォローしてあげないといけないの？」

素で返すとは何とも薄情な幼馴染である。

恋人と喧嘩なんて言う自体だけは避けたい。

琴乃ちゃんって意外と怒らせると怖いんだ。

「琴乃ちゃん……？」

無視状態で食事続ける琴乃ちゃん。

「……あ、あのさ、琴乃ちゃん。別に俺は麻由美の事を覚えていないし」

「再会した時にすぐに思い出してくれるほど、覚えてくれてたのに？」

「麻由美は黙っていてくれ」

下手に話をこじらせる時には喋るのか。

おかげで琴乃ちゃんはこちらにむすつとした顔を見せる。

「……へえ、すぐに？」

「そうだよ。こっちゃんは忘れてたなんて薄情者だよね」

フォローしてくれる様子もない麻由美。

本当にこの子は昔から変わっていない。

ただ、今は敵に回すわけにはいかない。

「麻由美、お前なあ……」

「あははっ。だって、翔太クンってからかうと可愛いんだもん」

「あんまり、変な事言つといじめるぞ」

「こっちゃんの前であんまり変な事は言わない方がいいと思うよ」

ジーツと視線を感じるのは気のせいではない。

「麻由美と翔太先輩って仲いいですね。別にいいですけど」

「琴乃ちゃん、機嫌を直してくれ。俺達は別に仲が良かったわけじゃない……」

「えーっ。そうなの？私と翔太クン、仲がいいと思っていたのに？」

「……ぷいつ」

ガーン、琴乃ちゃんにそっぽを向かれてしまった。

俺は麻由美に目で「何してくれてるんだ？」と非難する。

一番悪いのは忘れていた俺だが、それをあおった麻由美も同罪だ。

「……私、もう行きます」

「え？あ、ちよつと、琴乃ちゃん！？」

「あとはお二人で仲良く話でもしていてください。それでは……」

冷たくあしらわれてしまった。

これは本気で怒っておられるのでは？

追いかけて損ねて、麻由美と屋上でふたりつきりになる。

「麻由美、何をあおってるんだ？あん？」

「怖いよ、翔太くんっ。私に八つ当たりしないで」

俺が睨みつけるとさすがに麻由美も反省する素振りを見せる。

「琴乃ちゃんに嫌われたらどうしてくれる？」

「こっちゃんが翔太くんを嫌う事はないから安心して。何年、翔太くんの事を好きだと思ってるの？10年は長いよ？」

「……あれだけ怒ってたらどうか分からないな」

琴乃ちゃんに出会ってからずっと笑顔しか見ていなくて。

あんな不満そうな顔を見たのは初めてなのだ。

それゆえに俺も気持ち焦り、不安になる。

俺は食後のジュースを飲みながら屋上から空を眺める。

青空に雲が流れていくのをジツとしてみている。

「なあ、麻由美？俺は琴乃ちゃんの事を忘れていたわけなんだが」

「こっちゃんだけじゃなくて、鈴音の事も忘れてるけどね」

「それもそうだけど、今、大事なのは琴乃ちゃんの話だ。俺って何でこんなに昔の事を忘れているのかなって考えたんだ」

「そう、ついに翔太くんも気づいてしまったのね」

麻由美は淡々とした口調で真面目な顔を俺に向けた。
今までと違う雰囲気には俺は思わず息をのむ。

「な、何だよ？まさか、俺が忘れてる事に意味があるのか……？」

あの10年前に俺に何か起きたとか、そういう話か？

「教えてあげる。それは、翔太くんが……」

「俺が？どうした？言ってくれ、麻由美」

事故にあって気を喪失しているとか、何かあったというのか？

麻由美はゆっくりとした口調で俺に言う。

「それは、翔太くんがただの忘れっぽいおバカさんだったってこと

よ
「

麻由美の発言に俺はイラッとしてその頬を思いっきり引っ張る。

「いひゃいゝ!？」

「こっちは真剣に話しているんだ。冗談はやめろ」

「怖いよ、翔太くん。もっと心に余裕を持ちなさい」

俺は麻由美の頬を引っ張りながら深いため息をつく。

結局、俺が忘れてしまっているだけという事らしい。

本当に情けない、マジで凹むぜ。

俺は麻由美から手を離すと彼女は「痛かったよ」と頬を膨らませた。

「俺が忘れっばいだけなのか。どーしてなのかな。琴乃ちゃんの事、中々思い出せなくて……彼女は別に過去なんて気にしないでいいって言っただけだな」

気にしないでという台詞は気にして欲しいという言葉の裏返しなのではないか。

過去の話をする度に琴乃ちゃんは悲しい顔をする。

あんな顔をさせたくないのに、昔は思い出せない自分が寂しい。

「……俺も情けなくてな。思い出したいと思ってる」

「こっちゃんとは別に思い出してくれない事を責めてるわけじゃないんだ。ただ、自分が翔太くんの特別じゃなかった事がショックだったの。自分は覚えてないのに私が覚えられたことがムカッとしてる

だけ」

「そうなのか？」

「そうだよ。こっちゃんにとっては翔太くんが初恋の相手で、長年思い続けてきた相手だもの。当然、自分の事を覚えて欲しかったはず。けれど、それはそれでいいの。覚えてくれていなくても、彼女はここから始めようとしていたんだ」

「……それって最初の頃に言われたっけ」

琴乃ちゃんは俺に言ったんだ。

俺達が出会ったここから始めようって。

「でも、そうは言っても、やっぱりさびしいんだよね。こっちゃんも、女の子だから彼氏が自分じゃない他の女の子の事を覚えていたら嫌な気持ちになるじゃない。翔太くんだって逆の立場なら嫌でしょ？」

「当然だな」

俺もしくじった、と後悔中だ。

対応さえ間違えなければ結果として彼女も不機嫌にさせずにすんだはず。

「どれだけ言い訳しても琴乃ちゃんを忘れていた翔太くんが一番悪いと言っわけ。反省してこっちゃんに謝りなさい」

「……あのさ、麻由美。俺に協力してくれないか？」

「協力？私が翔太クンに？」

琴乃ちゃんに謝罪して許してもらってからどうするのか。
俺もいい加減にあの夏の日の事を思い出しておきたい。

「俺が忘れていたあの10年前、何があったのか教えて欲しいんだ」

琴乃ちゃんを苦しめている事の正体も知りたい。

あの夏の日々が俺達の始まりだった。

俺は思い出の中に何を置いてきたのか、忘れてしまった過去を取り戻したい。

過去は過去だが、それを思い出せない限り、琴乃ちゃんを苦しめ続ける気がしたんだ。

第20章：過去を求めてへ前編

【SIDE：井上翔太】

あの10年前に俺は琴乃ちゃんと出会い、何を体験したのだろうか？
うつすらとした記憶しかない過去。

その理由を含めて俺は過去を求めていた。
放課後になり、俺は麻由美と共に琴乃ちゃんの家近所を歩いていた。

「翔太くん、先に言っておくけど、私が知ってる記憶が必ずしもこっちゃんの過去に関係してるとは限らないからね？」

「分かっている。それは当然のことだ」

麻由美は琴乃ちゃんと一緒にいる事が多かった。

それゆえに思い出を共有している事も多いはずだと俺は思ったんだ。

だけど、それが正解だと信じているわけじゃない。

俺には思い出すきっかけが欲しい。

俺達が訪れたのは麻由美の実家でもある教会だ。

神父様は出かけているのか、留守で誰もいないと麻由美は言った。

「まずはここだね。おじいちゃんの教会。ここで私と翔太くんが出会ったの。翔太くんをこっちゃんがここに連れてきた。翔太くんは教会のステンドグラスが気に入っていたんだ。覚えている？」

「何となく、な」

中へ入らせてもらうと、この間も見たステンドグラスが飾られている。

大きなガラスの絵を眺めているとどこか懐かしさも感じるのは事実だ。

「翔太くんは結構気に入ってたの。ここでよく遊んだのもあるけど、こーしてステンドグラスを眺めていた事もよくあったよ」

「寂しかったのかもしれないな」

「寂しい。そうかもしれないね。お母さんとも離れて、見知らぬ人の家に預けられて、こっちゃん達と仲良くできていても、子供心に不安はあるだろうし」

麻由美は頷きながら俺の隣の椅子に座りこむ。

同じように俺も座りながらステンドグラスに視線を向ける。

彩り豊かなガラスで出来た絵はどこか人の心を落ち着かせる。

過去の俺もこの絵を見て、自然にそう言う穏やかな気持ちになっていたのだろうか。

「昔の俺ってどういう奴だった？感受性豊かなタイプだったか？」

「うーん。どうだろ？全然、大人しいタイプじゃなかったよ」

「そうだろうな。俺が大人しいわけがない」

自分で言って悲しくなるけどな。

いわゆる悪ガキでもなかったが、多少の無茶はする子供だったはずだ。

小さい頃はよく悪戯しては母さんに怒鳴られていたからな。

「……そんな俺がこのステンドグラスを氣にいるなんて珍しいと思わないか？」

「それは思ったかも。翔太クンって外で遊ぶのが好きなのに、この教会ではすつごく大人しくてびっくりしたもん。ずっとこのステンドグラスを見ていたからよっぽど氣にいつていたんじゃないのかな」

この椅子によく座って眺めていたと言う。

何か神様に祈る事でもあったのかね？

俺が神を信じて祈るような子供だったかどうか、その辺は覚えていないが今の俺は間違いなくそんな真似はしない。

「この教会で他に何かなかったか？どうにも俺はここで何かした覚えがある。誰かと一緒に……何かをしたんだよ？」

「何かって言われても、私も分かんないってば。ここでは同じ年くらい子が集まってゲームとかお話を聞いたりとかしたよ？でも、そういうんじゃないくて、ロマンティックなイベントをした記憶があるんでしょ？」

「ロマンティックって何だ。まあ、確かに、何かしたのは確かなはずなんだ。特別に思い入れがあると言うか」

大事な思い出がここにはあるような気がする。

「重要な場所ってこと？私の知る限りではそー言う事はなさそう。きっと、私がいなかった時にこっちゃんか、鈴音ちゃんと何かしたんじゃない？」

「そうか。……何をしたんだろうな？」

それがどうしても思い出せずに諦めることにした。

麻由美も分からないのなら、仕方ない。

教会内を見渡しながら俺は「次の場所へ行こうか」と麻由美に告げた。

これ以上、ここにも情報は何も得られなさそう。

「次はどこがいいかな」

「俺が知らない場所もあるのか？」

「こっちゃんと一緒にいったのは展望台公園だけでしょ？あの場所以外にも翔太クンと過ごした思い出がある場所はあるの」

彼女は次の場所へ移動するように言った。

それは住宅地を抜けてこの高台の最上とも言える広場だった。山が広がる手前の広場は空き地になっている。

「……ここは？」

「よく皆でバトミントンとかした場所だよ。公園だと木に引っかけから、ボール遊びとかはここでしたの。覚えてない？」

「覚えている。確か、他の近所の子たちとサッカーとかしたかも」

「あつたよ、そーいうこと。でも、男の子の割合ってこの近所じゃ少なくて、男の子3人に女の子6人って言うハンデ戦で勝ちまくってたっけ」

「なるほど、負けた記憶しかないわけだ。よく罰ゲームとかさせられたな」

「あつたねえ。で、罰ゲームで思い出したけど、今日のお昼の罰ゲームは覚えている？」

麻由美の陰謀にはめられた例の件か。
俺は軽く首をかしげながら、

「はて、何のことやら」

「……薄情者な若年性健忘症の翔太くんはいつか痛い目にあいそう」

「それを言っな。はあ、罰ゲームって結局何をすればいいんだ？」

「ふふつ。喉が渴いたからジュースでもおごってもらおうかな」

麻由美は近くの自販機を指差す。

それくらいならかまわない。

こうしてわざわざ案内をさせているのもこれでチャラだ。
自販機前で悩む麻由美は俺のおごりだと喜びながら選ぶ。

「何にしようかな。炭酸はキツイからオレンジジュースにしよう」

「了解。俺はコーラにでもしておこう」

ふたりで空き地を歩きながらジュースを飲む。

冷えたジュースで喉の潤いを満たした所で次なる場所へ。

時間はまだ夕焼けに差し掛かる前でしばらくはありそうだ。

「こっちゃんの家から近い場所に幽霊屋敷って呼ばれる場所があるの」

「……幽霊屋敷？」

「うん。今でも現存しているよ。古い洋風のお屋敷でね、見た目がすごいよ。見ればきつと分かると思う。何回か翔太くんも行っただから覚えてるんじゃないかな」

琴乃ちゃんの家の前を過ぎ去りしばらく進むと住宅地でも洋館が並ぶエリアに入る。

その端の方に一軒だけ古びた洋館があった。

錆ついた扉は朽ちはて、中に入る事もできそうだ（不法侵入は犯罪です）。

「うちの教会と似た感じだけど、ここまでひどくないよ」

「確かにこれは幽霊屋敷って言われるな」

「……中はずっと怖いけどねえ。よく肝試しとか、探検とかで来たなあ。覚えてる？」

「全然、覚えてない。どういう経緯でこのボロ家は建ってるんだ？普通なら取り壊されたりしているだろ」

これだけボロいと言う事は誰も住んでいないんだろう。

「20年くらい前に一家離散したって聞いている。夜逃げ同然に
なくなっちゃったんだって。今は誰が所有者から知らないけど、
ずっとこのままだよ」

さすがに中に入るわけにはいかないが、俺達は外からその洋館を
眺めつつける。

「このボロ屋敷の内装は？」

「見たまんまで古い建物。怖いから近づきたくないな。そうだ、思
い出したっ」

声をあげて彼女は俺の顔を見る。

「何を思い出したんだ？」

「そうだよ、ここで鈴音と翔太くんが行方不明になって大騒ぎにな
ったんだ。一緒に中で探検していたら、いつのまにかふたりがいな
くなって……こっちゃんのおばさんに後ですごく怒られたの。アレ
以来、入っていないよ」

「俺と鈴音が？」

鈴音って言うのはあの「お兄ちゃん」って呼んでくれていた子だ
ろ。

この場所で、俺が仲良くしていたと言うその子と行方不明になっ
たらしい。

「結局、地下の倉庫で見つかったんだ。鈴音が足を怪我して、それ

を翔太くんが助けようとして倉庫に閉じ込められちゃったみたい。
古い屋敷だから鍵も緩んでいたんだろうね。大人が何人も来てふた
りを探してようやく見つかったんだ」

麻由美は「私も怒られて嫌な思いをしたんだ」と記憶のない俺を
責める。

「それはすまなかった。それで、俺達は無事だったのか？」

「鈴音は怪我してたけど、翔太くんは無傷だったよ。ただ、疲れき
つていてそれから何日か寝込んでたみたい。こっちゃんも心配して
いたんだから」

俺が行方不明になっていたと言う洋館。

何となくだが、暗闇の倉庫の記憶が蘇る。

……何だかそう言う事があったかもしれない。

「実は俺って暗いところがダメなんだよ。不安になるっていうか。
今でもそうなんだけどさ。電気消して寝れないんだ」

「そうなの？うわっ、それってあれじゃない？トラウマ。ここでの
経験が翔太くんの心に傷を負わせてたのかも。怖い思いをして、暗
い場所が嫌いになったんだ？」

「という事なんだろうな。ずっと理由不明で、あの10年前の辺り
からだったからほぼ間違いないと思う。そうか、俺はここで閉じ込
めれたせいで暗所恐怖症になったのか。今になって思うと情けない
な」

治そうと思っても今でも治せない。

暗い場所で寝る事がどうしてもできないのだ。

普通に夜の街を出歩く程度は問題ないんだが、寝るとなるとどうしてもダメになる。

母さんも理由が分からず、俺の困った癖のひとつになっていたのだが、今になってようやく理由が理解できた気がする。

過去は自分の人生の積み重ねてきた記憶だ。

当たり前なんだがその重みって奴を実感させられる。

そりゃ、琴乃ちゃんだって怒るよな。

俺が彼女の過去を否定する言葉の一つ一つが傷つけてしまうナイフのようなものだ。

「少しずつでいいから思い出さないといけない」

俺はその事を強く感じながら、幽霊屋敷の洋館を後にした。

第21章：過去を求めて〈後編〉

【SIDE：井上翔太】

「なあ、聞いてもいいか？俺がすっかり忘れている10年前の事をどうして、麻由美や琴乃ちゃんは詳細に覚えてるんだ？」

最後の場所である展望台公園に向かう途中、俺は気になって麻由美に尋ねる。

麻由美は「え？」と何を今さらといった風に俺を見下した目で見ただ。

「私やこつちゃんは、どこかのお兄さんみたいに薄情者でも、若年性健忘症でもないからだよ。私達はまだ若いからねえ」

「おい、俺は年寄りの爺さんか」

「それよりひどいかも。おじいちゃんと同じ事を何度も言うけど、どこかのお兄さんはそれすらできないから」

「……言い返すこともできません」

ぐうの音も出ないとはこのことが。

忘れてしまった俺が全て悪い。

何で忘れたんだろうな、俺……。

人生で可愛い女の子と縁があったのは琴乃ちゃん達だけだったのに。

小学生の頃は何でも興味持っからさ。

少年サッカー部に入ったりしていたし、琴乃ちゃん達の事を忘れ

てしまったんだろう。

「まあ、理由があるとする……あの頃の私達に親しい男の子は翔太くんだけだった。琴乃ちゃんなんてきつと初めて話した男の子かもしれないよ？幼稚園の時も全然男の子と話そうともしなかったの」

「……男嫌いつてやつか？」

「うーん。嫌いというか、男の子と話す機会がなかったというか。こっちゃんって昔はすごく人見知りだったからね。男の子は怖いって勝手な印象を抱いていたのかも。それも誤解だって理解したのは翔太くんのおかげかな」

「ただ、俺にとってのイメージと琴乃ちゃんの過去のずれ。」

俺の記憶にいる琴乃ちゃんは元気で明るい女の子。

ここまで来ると当然、俺の方の印象がおかしいと疑い始めていた。

「……琴乃ちゃんって、大人しい子だったのか？」

「基本的には大人しいかも。今もそうだよ、翔太くんの前じゃ積極的な素振りを見せているけど、それは演技。かなり無理して翔太クンに合わせてる」

「どうして……？」

俺は別に無理して明るく振る舞って欲しいとは望んでいない。

違和感が消え去らない理由。

それは、もしかしたら、本当の彼女と接していないからなのではないか。

「どうしてって、こっちゃんが翔太クンを好きだからに決まってる。10年ぶりの再会、高校の入学式の時にこっちゃんが翔太クンを見つけたのよ。でもさ、何で直接会うのにこれだけ時間が空いたかその理由分かる？」

「2週間ぐらい後になって偶然にも再会した。その2週間の事が」

「偶然がなければきっと本当の再会のもっと後だったと思う。こっちゃんは自分に自信が持てるようになるまで頑張っていたのよ。お化粧とか全然しなかったのに、急にメイクの練習とかしはじめた。性格もそう。好かれない一心で今の彼女は無理を続けている。その結果、恋人同士になれたけどね」

琴乃ちゃんは俺のために無理をしているのか。

それは間違いだ、俺は素の彼女でもきつと好きになっていた。

「自信を望む理由が分からない？」

「ああ。そこまでしなくても、俺は別に気にしないぞ」

「それを彼女に気にさせているのが、翔太クンの“過去”なんだけどなあ」

意味深に呟いた彼女は苦笑いを浮かべていた。

麻由美が最後に連れて来たのは何度も来ている展望台公園だ。夕闇の森林の中を抜けて、展望台へと出る。

「……ここが私達の思い出の多くがある場所。よく遊んでいたし、何度も連れてきたはず。翔太くんが一番、仲がよかったのは鈴音だつて言つたでしょ。本当に仲が良くて、幼い頃のこっちゃんは嫉妬して、拗ねていたと思うんだ」

それが嫉妬と言う感情だと理解できなくても。

子供同士でおもちゃの取り合いをするように、子供にも譲れない想いというものはある。

「いつも仲良く遊んでいた鈴音。それが羨ましかったんだよ。だから、こっちゃんにどうすれば翔太くんと仲良くなれるか考えていたはず。再会しても今のままじゃ振り向いてもらえないって思つたんだ」

「……俺を再び見つけて、付き合うために無理をした。過去の事があつたからか」

「端的に言えば、だけどね。翔太くん、女の子の本心に気づいてあげなきゃダメだよ」

琴乃ちゃんが俺を好きでいてくれたその気持ちは嬉しい。だが、やはり俺には腑に落ちない記憶のずれがあるのだ。

『翔ちゃん、遊ぼうよ。今日は何しようか？』

俺を連れまわして遊んでいた琴乃ちゃん。

鈴音と言つ少女は俺の記憶の微かな記憶でしかない。

『……翔お兄ちゃん。ついてきて、こっちだよ』

俺をお兄ちゃんと呼び慕ってくれていた鈴音は一体、どんな子だったのか。

「俺の記憶の中の琴乃ちゃんは常に明るくて、楽しい子だった。本当に大人しい印象なんてひとつもなくてさ。逆に言うと、鈴音の方は物静かだったかもしれない」

「鈴音が？うーん。こっちゃんは人見知りだからギャップがあるかもしれないけど、鈴音は昔から大人しくはなかったけど？」

「……あー、もうっ。わけが分からん。何が真実なんだ」

「それほど悩むなら覚悟決めて、こっちゃんとお話すればいいのに。翔太くんが悩んでる理由、私の方がワケわかんない」

その勇気がないのだ。

琴乃ちゃんを傷つける事になってしまふ展開が本当に怖い。どうしても、聞けないのは失う事を恐れているからかもしれない。

「もう一度だけ確認する。俺と鈴音が仲が良かったんだな？」

「何度言われてもそうなんだけど？そんなに気になるなら本人に会えばいいじゃない」

「会えるのか……？」

「多分。会いたければすぐに会えるかも。だって、GWくらいには帰省するはずだもの」

鈴音は全寮制の学校に通っていると聞いた。
GWならばこちらに戻ってくるかもしれない。

「麻由美、頼みがある。もし、鈴音が戻ってきたら俺に連絡をしてくれないか？直接会って話がしてみたいんだ」

「いいけど？でも、私に頼まなくてもこっちゃんに頼めば？」

「……それはちょっとな」

鈴音絡みはどうにも彼女に尋ねにくい。
負い目があるわけじゃないが、触れてはいけない話題に思えた。
麻由美は腕を組みながら考え事をする。
俺の態度が気になったようだ。

「あのさ、翔太くん？私も確認していい？」

「確認……？何だよ、俺にか？」

「もしかしたら、翔太くんが覚えていないっていう理由が分かったかもしれない。おじいちゃんが言っていた意味もね」

「神父様が、俺に何を言っていたんだ？」

そういえば、琴乃ちゃんの事を尋ねた時に何かはぐらかされてしまったっけ。

俺は勢いで麻由美の肩を掴んでいた。

「教えてくれ。麻由美、お前しか頼れないんだよ」

「そんなに焦らなくてもいいじゃん。びつくりするなあ。あのね、翔太くんには自分で思い出すべき事があるっておじいちゃんはその言っていた。私も気になっていたんだ。翔太くんって、もしかして」

麻由美が何かを告げようとした時、森の中を風が吹き抜けていく。夕焼けの日差しが俺達以外の影を作っていた事に気づく。

「な、何をしているんですか、ふたりとも？」

呆然とした表情で立ちすくむのは琴乃ちゃんだった。

俺は気づく、俺は麻由美と距離を詰めて意味深な会話をする姿が誤解を生んでいる、と。

逆の立場なら確実に誤解する。

俺と麻由美が親密そうに会話する光景は裏切りの光景以外の何物でもなかった。

顔面蒼白と言った彼女に俺は後悔で血の気が引いてた。

第22章：崩れる信頼

【SIDE：井上翔太】

「な、何をしているんですか？ふたりとも」

麻由美に身体を触れさせた状態の俺を、琴乃ちゃんは見て驚きの声を上げた。

間違いなく誤解されている。

俺が逆の立場ならきつと変な誤解をしているだろうから。

そうではなくとも、自分以外の相手と親しくする光景など不愉快以外の何ものでもない。

「こっちゃん？え？何でここに？」

「……マユ、ひどいよ。私の先輩に変なことしないでっ」

「ち、違うつてば！？私、何もしてないし」

慌てて麻由美が身体を離して誤解を解こうとする。

けれど、悲しみの表情を浮かべる琴乃ちゃんには通じない。

ふたりが険悪になる必要なんてないのに。

「先輩もひどいですっ。私、確かに今日は喧嘩していましたけど……」

「違う、違うんだ。琴乃ちゃん」

「何が違うつて言っんですか？私の知らない所でこんな風に、誰も

いないところで抱きついたりして、そんなの……嘘だって、どうして言えるんですか」

怒らせた事に対する後悔と罪悪感。

俺の軽率な行動が彼女を傷つけている。

それを痛いほどに感じたから俺は謝る事しかできない。

「誤解なんだ、琴乃ちゃん。俺達の話聞いてくれ」

「聞きたくないですつ。私、先輩の事を信じていたのにつ」

「だから、それが誤解なんだってば!」

琴乃ちゃんに話だけでも聞いてもらおうと俺は何とかしようとする。

重苦しい雰囲気には俺達はそれぞれ追い詰められていた。

こんなはずじゃなかった。

俺が過去を知りたいと思ったのは琴乃ちゃんを傷つけないように思った事なのに。

「……琴乃ちゃん、話を聞いてくれ」

「嫌ですつ。聞きたくありません。私は、先輩が好きなのに、こんなので……」

彼女は俺達に拒絶の意思を見せる。

その反応に俺たちは互いに顔を見合わせて小声で言う。

「……もしかして、こっちゃん。私と翔太くんが出来てると勘違いしていない?」

「そうだろうな。しかも、彼女の中ではきつと裏切ったのはお前の方だぞ。琴乃ちゃんの目がそう言ってる」

「嘘っ。私が寝取った側！？こっちゃんの彼氏を奪う真似するはずないじゃんっ」

そもそも、俺と麻由美は再会してからまだ数日しか経っていない。動揺している彼女に俺が出来る事と言えば必死に説得するだけだ。

「俺の話を聞いてくれ……っ、琴乃ちゃん！？」

俺達の前から逃げようとする彼女。

俺は逃がしてはいけないと追いかけようとする。

「待ってくれ、琴乃ちゃんっ！？」

「待ちません。先輩が、先輩がそんな人だったなんて……マユも、先輩も嫌いです」

「違っって！？それも違っけど、前に木がっ……危ない！」

「……え？きゃっ！？」

俺の声に気づいた彼女は慌てて止まろうとするけど間に合わず。思いつきり大木と正面衝突して彼女は地面に転げた。

木にぶつかったと言うよりは木の根っこに引っかかったようだ。

「こ、琴乃ちゃん、大丈夫か！？」

「うう、ひつく……」

涙目で腕を押さえる彼女。

ドジっ子だ、と普段なら笑い話にしたいがこの場合はそうはいかない。

幸いにも怪我はないが、何とも運と間が悪い。

「痛いです……うっ……」

「ほ、ホントにごめん」

俺は転んで立ち上がれない彼女に近づく。

何とか話を出来る状況に俺は強引に持ち込んだ。

「琴乃ちゃん。俺は本当に麻由美に何もしていない。キミに内緒でふたりで会っていたのは事実だ。けれど、それは意味があるんだよ」

「何があるって言うんですか？先輩、私、拗ねていました。先輩が私の事を“まだ”思い出してくれてないのにマユの事は覚えていた事を寂しいって思いました。でも、だからと言って先輩が嫌いになつたわけじゃないんです」

「……え？」

今、彼女はまだ思い出していないと言ったか？
どういうことだ？

確かに俺は思い出せていない、けれど、小さい事だけど彼女の事は覚えてはいるはずなのに。

……それすらも違うと言うのか？

彼女は俺が触れようとすると身を引いて逃げようとする。

「だからって、こんなに早くマユに気持ちを变えてしまっなんてひどいです」

「变えてないって。俺は今でも琴乃ちゃんの事が好きだし」

「……だったら、何でこんな真似をしているのか説明してくださいっ！」

そりゃ、そうだよな。

俺がしている事を責められるのは仕方ない。

彼女に隠れて過去を探ろうとした。

それ自体は悪い事ではないが、こう言う真似は避けるべきだった。最初から彼女に言うべきだったのだ。

俺は琴乃ちゃんの悲しい想いをさせたくなくて、いいや、これは言い訳だ。

過去を覚えていない俺の罪悪感が自然と彼女からの追求を避けてしまっただけなんだ。

「分かった。説明するよ」

俺は彼女に向き合って全てを話すことにした。

「……うえーん、その前に気まずい修羅場の場面に私がいる理由を教えてよ」

俺達の横で琴乃ちゃんに睨まれて困り果てる麻由美。

すまん、麻由美には余計な迷惑をかけているがもうしばらく付き合ってくれ。

「琴乃ちゃん。俺はさ、ただ過去を知りたかっただけなんだ。琴乃ちゃんとの思い出を、ちゃんとした形で思い出したかったんだ。俺本当に琴乃ちゃんが好きだよ。初めて出会ってから2週間、いろんなキミを見てきて、好きだって思ってる」

俺の場合は好きになったのが過去じゃない。
過去の記憶じゃなくて今のこの子を好きになった。

「だけど、琴乃ちゃんは昔から俺を好いてくれているだろ。何ていうか、焦っていた。琴乃ちゃんの想いに俺がついていけない気がして。過去を思い出せたら、思い出話も出来てもっと近づけると思ってたんだ」

「……翔太先輩？」

俺は彼女にゆっくりと近づいてその手を取り、身体を起こしてやる。

今度は逃げる事もなく俺の手を握る彼女。

「俺、琴乃ちゃんが悲しい顔をするのが嫌だからずるをしていた。麻由美に出会って、彼女経由で過去を思い出せば、琴乃ちゃんは傷付かないって。ダメなんだよ、そんなことをしちゃいけないかった。俺が琴乃ちゃんに向き合わないとダメなのに」

「先輩……。私の事をそう言う風に考えてくれていたんですか？」

「恋人になる時、ここから始めようって最初に言っただろ。キミには悪い事をしていると罪悪感がある。過去を思い出せない、その事にとらわれてちゃ本末転倒。意味ないのにな。そんなことにも気付けなかった」

俺が今、大事にしなければいけないのは過去の思い出ではない。それも大事だけど、もっと大事なのは琴乃ちゃんだ。

彼女を傷つけるような事をしてまで思い出す必要はないのだから。

「ごめん、本当にごめんな。俺はただ、琴乃ちゃんに想いを追いつかせたかっただけだ」

「先輩が私を想ってくれていて嬉しいです。私、マユが羨ましかっただけで、拗ねたりして、先輩を困らせて……」

俺は彼女を優しく抱きしめる。

朱色の空、照らす夕焼けに俺達は染まりながら抱擁しあう。

「約束するよ。俺は琴乃ちゃんを裏切らない。だから、琴乃ちゃんも俺を信じて欲しい。俺って、情けないけどさ。いつか、絶対に思い出してみせるから。もう少しだけ時間をくれないか？」

「私も、先輩を信じていいんですよね？私はいつも自分に自信がなく、先輩が他の相手に振り向いてしまうんじゃないか。そう思ったら、悲しくて……」

その心配、しなくていいよ。

残念ながら俺はそこまでモテる人間でもない。

俺達はそれぞれ、不安になってしまったのだ。

新しい変化が俺達を変えてしまうのではないかって。

俺達は顔を見合わせて距離を詰めあう。

「先輩……好きです。大好きです。お願いだから、私を好きでいてください。他の女の子に振り向かないでください。そういうのは私

も嫉妬しちゃいます。私、先輩にもっと好きになってももらえるように頑張りますから」

「そんな事をしなくても、十分、俺にとっては魅力的なんだよ」

俺の言葉に微笑みを浮かべる彼女。

この子の笑顔を守りたい。

俺はそう感じさせられながら、その唇を重ね合わせる。

「んうつ……」

キスを続けながら俺の脳裏によぎるある一つの光景。

『初めてのキスをファーストキスって言うんだって』

『ふぁーすときす？そう言うんだ？』

『うん。だからね、これが俺達のファーストキスだよ』

子供同士のキス、これまでの思い出の中でも鮮明に思い出せた。

「……琴乃ちゃん。俺、少しだけ思い出せたかもしれない」

「何をですか……？」

「俺達が初めてキスをした場所。それって、あの教会じゃないか？」

俺の一言に彼女は驚いて涙を浮かべた瞳を見せる。

だけど、気になるのは……あの時の相手は本当に琴乃ちゃんだっただのか……？

「……はい。そうです。やっと、思い出してくれましたね。些細な事でも、“本当の私”を思い出してくれてよかった。翔太先輩」

本当の琴乃ちゃん。

その台詞の本当の意味を知るのはこれからもつと後の事だ。

だが、今の俺達は幸せな気持ちでいっぱいだった。

もう一度、キスをして互いの想いを確認し合う。

「……おい、おふたりさん。ラブシーンはいいけど、私がいるの忘れてませんか？……って、聞いてないし。修羅場に巻き込まれ、生キスシーン見せられる私って不幸すぎ。早く帰りたいよあーっ、しくしく」

そう言っただけで麻由美、後で思いっきり彼女に怒られたのはまた別の話。

ふたりの関係をこれからもつと深めあう事ができる。

そう思っていたんだけど、現実はその甘くはなかったんだ。

第23章：幸福の実現（前書き）

今回は琴乃視点です。

第23章：幸福の実現

【SIDE：藤原琴乃】

大好きな先輩を失うこと。

私にとってはもう、それだけは一番失いたくない存在になっていた。

私の大事な恋人。

先輩との初めての喧嘩。

きっかけは私の嫉妬から始まった。

先輩は今でも私の事をちゃんと思い出してくれていない。

それなのに、マユの事は一度で思い出した。

それが悔しくて、悲しくて……。

拳句の果てに、ふたりが私の知らない所で会っているとすれば勘違いもする。

マユには好きな人が別にいるから、ありえないって言うのは後から冷静になって思い出すんだけど、その時はすごくびっくりして自分でも思わず怒りが出てしまった。

「……ふーん。なるほどねえ。それがこっちゃんが私を敵対視して睨んで責めまくった上に、最後は仲直りのキスシーンを見せつけた理由なんだ？」

「ご、ごめんってば。私が悪かったの。マユ、許してよ」

学校の昼休憩になって、私はマユに謝罪した。

親友を疑う事も、その、キスしているところを見せつけてしまったのも反省している。

私にはつい思い込んだら突っ走ってしまう悪い癖がある。

今日は先輩は友人と食事を取るらしく、久々にマユとふたりつきりだ。

お弁当をつつきながら私達は雑談をかわしていた。

「別にもういいけどね。私がこっちゃんの彼氏を寝取る趣味はないって事だけ理解しておいて。むしろ、私はふたりの仲を良くするために動いていたのに。裏目に出たのも、何て言うか不運だわ」

「あはは……ごめんなさい。そう言えば、昨日はどんな場所を回っていたの？」

「うーん。高台の空き地とか、幽霊屋敷とか」

「うぐづ。幽霊屋敷にも行ったんだ？私、あそこは嫌な思い出しかないな」

あの古びた屋敷はとても怖くて近づきにくい。
今でもそうだ、あの前を通るのはすごく苦手なの。

「あの場所で前に鈴音と翔太くんが迷子になった事があったじゃない？」

「うん。結局、地下室で見つかったんだ」

「ワインセラーって言うのかな。ワインの保管庫だった場所に1日暗い閉じ込められてすごく怖かっただろうな。でも、翔太くんはそんな事も覚えてないんだって」

「……怖い記憶ほど封印したくなるからじゃない？」

嫌な思い出ほど、思い出したくないのは普通の事だ。
私はお茶を飲みながらマユの視線に気づく。

「……な、何？私を見て？」

「あのさ、昨日、翔太クンと一緒に見て回って、私はある事に気づいたのよ？」

「へえ、何に気づいたの？先輩の秘密とかだったら教えて欲しいな」
私がそう言うと彼女は真面目な顔をして言うの。

「こっちゃん、翔太クンに嘘をついているよね？」

「え？あ、えつと……」

思わぬ追求に私は言い淀んだ。
私が彼にある秘密を隠しているのは事実だ。
それをマユに気づかれるなんて。
よく考えれば先輩と話をしていれば、その違和感に気づくのも自然なことかもしれない。

「……やっぱり、そうなの？こっちゃん、それでいいの？」

「だって、仕方ないじゃない。今さら言いだせないし」

「翔太クン、過去を思い出せなくて当然だと思う。だって……うぐっ！？」

私は彼女の口を手で押さえていた。

他人の口からでも聞きたくない事実だった。
私にとって、その嘘は本当にバレるのが怖い。

「うぐっ。な、何するのよ」

「ごめん、つい」

「ついて何？もうっ、そんなので本当の恋人として大丈夫なの？
過去は気にしないってふたりとも言っけど、一番気にしているのは
こっちゃんじゃない」

「そうかもね。でも、私はそれでいいの。どうせ、私は……」

昔の私では先輩の心を捕らえる事は出来ないから。

今、新しい関係として作り上げた信頼。

それだけで十分、本当の事を言えば過去は過去としてしまってお
きたい。

だが、そのことにマユはどうにも納得がいかないようだ。

「いいわけないじゃない？いつか嘘がバレたらどうするの？それに
鈴音だって、もう少しで帰ってくるんでしょっ？」

「……」

間近に迫るGW、それが私にとっては憂鬱の種だ。

「……本当にいいの？嘘をつき続けたままで？それって、一番つら
いのはこっちゃんでしょう？分からない。そんなの、意味がないじ
ゃない？好きなんでしょ、それでいいの？」

「意味がない、か。そうだね、私もそう思う。逃げているだけなんだ。だって、怖いんだもん。今までの事が全部、壊れてしまいそうで…… そう思ったら、どうしても、何もできなくて……」

思い出まで、失いたくない。

私は今のままでいい。

不変、それを望んではいけないの？

「……逃げだと思うけどな。ホントに、翔太くんが好きならきつと正面から向き合っても大丈夫だと思うよ？」

「怖い……怖い、私」

嘘がバレた時、私達の関係が終わってしまう気がする。

先輩は私を責めるんじゃないか。

私の事を嫌いになってしまふんじゃないか。

そう考えてしまうと何も考えたくない。

マユは深いため息をついて言うんだ。

「こっちゃん、逃げるな。ちゃんとさえばいいじゃん」

「それが出来たら苦労しない」

「どうせ、初めは翔太くんが悪いんだろうけど。否定しなかった、こっちゃんも悪いんだよ？本当にそれでいいわけ？」

マユの叱咤に私はシュンツとしながら、

「それでも、私は嘘をついてでも、少しでも先輩に私の事を覚えていて欲しかったんだ」

彼の記憶にわずかでも残っていたかった。
だから、私は嘘をついたの。

「……思い出の少女、そんな子がどこにもいないって知られたら、翔太くんどう思うんだろうね？ 鈴音も帰って来たら、嘘は突き通せないよ？ 今のうちにごめんなさいって言って、真実を告げた方がいいんじゃないの？」

「私、思っんだ。翔太先輩を信じたいって……」

「それって真実を知っても、こっちゃんに振り向いてくれるって言う事？」

私は静かに頷く、終わりの時間は迫りつつあるかもしれない。
それでも、わずかな可能性に賭けてみたいの。

「こっちゃんがギャンブラーなのは分かった。逃げてるなりに頑張って考えてはいるんだ？ それが正しいかどうか、私には分からないけど、こっちゃんがそう決めているのなら私からは彼には何も言わないようにする」

「ありがとう、マユ」

私はお礼を言うと「私よりこっちゃんが心配だよ」と彼女は言うてくれる。

親友っていいな、と思いつながら私は空を眺めていた。
屋上から見える晴れ渡る青空が綺麗だ。

「嘘つきには天罰がくだるんだろうね」

だけど、視界の先には雨雲が見え隠れしている。
もうすぐ雨が降るかもしれない。

「ごめんね、翔ちゃん……」

呟いた言葉は風に乗って4月の春の空へと消えた。
。

第23章：幸福の実現（後書き）

次回からは新展開になります。

第24章：嘘つきの恋へ前編

【SIDE：井上翔太】

……それはどれほどの昔の記憶だろうか。

暑い夏、蝉の鳴き声の響く森の中に俺はいた。

カブトムシ。

いきなり俺の目の前に突き付けられたのは黒光りする角を持つ昆虫。

「……カブトムシ？」

「そうだよ。カブトムシ。その木で見つけたの」

角の部分を持ちながら目の前の少女はそっと俺にカブトムシを手渡す。

「翔ちゃん、男の子だから好きでしょ？あげる」

「……ありがとう。でも、俺はあんまり虫は好きじゃない」

「そうなの？」

俺にカブトムシを手渡してきてくれたのは“琴乃ちゃん”だ。

彼女は数日前に俺が預けられた家の娘。

すぐに仲良くなったのは良いけれど、女の子にしては元気すぎる子だった。

普通なら虫を嫌悪するものなのに、全然苦手ではない様子。

「男の子は皆、好きだと思っていた。パパと虫とりに行ったりしないの?」

俺は足を動かしてモタつくカブトムシを眺める。

「……俺、お父さんいないし。お父さんって、会った事もないんだ。お母さんと二人でずっと暮らしてる。琴乃ちゃんはお父さんとよく出かけるの?」

「私のパパ、アウトドアが好きなの。だから、私もよくいろんな場所に連れて行ってもらうんだ。キャンプしたり、テント張って星空を見たりするの」

「アウトドア? キャンプ? テント?」

小学2年の俺にとってはまだ聞きなれぬ単語ばかり。
彼女は俺に説明しようと頭をひねる。

「えつとねえ、外で遊ぶ事をアウトドアって言うんだって」

「そうなんだ? 全然知らないや」

俺にとってはそれらは縁のない言葉だった。

休日に家族とどこかに遊びに行った。

遊園地、山、海など、友達をよく家族で出かけたりするらしい。

でも、俺はお母さんとはあまり出かけた事がない。

いつもお仕事で忙しいから、言っても無理だって分かっていたから。

片親だけの生活に慣れてはいても、寂しさくらいはある。

俺もどこかに行ってみたい、知らない場所で楽しい思い出を作っ

てみたい。

「それなら、今度、パパに頼んでどこかに連れて言ってもらおうよ。夏休みはずっと私の家にいるんでしょう？そうしよう？」

明るい笑顔で言う彼女。

だが、俺はどこか寂しさを感じていた。

俺にはお父さんはいない。

お父さんっていうのが家族でどういう立場なのかは大体知っている。

……俺にもお父さんがいれば、お母さんと離れなくてもよかったのかな？

「翔ちゃん？どうしたの？」

「え？あつ、その……カブトムシ、可哀想だから逃がしてもいい？」

「可哀想？翔ちゃんって優しいんだね。いいよ、逃がしてあげて。どうせ、家では飼えないもの。“鈴音”が怖がるから」

彼女が名前を呼んだ鈴音と言う女の子。

琴乃ちゃんの“妹”、俺はまだあまり話をした事がない。大人しい子で俺が話しかけてもすぐに逃げられてしまう。

「鈴音はカブトムシが嫌いなんだ？」

「虫とか大嫌いだよ。足がうによってしてるのが嫌みたい」

俺はその手に持ったカブトムシを逃がそうと木に近づける。その時だった、俺達の背後で小さな女の子の声がする。

「あ、あの、お姉ちゃん。しよ、翔お兄ちゃん。ママがお昼ご飯だから帰ってきてって」

控えめな声で俺達を呼ぶ少女。

「そう？分かった、すぐに帰る。ほら、行こう、翔ちゃん」

琴乃ちゃんが俺の手を引いて歩きだす。

俺は片手に掴んでいたカブトムシをつい手放してしまった。

「あつ！？」

元々逃がすつもりだった、逃げる事は全然かまわない。

だが、そのカブトムシが羽ばたいた先にいたのは……。

「きゃっ！？」

鈴音めがけて飛んだカブトムシ、彼女の服に引っ付いてしまったのだ。

虫嫌いの彼女は驚いて慌てふためく。

「い、嫌！？は、離れてよっ！？」

その様子を琴乃ちゃんは「虫ぐらいで騒がないで」と妹に呆れる。虫が大丈夫な彼女は平気なのだろう。

だが、俺もそうだが、苦手な人間には本当に嫌なものなんだ。

「た、助けて、うえーん」

泣き出してしまふ鈴音を俺は見てられずにすぐにカブトムシを引き離す。

「翔お兄ちゃん……？」

「もう大丈夫だから。変な場所に逃がしてごめんな」

俺は今度こそ、カブトムシを空へと放った。
涙に濡れた瞳で俺の顔を見つめてくる彼女。

「ありがとう、お兄ちゃん」

鈴音は俺にそう言っていると、涙をぬぐった。

それまで俺を避けていた彼女。

初めて、彼女が俺の顔を見て話してくれた。
可愛らしい顔つきをしている女の子だと思った。

「……翔お兄ちゃん」

もう一度、俺をそう呼んだ彼女は俺に手を差し出してくる。

鈴音の小さな手を握り返すと微笑を浮かべる。

「あつ、ずるいっつ。鈴音、翔ちゃんとは私も仲良くしたいのに」

琴乃ちゃんの声に俺達は笑い合う。

夏の日差し、少しだけ俺達の距離が縮まった瞬間だった。
。

……。

夏はまだ遠い、4月下旬のある日。

俺は母さんからの電話で目が覚めた。

最近、新しく働き始めた隣街の私立病院。

昨日も泊りの仕事で留守にしていたのだが。

「……はい？」

『だから、机の上にある資料を持ってきてって言うてるの。今すぐに持ってきて』

「今すぐにつて今、何時だと思ってるんだよ」

時計はまだ6時半、俺はまだ寝ていたい気持ちだ。

『朝から会議があるの。その資料を忘れちゃったからすぐに欲しいの。それでも朝になるのを待ってあげたのよ？夜中の3時に連絡したわけじゃないんでしょ』

そりゃ、そうだろうが、俺にとってはどちらも同じだ。

「分かった。すぐに持っていく。どこに行けばいい？」

『私の勤める病院は分かるでしょ？そこの内科のナースステーションに来て』

「はいはい。すぐに行くよ」

『私がいなかったら誰か他の人に渡しておいてね。それじゃ、任せろわ。30分以内に来て。なるべく急いで、いい？』

おい、30分ってここから自転車でも時間はかかる。
だが、相手はそんな事など気にせず、電話を切りやがった。

「仕方ない。さっさと行ってくるか」

俺はベッドから起き上がり、さっさと着替えて出かける準備をする。

資料も見つけて、俺は母の命令通りに急いで病院へと向かった。

自転車をこぎ続けて20分、目的の私立病院が見える。
場所は知っていたが、実際に来るのは初めてだ。
立派な建物、病院自体もかなり広い。

「ここか。ナースステーションってどこだ？」

俺は中に入るとまだ時間も早いためか、人の気配がない。

「あれ〜っ？お姉さん、ここだって言っただけだな？」

受付もまだ時間外だったので誰もおらず、通りがかった看護師に
道を尋ねたのだが……。

『外科、ナースステーション』

「……外科じゃん!？」

母さんが言った内科とは違う。

単純ミスだが、時間的には厳しくなってきた。

母さんは時間に厳しいお人だ、ここは早く届けなければいけない。だが、普通ならどこかにありそうな地図も見当たらず、俺は困り果てていた。

「おや、キミ、こんな時間にどうしたんだ……？」

医師だろうか、白衣を着た男性が俺に気づいて声をかけてくる。よかった、誰でもいいから人がいてくれて助かる。

「……すみません、内科のナースステーションはどこですか？」

「内科？ああ、それならここから先に行ったところだよ。私もこれから向かう所だ。何か用事でもあるのかい？」

「母がナースなんですけど、忘れた資料を届けに」

「……そうか。それなら、案内しよう。こちらだ」

ここでこの先生に渡してもいいような気がしたが、この手の資料は出来る限りは手渡しておいた方がいいだろう。

「そう言えば、キミのお母さんの名前は？」

「葉月です、井上葉月。看護師長をしていると聞いてますが……？」

「……葉月の息子？まさか、キミは？」

彼は俺の顔をマジマジと見つめてくる。

口髭をはやした40代前半くらいのおじさんだ。
驚いた顔を見せる彼に俺も驚く。

「……あ、あの？何ですか？」

初対面のおじさんに見つめられても困るだけだ。

「いや、何でもない。そうか、彼女の息子か……」

彼はそう呟いて、俺から視線を外す。

何だろう、この人は……どこかで会ったような？

不思議な感覚を俺は抱き、彼の横を歩きながらナースステーションへと向かった。

第25章：嘘つきの恋へ後編

【SIDE：井上翔太】

早朝、母さんに頼まれた資料を届けに勤務先の病院を訪れた。
俺が出会ったのは口髭の似合う謎のおじさん。

母さんの事を知っているようだが、一体誰なのだろうか？

「……そう言えば、名前を聞いてもいいだろうか？」

「俺は井上翔太って言います」

「翔太。そうか、いい名前だ。僕は佐々木信彦（ささき のぶひこ）。この病院の院長をしている」

「院長先生だったんですか？」

「ひと月ほどまえに就任したばかりだよ。それまではずっと地方の大学病院を転々としていた。この病院は僕の祖父が経営する系列の病院だね。ようやくここに落ち着けそうだ。……葉月、キミの母さんとは古い友人だったんだ」

うちの母がこの病院に来て、すぐに看護師長になれたのは彼のおかげなのだろうか？

その事を尋ねて見ると、彼は笑いながら言う。

「逆だよ。僕が彼女にこの病院にきてもらえるように頼んだ。看護師として優秀な彼女を、別の病院から引き抜いてきたのさ」

「そうだったんですか」

廊下を歩きながら俺は母の態度を思い出す。

この病院の話を受けた時、どこか嫌そうにしていた気がしたのが気のせいかな？

「……佐々木さんと母さんはどういう知り合いなんですか？」

「僕と葉月かい？十数年前、初めて勤めていた病院が一緒だったんだよ。まだ僕は2年目の研修医で、彼女も新人ナース。互いに新人として、戸惑い、悩み苦しみながら大変な仕事に明け暮れていた。それから僕も地方に行ったりして、疎遠気味になっていったんだ」

彼はそこで言葉を止めて、俺の顔を見る。

「その後も時々、仕事で逢うことはあったが、本格的に1年ほど前にこちらの地方に再び戻ってきたのが縁で葉月と再会したんだ。それから友人付き合いもしている。だが、キミの話は葉月からは聞いていなかった。子供がいる事もね」

「……母もいい歳ですけど？」

「ははっ。そう言う意味じゃない。彼女はあまり自分の事を話さないから気になってね。まあ、十数年たてば変わっている事もある。彼女が結婚して、子供がいる事も知らないのは友人としては恥ずかしい事だな」

彼は苦笑いをして、口髭を撫でた。

「佐々木さんは結婚しているんですか？」

「していた、が正しいかな。10年ほど前に結婚したが、3年前に離婚してね。妻には逃げられてしまったよ。自分でも反省しているが、家庭をかえりみない典型的なダメ夫だったからね」

医者と言う仕事は忙しい事もあり、うまくいかなかったようだ。離婚後、彼は今は8歳になる娘とふたりで暮らしているらしい。

「キミは何歳かな？」

「今年で17歳になります。高校2年生ですよ」

「17歳？17年前……？」

「……それが何か？」

彼は何か気になったのか、歩く足を止める。

「いや、何でもない。質問ばかりで悪いが、キミのお父さんはどういう人だろう。やはり、医師とか医療関係者かい？」

俺の父親……顔も見た事のない、名前も知らない相手だ。少なくとも俺の記憶に父親の記憶は一切ない。

「父親は知りません。母は未婚らしいので」

「……未婚？結婚はしていないのか？」

「結婚はしていないらしいですよ。俺も実際の父親とは会った事ありませんから。ずっと母さんと二人暮らしをしています」

彼ならば、俺の父親の事を知っているのではないか。

そうは思ったが、長らく会っていなかった事を思えば知らない可能性の方が高い。

別に今更知りたいわけではないので別にいいか。

「ふたりで暮らすのは大変だろ？看護師なんて忙しい仕事だ」

「もう慣れましたけどね」

そんな話をしていると、内科のナースステーションに到着する。

「僕はこの隣の部屋に用があるので、これで失礼するよ。また機会があれば、今度はキミの話を聞かせて欲しい」

「案内してもらい、ありがとうございます」

俺は礼を言っただけを見送ってから、ナースステーションに入る。時計はギリギリ時間内、怒られずに済む。

「あの、井上葉月はどこにいますか？」

俺が中に集まっていた女の人に声をかけると、すぐに呼んでくれる。

母さんは俺の顔を見るや否や、「翔太、遅い」と俺を責める。

「せっかく持ってきてあげたのに、それかよ。それでも出来る限り、早く来たつもりだ」

「……時間内でよかったわ。ありがとう」

「今度は忘れものなんてしないようにしてくれ。そういや、さつき佐々木さんっていう院長にあったんだけど、母さんの知り合いだったんだな。口髭がダンディズムなおじさんだったぞ」

俺がここまで案内してもらった事を話すと母の顔色が変わる。

「えっ……あの人に会ったの？」

「古い友人なんだろう？彼の誘いでここに来たって聞いた」

何かに警戒するような彼女。

佐々木さんに気をつける理由でもあるのだろうか？

「そうね。確かにそうだけど……。何か話をした？」

「普通の話をして、俺の事を聞かれた。母さんに子供がいたって知らなかったらしい。黙っておくほどの事か？」

「聞かれないから言わなかっただけよ。別に自慢できる子じゃないし」

「グサツ。そりゃ、医者相手に自慢できるほど出来がよくなくてすみませんねえ」

素で言われると傷付くわ。

まあ、その辺が母さんらしいんだけどな。

「あの人と母さんは仲が悪いのか？」

「本当に悪いなら、私が病院を移るはずがないでしょ？」

「そりゃ、そうだが……」

「昔の同僚のよしみで給料の良いこちらを紹介してくれただけよ」

いつもならはつきりものを言う母さんにしては珍しい歯切れの悪い言い方だ。

母さんは俺の言葉をはぐらかして資料を受け止る。

「……もういいわ。気をつけて帰りなさい」

「ういっす。眠いからもうひと眠りする」

「学生は良いわねえ。羨ましいわ。私もあと3時間ほどで帰るから」

「はいはい。それまでに風呂の準備くらいしておくよ。それじゃ」

俺は任務終了して母さんと別れる。

さあて、さつさと朝飯食って寝るとするか。

俺は朝焼けの眩しい中、再び自転車に乗って家に帰る事にした。

……。

看護師会議を終えた葉月に佐々木が声をかける。

「葉月。少しいいかい？」

「院長がわざわざ会議を見物？何か用事で？」

「別に。現場を見ておきたかっただけだ。こちらの病院もすぐに慣れたようだな」

「設備がいいから、前よりも楽よ。人員も優秀だし、さすが私立というところかしら」

葉月は佐々木の顔を見ずにそう答える。

「翔太君と話をしたよ。キミに子供がいたなんて聞いてないが？」

「聞かれなかったから答えなかった。それだけよ。別にいいでしょう？私も38歳だし、子供の一人くらいいるわよ」

「彼から結婚はしていないと聞いている。ずっと、ひとりで育てていたのか？」

「……翔太も余計なおしゃべりをしたわね。それが何か？」

葉月は仕事があると彼をあしらうような仕草を見せた。

だが、佐々木は葉月の手を掴みながら、逃がそうとしない。

「16歳らしいじゃないか。17年前、ちょうど僕達がそれぞれ違う病院に勤めるようになった時期だな。あれから何度か、会う機会はあったが、子供の話は一度も聞いたことがない。なぜ、何も言わなかった？」

「……だから、何？懐かしい話でもしようと言っの？」

「あの子の父親は……？」

葉月はきつと唇をかみしめながらその手を振り切る。

「……誰でもいいでしょう？ 貴方の知らない人よ。勘違いしないで私がこの病院への誘いを受けたのは貴方の事があつたからじゃない。最低でも、翔太には大学くらい行かせたいから、給料の待遇のよさに誘いに乗った、それだけよ」

「なるほど……。葉月、相談くらいしてくれればいいだろう？」

佐々木の言葉から逃げるように彼女は視線を俯かせる。

「17年、か。あの当時、キミはいきなり僕をフツて、一方的に交際を終わらせた。病院を離れる事が原因だと思っていたが、その意味をもっと深く考えておくべきだったかもしれない。葉月、正直に答えてくれ。あの子の父親は？」

「死んだわ。……翔太にとって、父親は17年前に死んだのよ。もうどこにもいないの。心配しなくても、父親は貴方じゃない」

「嘘なんだろう、葉月。彼の年齢を考えたら……」

葉月は佐々木を無言で睨みつける。

佐々木にとっては大事な話なので、その視線にも耐え続ける。

「……嘘なんてついてない。私が貴方と別れた理由はね、私に他の男がいたからよ。彼との子供ができてしまった。だから、貴方と別れた。その後その彼も事故で亡くなったの」

「葉月、僕は……」

「浮気をしていた私を軽蔑した？翔太に罪はないわ。憎いと思うなら私だけを恨んで。そういうことなの。それがすべてなの！」

「恨むはズがない。キミは、そんなことをする子ではなかった。」

佐々木の言葉をさえぎるように、葉月は辛辣な表情を見せて言う。

「昔の事よ。私が貴方を裏切った、それだけの事なの。お願い、もう、あの子には近付かないで」

彼女は呆然とする佐々木を無視するように部屋を出ていく。
ひとり取り残された佐々木は壁を力強く叩いた。

「……キミは嘘が下手だな、葉月。その程度の嘘に騙されるものか。それなのに、僕はバカだ。17年もキミのついたとんでもない嘘に騙され続けていたなんて」

何とも言えない複雑な気持ちがある彼の心の中に渦巻いている。

「井上翔太……。まさか、彼が僕とキミの子供なのか」

自分の手が震えている事に彼は気づく。

それまで考えもしなかった現実が彼を襲う。

だが、どれだけ後悔しても17年と言う年月は取り戻す事が出来ない。

「今まで何度も葉月と会ってきたのに、何も知らなかったなんて……」

そして、病院の院長と言つ自分の今の立場も……その現実を受け入れる事を許さない。

第26章：次なるステップへ

【SIDE：井上翔太】

琴乃ちゃんが可愛くて仕方がない。

美少女だし、健気で、俺を慕ってくれる彼女は本当に最高だ。

恋人がいるという事がこれほど俺を幸せにしてくれるとは付き合う前まで思いもしなかったのだ。

「彼女っていいなあ。世の中、恋人があふれる理由がようやく分かったよ」

「てめえ、最近の惚気てばかりだな」

「惚気もするさ。今の俺は最高に幸せだからな」

友人の中山に毎回、呆れられるが幸福な俺は惚気くらいする。

先日は喧嘩して険悪だったが、それも過ぎ去り、距離も近づいた。あと2、3日で待ちに待ったゴールデンウィークだ。

「GWだ。もちろん、彼女とデートする決まってる」

「誰もまだ何も聞いてないっての。……自分で言うな」

「いや、この時期の話題だからさ。ゴールデンウィークはどう過ごす？そう聞かれる前に答えてみた。短期バイトもしてお金も入ったしな」

この時のために遊ぶ金くらいはちゃんと稼いでいるのだ。

この長期休みが終われば、本格的にアルバイトも始めたい。
やっぱり、お金って遊びに行くためには大事だからな。

「……硬派でモテなかった頃のお前はどこに行った？彼女なんていない、俺には必要ない。恋などに浮かれている人間はバカばかりだ。過去のお前のセリフだ」

「過去の俺よ、お前は愚かだった。本当に恋って素晴らしい」

「ちくしょー！う、羨ましくなんかないぞ。俺は羨ましくなんかないから」

拗ねる中山、まるで昔の俺を見ているようだ。

昔の俺は恋人ができた現実を知らなかった。

知らないゆえに勝手に嫉妬していたんだよ。

その愚かな過去の俺は忘れ、今の俺は恋を満喫する。

「デートはどこにしようかなと悩み中なのだ」

「どこに行っても人だらけでつまらんとするぞ」

「はいはい、負け犬の言葉はどうでもいいし」

余裕の発言に悔しがる中山。

その優越感に浸りつつ、デート計画を立てようとする俺は雑誌を眺めながらデートスポットを探そうとする。

「そっぴや、話は変わるけど、中山って昔の記憶が思いだせなかった事あるか？」

「……何だ、そりゃ？」

「例えば小学生時代に仲良かった友達とかの顔って思いだせなかったりしないか？」

「普通だろ、それは。昔の事なんてそんなに覚えてない」

中山は「それでも印象的な事は覚えているかな」と言い始める。

「小学校の時に好きな子がいてな、その子の事は今でも覚えてたりする。大抵の奴はそうじゃないか？何かひとつくらい覚えてるものがあるだろ。お前にはそう言うモノがないのか？」

「うーん。あるはずなんだけどさ。どうにも思い出せない」

子供の頃、俺は琴乃ちゃんに惹かれていたからな。

俺にとっての初恋をなぜ俺は忘れている？

「……何度考えても答えが出ない。何でだろうな？」

「よく分からないが、思い出つてのはキーワードひとつで思い出すものだろ？過去の記憶が思い出せないって言うのは検索ワードが間違えているんじゃないのか？ちゃんとしたワードだと簡単に開くものさ」

時々、昔の事をふと思い出す事がある。

それはきつと、ある特定の思い出に関するワードが一致したから思い出すのだろう。

「そついうの、何ていうんだったのか？エピソード記憶だっけ。物

語的な記憶で覚えているから思い出せないんだ。何か思い出すきっかけを見つけれられるといいな」

「ああ、そうだな」

麻由美の事を思い出せたようにきつかけさえあれば琴乃ちゃんの事を思い出せるはず。

「でも、今さら思い出す事に意味はあるのか？それが今のお前に何の関係があるんだよ？小さな頃でも思い出して過去に浸るにはまだ若いだろ」

「ちよつとな……」

俺は誤魔化して話題を変えた。
脳内記憶の検索キーワードが間違っている。
本当にそうなのだろうか？

「……こういうこと、するのって久しぶりですね？」

帰り際、人々で賑わう繁華街。

俺と琴乃ちゃんは手をつないで恋人らしい恰好で歩いていた。
学校帰りにどこか寄るって言うのはあまりなかった。

というのは、駅側は俺たちの家の方角とは違うので仕方ない。

「まあ、普段はどこかよって帰るってあまりしないからな。こういうの、する機会を増やしたい？」

「……先輩と一緒になら何でもいいです。こうしていられるだけで幸せですから」

小さな手から伝わる想いと温もり。

「ゴールデンウィークだけど、遠出しませんか？」

「遠出ですか？」

「うん。琴乃ちゃんと一緒にどこか遊びに行きたいなあって。まだ俺達ってデートらしいデートって数えるほどしかしてないじゃないか。俺的にはもっと回数を増やしたいんだ」

付き合い始めてもうすぐ3週間に突入する。

だが、デートはまだ水族館デートや買い物デートなど3回程度しかない。

ここはこの大型連休で回数を増やしておきたい。
あわよくばキスの次のステップに行ったりして……。
なんていう男の欲望もほんの少し抱いてはいるが。

「そうですね。遊園地、とか子供っぽいですか？」

「別に子供っぽくはないと思うけど、行きたい？」

「ああいう所に恋人同士で行ってみたいなって思っていたんです。先輩が嫌じゃないなら、ぜひ一緒に行ってみたいです」

琴乃ちゃんの口から遊園地という言葉がでるとは思っていなかった。

「いわゆる絶叫系とか得意な方？」

「……えっと、好きだって言ったら変です？」

「ううん。変じゃないけど意外だなって」

琴乃ちゃんは照れくさそうに笑いながら言う。

「怖いけど好き、ってタイプですよ。お化け屋敷も、絶叫コースターも」

「ふーん。そうなんだ？」

「翔太先輩はどうなんですか？苦手だったりします？」

俺に話を振られて、俺は何と答えればいいのやら。

知識で知っていても、現実を知らないのだ。

「一度くらいしか行ったことないんだよな、遊園地って……。子供の頃に遠足で行ったくらいで、実際の絶叫系ってのは体験した事になかったりする。テレビとか雑誌とか情報としては知ってるけどな」

彼女相手なので嘘も見栄もはらずに俺は正直に答えた。

その子供の頃は絶叫系は身長の関係で乗れず、観覧車とかは乗った覚えがあるが……。それくらいだ。

親も忙しくて、中々連れて行ってくれる機会もなかったから。

彼女は俺の家庭環境を思い出したのか口を片手で押さえる。

「あつ、ごめんなさい」

「……別に謝られることじゃない。母親も忙しいってのはあるけど、俺も特にいききたいと思ったことがなかったんだよ」

「先輩、私と一緒に行きましょう？ぜひ、行きたいです」

先ほどもよりも積極的に俺を誘う彼女。

琴乃ちゃんって本当に優しくていい子だな。

「そうだな。琴乃ちゃんとならいい思い出もできそうだし」

「……ふふっ、楽しみにしておきますね。あっ、これ可愛い」

街角のお店で気に入った雑貨を見つけた彼女はそちらへと近づく。ぶちデートを楽しみながら俺は彼女の横顔を見つめていた。

恋人が出来た事が俺にとっての一つの変化を生んだ。

それまでの自分を変える、新しい世界を切り開いてくれた気がする。

これからもいろんな事を積み重ねて関係を深めていきたい。

大好きな女の子、琴乃ちゃんと一緒になら何でもいい思い出になっ
ていくような気がするんだ。

第27章：記憶のない父親

【SIDE：井上翔太】

「……翔太、父親に対して興味がある？」

それはゴールデンウィークの初日の夜の事だった。

夜勤明けの母さんが起きてくるや、いきなりそんな事を言いだした。

その台詞を初めて来た時、俺は思わずドキツとする。

「ま、待て、誤解だ。母さん、俺と琴乃ちゃんはまだそこまで深い関係になっていないし、子供だつて当然にできてません。俺はまだパパになってないし、孫はまだまだ先の話だ。そんなに急かされてもまだ学生の俺たちは困るぞ」

「……アンタ、バカ？そんなの分かつてるわよ。付き合い初めて1ヶ月でそもそも、子供が出来たかどうか分からないし、アンタにそんな度胸もないのは分かつてる。ヘタレを絵にかいたような典型的なヘタレが恋人に手を出せるはずがない。童貞のくせによく言うわ」

「ものすごく最後は失礼な事を言った……！」

しかし、誤解されていないのなら最初の発言の意味は何だ？

「俺が父親になったと言う意味じゃないとどういう意味が分からないんだが？」

「バカ。ホントにバカ。アンタ、私の子じゃないと思いたい」

「子供にグサツとくる暴言を吐くのはやめてください。傷つくわ。で、何だよ？俺の実際の父親についてようやく喋る気にでもなったのか？」

それは今の今まで母が避けてきた話題だ。

俺はありえないと内心想いつつも、食器洗いを続けながら母さんに尋ねる。

こちらはただいま油污れとの戦いだ。

洗剤よ、何としてもしつこい油污れに勝ってくれ。

「そうね。何も話さないってのは、悪かったわよ」

俺は泡だてた洗剤で食器を洗っている手を止める。

おいおい、あの母さんが俺に謝ったぞ！？

「どうした、母さん！？何があつた？悪いモノでも食べたのか！？」

「……アンタの来月の小遣い、2割削減してやる」

「じよ、冗談だつてば。それくらいありえないと思つたんだ。こづかい減らすのはやめて」

「はあ、翔太のバカさ加減にどうでもよくなってきたわ」

俺はさっさと洗い物を終えて、リビングの椅子に座る母に向き合う。

どうやら、片手間に聞くような話ではなく、真面目な話のようだ。

これは真剣に聞いた方がいいだろう。

「それで俺の父親はいるのか？」

「……死んだ。翔太が生まれる前に、事故で亡くなったわ」

「というのが今までの言い訳であって、本当は生きているんだろ？」

事故死と言う可能性もなくはないが、命日にどこかへ行ってる様子もない。

それにうちの母さんは両親とも仲が悪く、俺も数度くらいしか祖父さん達には会っていないからな。

何からしらの理由があるとみていいだろう。

「母さんが両親と仲が悪いのもそれが理由か……？」

「翔太の分際で色々と考えつくものね」

「まずは息子に対する過小評価を撤回してもらおうか」

「……そうね。バカは失礼だわ、アホにしておきました」

ましたって、過去形！？

どちらにしても侮辱的扱いだが、この態度は当たり前と見るべきか。長い付き合いだ、雰囲気だけでも何となく察する事ができる。

「ふーん。生きてるんだ。だけど、母さんとは結婚せずに、今は別の家族がいる、と」

「……アンタ、どこまで知ってるの？」

「うわっ、ちょっとよくあるドラマ風に言ったら当たったか？」

それには俺も驚き、母さんはやられたと言った顔をする。

この程度のカマかけに引つかかる彼女も珍しい。

相当動揺しているのか、慌てて今の態度を否定する。

「ち、違いわ、変なドラマみたいな事を言うから呆れただけよ」

「俺の父はどこかで生きていて、今は別の家族がいる。離婚しているわけでもないから、俺の親でもないわけだ？」

「……」

母さんは今度は黙り込んでしまった。

今から16年前くらい前と言えば、母さんの歳的に21、22歳くらいだろう？

まだ専門学校を出て新人ナースだったはずの母さんに何があったんだろう。

何やら考えていた彼女は、ようやく口を開いた。

「結婚してなくてもあの人はアンタの父親よ。血筋ではね」

「もしかして、もしかするのですが、俺って実は認知されてない？」

「……ごめんなさい」

母さんの謝罪に俺は自分の存在が極めて危うい事に気づいた。

今まで平凡に生きてきた俺にとっては衝撃的な事実。

いや、可能性としては存在していたので、考えてなかったただだ

な。

「……あー、まあ、何と言うか、ヘビーな空気ですな」

あまりにも重い話に軽い口調で俺は言うしかない。
この沈みきった母の態度に何とも言えなくなる。

「つまり、俺は俗世間で言う、隠し子という奴だったのか？」

無言で頷く母さんは今にも泣きそうな顔をする。

……ほ、ほう、俺がねえ、ドラマみたいな隠し子設定があったとはびっくりだぜ。

胸にグサツとくるものはあるが、今さら感もあり、俺よりも母さんの方が辛そうだ。

「私が選んだのよ。あの人はまだアンタの存在にも気づいていなかった。16年間ずっと隠してきたから。私のエゴでアンタの人生を狂わせてきたのは謝罪しても謝罪しきれない。本当に悪かったと思っている」

「……わざわざ隠さなきゃならない相手が俺の父親ってわけだ？」

「そうね。今のあの人には迷惑をかけられない。翔太にはすごく悪い事をしていと思うわ。でも、貴方に父親は会わせられないの。責めるのなら、私を責めていい。それだけのことをアンタに私はしたの」

重い、空気が重いっ！？

俺はシリアスモードは嫌いだ、そういうのはやめてくれよ。
何とかこの場を和ませようと俺は考えながら雰囲気を変える。

「そつか。どんな事情であれ、母さんが話をしてくれた事はよかったよ。知っている事と知らない事、どちらがいいかは俺が決める事だと思うし。それに、今はこうして生活できているわけだろ？ちゃんと育ててもらってるのに文句何て言えるわけないし。うん、母さんは悪くないって」

この狭いマンションの一室にふたり暮らし。

ずっと働き続けてきた母さんには感謝こそしても、責める必要は微塵もない。

「……俺の事は良いからさ。その、父親なんて今さらだし、記憶すらもない相手の事をどうこう考えてもしょうがないじゃないか。俺よりも心配なのは母さんだ。そろそろ、再婚、というか、結婚も考えていいんじゃないのか？」

「私が……？」

「そりゃ、そうだろ。あと4、5年もすれば俺も当然、この家にはいないかもしれないし。そうなったら、どうする？まだ30代後半の今のうちに残りの人生と一緒にいられる相手を見つけるのが良いに決まってるじゃないか」

俺がそう言えるのは琴乃ちゃんのおかげでもある。

俺は人が人を愛する意味を知った、価値を実感している。

母さんには母さんの事情で、ひとりで俺を育て続ける道を選んだんだろう。

それもきつと彼女なりの相手に対する愛なんだと思う。

「年齢の事を言われるとムカつくわ。私はまだ若いわよ」

「……反応するのはそこなんだ」

「でも、翔太にそう言われるなんて思ってもみなかった。本当ならもつと楽な生き方をさせてあげられたかもしれない。片親で苦勞をかけ続けた、その罪惡感もあるわ」

人間には変えられるものと変えられないものがある。

人は自分の過去は変えられない。

過ぎ去った時の流れを変えるのは不可能だ、人生をやり直す事なんてできない。

けれど、人は自分の未来は変えることができる。

これか先の事を、どう考え、どう生きていくのか。

人生って短いようで長いのだとまだ子供の俺ですら感じているんだ。

「母さんは幸せになるべきだと、俺は思うよ。俺は琴乃ちゃんに出会って愛を知った。人ってさ、出会い一つで運命変わるって本気で思った。それまで何となくしか思わなかった愛情って言うものが実感した途端にすごい力があるって思えたんだ」

恋は生きるために必要なものなのかもしれない。

今の俺は満たされている。

この幸福感はそれまで体験した事のない物で、人と人が愛し合う事をやめられないのは当たり前前的事なんだと思っている。

「何を親相手に惚気てるのよ」

「……それだけ、愛は素晴らしいと気づいたのだ。青春を絶賛謳歌中の俺は幸せなんですよ。だから、いつまでも過去を引きずってな

いで母さんにも幸せになつて欲しいワケ。老後を寂しく老人ホームで過ごしてほしくはない　ぎゃふっ!？」

良い事を言つてるのになぜか顔面パンチ。

と言つても、全然、痛くもないけどな。

母さんの顔を見れば分かる、それはただの照れ隠し、何だか嬉しそうに見えた。

「……アンタは最後にいつも余計な一言を言うわね」

「痛い……。お、俺の言いたい事は理解してくれた？」

「それなりに。翔太がそう言ってくれるなら、私も考えてみるわ」

「うい。そうしてくれ」

母さんが抱え込んできた事情、それを俺は垣間見た気がした。

けれど、それは全てではないのだろう。

俺には言えない複雑な事情があるはずなんだ。

それにしても、隠し子として扱われると言う事は社会的にマズイというわけだ。

うーん、どう考えても浮気や不倫と言う悪い意味しか思い浮かばないのだが？

真つすぐな性格をしている母さんがそんな悪事に手を染めるはずもない。

となると、相手に立場があつて結婚できなかった可能性が高い。

……つまり、俺の父親はそれなりのすごい人なのかもな。

だからと言って、母が隠そうとする以上は俺は実父に会う事はなさそうだが。

俺も深く探ろうとしてはいけないのだろう。

今は、長年、ひとりで抱え込んできた母さんの本音を聞けただけよかったでしょう。

翌日、俺は母は再び夜勤で、今日もひとりで夕食なので、コンビニに出かけようとしていた。

階段を下りてマンションの外へ出ようとした時に俺は声をかけられる。

「やあ、翔太君。久しぶりだね」

口髭の似合うおじさん、確か病院であつた院長の佐々木さんだ。彼が何でここに？

「どうしたんですか？こんなところで」

「……少し、キミに話があるんだ。よければ、これから夕食でも一緒にどうだい？」

「え？俺に話ですか？」

いきなり現れたこの人は何を考えているんだろう？

その時の俺はまだ、何も知らず、分からずにいた。

第28章：家族

【SIDE：井上翔太】

俺は病院で知り合った院長の佐々木さんと一緒に食事をする事に俺に用があると言った彼。

そして、俺も彼には聞いておきたい事がある。

佐々木さんはちょうど俺を身籠る前の母と友人関係にあり、親しい人物のひとり。

過去を知る上で、彼ならば本当の父親が誰か心あたりがあるかもしれない。

当時、交際していた相手。

母さんは俺が誰かの隠し子であると言った。

それはきつと浮気や不倫の類ではなく、事情で結婚できなかっただけだろう。

もしも、まだ母さんに相手を想う気持ちがあるのなら……。

俺が隠された存在である理由くらいは知りたいじゃないか。

母さんの話では既に父親には別の家族がいるようだ。

これがドラマなら、相手を憎んでその家族を壊してやりたい復讐劇が始まるのかもしれないが、あいにく俺にはそのような気持ちは微塵もない。

別に今さら親になれと、俺を認めるとは言わない。

ただ、真実が知りたいだけだ。

俺と言う人間がこの世に生まれた、その意味くらいは知っておきたい。

「佐々木さんの車ってすごいですね」

「ただの趣味さ。大学生の頃から車だけが僕の唯一の趣味だね」

高級車に乗り、颯爽と道を進む。

さすが有名病院の院長、お金持ちは違うなあ。

「すまないが、うちの娘も一緒に食事をしてもいいかい」

「かまいませんよ」

「僕の話は食事の後でいい。キミも何か僕に聞きたい事がありそう
だ」

俺の顔を見て彼はそう言い切った。

さすがお医者さん、と言うか、俺も分かりやすい顔をしていたの
かな。

「こちら後も後でいいです」

「そうかい。それでは先に食事を楽しむ事にしよう」

車は小学校の前に停車して彼の娘を乗せる。

車に乗って来たのはまだ幼い少女、髪止めの赤いリボンがよく似
合っている。

彼は8歳の娘がいると言っていたな。

「あれ、パパ？このお兄ちゃんはだあれ？」

「冬美、挨拶をしなさい。この人は……」

「俺は井上翔太。キミのお父さんの知り合いだ」

「こんにちは、お兄ちゃんっ！わたしは佐々木冬美（ささき ふゆみ）。小学校2年生なのっ。よろしくね、えへへっ」

純粹で可愛らしい笑み、本当に可愛い女の子だった。

「冬美ちゃんと二人暮らしをしているんですけどっけ」

「まあね。普段は家政婦を雇って、冬美の面倒や家の事を頼んでい
る」

「家政婦……メイドさん？」

「ははっ。キミの年頃では美人なお姉さんがしてくれると嬉しいだろうけれど、ベテランのおばさんだよ。メイドとも呼ばないしね。ベテラン相手の方が僕も安心できるからさ」

苦笑いをする彼、冬美ちゃんは「？」と不思議そうな顔をする。
そうだな、家政婦って名前はどうにも男のロマンの象徴である
メイドとは結びつかない。

これも悲しい、所詮はメイドは妄想の文化でしかないのか。

「翔太君も葉月と二人暮らしだろう。何かと大変な事も多いだろう
？」

「もう慣れました。さすがに子供の頃からずっとですから。母さん
も仕事ばかりで、あちらの方が大変だと思います」

「葉月は看護師と言う仕事が好きなんだよ。本当に天職だと言える
ほどこね」

夜勤は辛いだろうが、本人は仕事自体は楽しそうにしている。
人に関わる仕事は母さんに合っている。

「僕も妻と別れてから身にしみて感じたが、子供をひとりで育てると言う事は大変だ。葉月はよく頑張っている。本当ならば……いや、何でもない。もうすぐ店につくよ」

彼は言葉を濁して、車の運転を続けていた。

その横顔がどこか寂しそうに見えたのは気のせいだろうか？

佐々木さんが連れて来たのはホテルにある高級フレンチのお店だった。
こつという場所に全く縁がない俺にとっては驚くだけだ。

「あ、あの、ここですか？俺なんかがついて来てもいいんですか？」

「気にする事はない。ここはそれほど敷居の高いお店ではないよ」

そうは言っても、一流店には違いなく、値段も張るだろう。

先日に会っただけの相手を連れてこられる場所としてはこちらは緊張してしまう。

俺達は席に案内されて、彼は適当に注文したが、俺はかなりビクビクしていた。

「……今日は月に数度の冬美との食事会なんだ。私も忙しくてね、たまの休日はゆっくりと冬美に付き合うようにしている」

「んにゅ？何、パパ？」

「何でもないよ、冬美。大人しくしていなさい」

「はーいつ」

落ち着いた様子で席に座る彼女、しっかりとした娘だ。

あの年頃の俺にこんな真似できたっけ？

無理だな、すぐジツとできずに暴れていたかもしれない。

そして母さんに怒られているだろう、そうに違いない。

「佐々木さん。どうして俺をここに？ただ、単純に友人の息子を連れて、というワケではなさそうです。わざわざ、俺の家まで来たんですから何か理由があったのでは？」

「……先にも言った通り、キミに尋ねたいことがあったのさ。少し込み入った話だ。よければ今は食事を楽しんでくれ。ここのお店の料理は美味しいよ」

「うう、俺はナイフとフォークは使い方がよく分からないんですが」

「お兄ちゃん、わたしが教えてあげるよーっ」

俺の隣の席に座っていた冬美ちゃんはそう言って、使い方の説明をしてくれる。

フォークとナイフの実践訓練中……これが中々難しい。

普段から食べなれないのでよく分からん。

「あのね、ナイフの持ち方はこうするの。切りやすくするためにはこういう持ち方がいいってパパがよく言ってるの」

「ごうか。なるほど、ナイフはこういう風に使うんだな。冬美ちゃんをよく知ってるな」

「えへへっ。ほめてくれてありがとう。次はフォークだけど……」

……さすが、金持ちの娘、しつけというか、教育がなっております。

幼い見た目であなどるなかれ、金持ちの娘さん。

庶民の俺とは次元レベルで大違いだぜ、金持ちの娘さん。

俺と違いナイフとフォークはきっちりと扱える様子、さすがだ。

さらに礼儀作法にマナーまで身につけているとは……生まれの違いの恐ろしさに俺は人生を嘆きたくなる。

ていうか、8歳児にナイフとフォークの使い方を教わる俺って人としてどうなの!?

経験ないんだから仕方ないじゃない、ぐすつ。

一般庶民には来る機会もないお店なのですよ。

運ばれてきたメニューにも愕然させられる。

「こ、これは……すごい」

それまでの人生で食べた事もない厚切りのステーキ。

冬美ちゃんはお魚料理のようで、佐々木さんが選んでくれたようだ。

「冬美ちゃんは肉料理より魚料理が好きなんだ?」

「だって、お魚さんの方がヘルシーなんだもん。身体のためにもお肉よりお魚さんの方がいいんだよ」

「……何かあらゆる意味で、すごい子だなあ」

生まれも育ちもよければこれほど品位のいい子に育つのね。俺は感心しながら生まれて初めての高級ステーキを食べる。

う、美味い……あふれ出る肉汁と厚みのある肉の触感が最高だ。

一口食べてよく分かる、近所のスーパーで半額シールが貼ってある安物ステーキとは全然味が違うと言う事にびつくりだ。

高いお肉ってこんなにとろけるものなのか、初めて食べたが感動ものであります。

「気に入ってもらえたようだね」

「は、はい。すごく美味しいですよ。それしか言えないくらいです」

「そうか。それならよかった」

彼は俺の顔を見て微笑む、なぜか先ほどから俺の顔を見られて気恥ずかしい。

大方、俺のマナーが悪いのだろう。

食べ方のマナー知らないと言う事は大変に恥ずかしい事だと身に染みております。

すみません、今日は勘弁してください。

隣の冬美ちゃんなんかフォークの扱いもうまくて綺麗に魚を食べている。

「んにゅ？お兄ちゃん、どうかした？」

「冬美ちゃんは上手に食べるなあって思っていたんだ」

「にゃー。ありがとう。お兄ちゃんっ」

か、可愛いな、この子……無邪気な笑顔がたまらんぜよ。

……ハッ、俺にロリコン属性はありませんよ!?

幼女の笑顔に癒されてにやけそうになる自分に少し幻滅した

。

第29章：言葉と真実

【SIDE：井上翔太】

生まれて初めての高級フレンチ。

大満足の食事を終えて、食後のコーヒーを飲みながら俺と佐々木さんは本題を話し合う。

「さて、それじゃそろそろ本題を話そうか」

冬美ちゃんはデザートのパフェ（これもかなり高そうだ）を美味しく食べていた。

デザートを大人しく食べているので、俺達は会話を始める。

「まずは翔太君の話から聞こうか」

「いえ、そちらからお願いします。俺の方は大した話ではないので……」

「そうかい。それじゃ、僕から話そう。最初に不愉快にさせてしまいかもしれない事を詫びておきたい。だが、僕も知りたい事だね。キミの父親についてだ。単刀直入に聞きたい、キミは一度でも実の父親と会い、話をした事があるかい？」

それは俺が聞きたかった質問とほぼ同じ話題だった。

俺の父親、それが誰なのか？

俺はコーヒークップを持つ手に力を込めながら言う。

「いえ、一度もありません。俺が生まれた時からずっと母さんとふ

たりだったので」

「そうか。キミは知らないのか」

「はい。俺が佐々木さんに聞きたかったのも同じ質問です。過去に俺の母が交際していたらしい男の人を知っていたら、と思ったんです」

「彼女は綺麗で人気のある看護師だった。仲のいい男も何人もいたからな」

俺に真実を語った時の母の顔を思い出す。

俺の父親の話をした顔は辛そうで、でも、どこかそれは自分に納得した顔でもあった。

彼女なりの決意を持ち、彼と別れて俺をひとり育てたのだろう。そして、今でもきつとその相手の事を……。

「別に今さら父親が誰でも俺はいいんですよ。ですが、母さんはきつと今でもその人を想ってる。向こうの事情もあるんでしょうが、できれば、俺は一度だけ話をしてみたい。過去の事、母の事、俺の事、俺は話だけを聞いてみたいんです」

俺は誰かの隠し子だ。

世間的に認められていない子供だと母は言った。

今さら、俺が掘り返していい過去なのか、それもよく分からない。

「相手に事情を思えば俺は父親相手であろうと話をする権利はないんでしょけどね」

既に向こうには別の家族がいる。

今さら俺が現れても困るだけだろうが。

俺の話を黙って聞き続けていた佐々木さんは顔色を変えていた。

「そんなことはないんじゃないかな。一人の子の親として、自分の子供に会いたくない人間はいないと信じたいが……」

「事情が事情だけに拒絶される事もあるでしょう。俺の立ち位置はかなり微妙なようです。それに俺は別に相手の家族を壊してまで真実を知りたいとは思ってません。それはきつと母さんが嫌がる事で、避け続けてきたことだと思いますから」

母さんがひとりで俺を育ててきた16年間にはきつとある意味があるのだと思う。

それを俺の勝手な判断でぶち壊す事だけはしたくない。

「……ふにゆう、お兄ちゃん達は何のお話をしているの？」

デザートを食べ終わった冬美ちゃんが不思議そうな顔をしている。まだ幼い彼女には分からない話だ。

「冬美ちゃん。家族は大事だろ？」

「パパのことは大好きだよ。ママはいなくなっちゃったけど」

「俺も母さんと二人暮らしで、大事に思っているんだ。どんな事情があっても家族は幸せでありたい。それが一番だよな？」

「うんっ」

にこっと微笑みを浮かべる冬美ちゃん。

そう、きっと俺の本当の父親にも冬美ちゃんのような子供がいて、家族がいるはずだ。

その笑顔を壊す事はしたくない。

「……キミは優しい子だな」

「俺が優しい？それは違うと思います。ただ、俺は分からないだけです。生まれてから父親と言う存在を全く知りません。知らないものだから、どう触れ合うべきなのかも分からない。知らないのに、知りたくなる。複雑な気持ちです」

俺がその父親と対面しても何を話せばいいのか。

「もしも、その相手に会えたらキミはどうする？16年もキミを放っていた彼を恨むかい？どんな事情があつたとしても、キミや葉月と離れた彼は別の家族を作り、それなりに幸せを得ていたとしたら？」

佐々木さんの言葉はどこか“確認”のように聞こえた。
確かに過去を聞きたいが、別に特に責める気持ちもない。

「……普通なら恨むべきなんですか？さっきも言いましたけど、俺は別に憎んでいない。きつと俺の父親は、俺の事を知らずにいた可能性が高いです。母さんは自分ひとりで何でも抱えてしまふ、そう言う人だから」

多分だけど、相手の負担を考えて見を引いた、彼女はそうしたはずだ。

今まで父親の事を何も言わなかった。

それは彼女なりの責任と覚悟だったはず。

「それに妬みや恨みを抱くほど、俺は今の生活が不憫でも辛くもないです」

俺と母さんの二人暮らしは言うほど悪い生活じゃない。

生活は苦しくても、母さんは俺を愛してくれていたし、ちゃんと家族としての温もりも知っている。

だから、俺は父親を恨む事がないんだと思うんだ。

「今日は本当にありがとうございました。食事、とても美味しかったです」

俺は再び自分のマンションまで車でおくってもらい、彼に礼を言う。

「こちらもお話が出来てよかったよ。機会があればまたキミを誘おう」

「それは楽しみにしています。また何か分かったら、教えてくださいさ
いね」

「ああ。冬美もキミの事を気に入ったようだし」

俺は後部座席の冬美ちゃんに声をかける。

「それじゃ、またね。冬美ちゃん」

「うんっ。お兄ちゃん、バイバイ。今度は私と遊んでね？」

「もちろん、次はそうするよ。じゃ、バイバイ」

俺はそつと手を振って彼女も小さな手をこちらに振ってくれる。その反応が可愛いなって思いながら俺は佐々木さん達を見送った。

「しかし、お金持ちはすごいねえ。あんな料理、初めて食べたし」

本日のステーキは本当にすごく美味しくて感動した。

テレビで高級料理を食べている光景を見て、一度くらいは食べて見たいと思っていたが、実際に食べるとマジで感動だ。

「それはそれでおいといて。問題はあの問題か」

今回の事は母さんには黙っておいた方がいいと、佐々木さんから口止めされていた。

母さんの過去を探るような真似をするのは何だかなあ。

「……俺の父親か。今、どこで何をしてるんだろ？」

そう呟いた俺は携帯電話に琴乃ちゃんからのメールが来ている事に気づく。

「おっ、琴乃ちゃんからのメールだ。何だろう？」

それは明日の朝9時に待ち合わせで、遊園地デートをする約束の連絡だった。

遊園地に関しては俺もよく分からないので、彼女に任せていたのだ。

「明日、か。琴乃ちゃんとのデート、楽しみだなあ」

俺はそのデートを楽しみにしながら夜空の月を見上げる。
黄色いお月さまが今日はやけに綺麗だ。

「明日のデートのために準備しなきゃ」

気合いをいれて頑張るぞ、なんて思いながら俺は自分のマンションの部屋と帰る。

いろいろと難しい事は考えてもしょうがない、なるようにしかないってね。

……。

佐々木は車を運転しながら自分の娘に声をかける。

「冬美。翔太お兄ちゃんはどうだった？」

「すごく優しかったよ？お話して、楽しかったもん」

「そうか。また会いたいかな？」

「うんっ。今度は一緒に遊んでもらいたいなあ」

娘の言葉に彼は「そうだな」と頷いた。

車の窓の外、流れていく景色を彼は見つめる。

夜の街並みに視線を向けながら独り言をつぶやいた。

「もしも、僕がそうだとしたら……どんな顔をして彼に会えばいいんだ？」

翔太は顔も知らぬ父親を恨んでいないと言った。

だが、それは現実味がないからだろう。

実際にそう言う状況になれば心境も変わる、と佐々木は感じていた。

「……葉月と話をしよう。まずはそれからだ」

どんな責めでも自分は耐え抜かねばならない。

それが人の親という責任、逃げる事のできない宿命。

「僕は、僕のすべきことをする。それだけだ」

全ての始まりは17年前のある出来事。

佐々木にとっても、それは大切な過去だった。

第29章：言葉と真実（後書き）

次回からは葉月の過去編です。

第30章：愛ゆえにへ前編（前書き）

翔太の母、葉月の視点です。

第30章：愛ゆえに〈前編〉

【SIDE：井上葉月】

母親として子供の成長を見守る。
それは親としての幸せのひとつ。

「翔太？いないの、翔太？」

病院の看護師の仕事をしている私、葉月は夜勤明けで家に帰るといつもいるはずの息子が家にいない事に気づいた。

まだ朝の8時過ぎ、ゴールデンウィーク中なので昼まで寝ている
と思った。

部屋をのぞいてもいないし、どこかへ出かけてしまったんだろう
か？

「あれ、本当にいないし。朝から出かけてしまったの？」

お風呂はちゃんといれてくれていたので、出かけてから間もない
と分かる。

このまま寝てしまうからいなくてもいいけど、顔くらい見ておき
たかった。

「ふう、あの子もいないならお風呂に入って、寝よう」

そう思っていたら、携帯電話にメールが来ているのに気付く。

相手は私の幼馴染である理沙。

翔太は彼女の娘である琴乃ちゃんと先月から付き合い始めている。
親友の子供同士が付き合う事になったのは良い事で、私としても

ふたりの仲がうまくいく事を望んでいる。

それに、琴乃ちゃんは可愛いから将来、あの子のお嫁さんに来てほしいし。

「……えっと、暇なら電話して？」

メールにはそう書かれていたので、私は彼女に電話する。

ずっと幼馴染として仲がいい理沙は今の年齢になっても信頼できる親友。

よくふたりで会ったりしているので、メールのやり取りも普通の事なんだけど。

「理沙、どうしたの？」

『お仕事お疲れ様。葉月は知らないと思って教えてあげるわ。今日
はね、琴乃と翔ちゃんはデートに行ってるの。遊園地デートだって
琴乃が張り切っていたわ』

ああ、なるほど。

それならこの朝から出ていく理由も分かる。

彼らは付き合いはじめてから何度もデートをしているようだ。

恥ずかしがってか、あまり私にはちゃんと話してくれないのが寂しい。

「そうなの。翔太も琴乃ちゃんをリードできてるかしら？」

『うちの琴乃の方が翔ちゃんに激ラブだからねえ。琴乃も気難しい
子だから愛想つかされないようにして欲しいわ』

「それはないわよ。だって、あの子は……」

『葉月の自慢の息子だから?』

「ふふつ。そうじゃなくて、あの子、ヘタレだもん。今までも女の子と付き合いなんて全然なかったんだから浮気とかの心配はしなくていい。そんな度胸もないからね」

私達はお互いに笑いあいながら、翔太のヘタレ話に盛り上がる。

『せめて、優しいって言うてあげなさいよ』

「優しいのは認めるけど、ヘタレな性格を直してほしいとも思ってるの」

あの子は昔からそうだった。

慣れない女の子相手だと緊張してしまう。

昔、仕事の都合で少しだけ理沙に彼を預けていた時期があった時は、琴乃ちゃん達とうまくやれていたようだけどね。

『琴乃も大人しい子だから、翔ちゃんとは相性的にはいいはず。いい関係が続けてくれればいい』

「そうね。でも、付き合いあって事は色々と問題もあって大変なものよ。彼らも、これからたくさんいろんな経験をしていくわ」

『そういうのも恋愛のうちじゃない? あー、若いていいわよね。青春時代が懐かしい』

お互いにずいぶん昔になってしまった高校時代を思い出す。

『……そう言えば、仕事を変えるって言っていた話はどうなったの？』

「ん？仕事を変えるんじゃないくて、仕事場が変わっただけ。隣街の私立病院で今は働いているわよ。給料面もよくなってるすぐくやりがいがあるわ」

『ちよつと待ちなさい？確か、あそこの今の院長って？』

やっぱりそこに反応するか、幼馴染相手には誤魔化しが効かないから辛い。

「まあ、それはそれで……ねえ？」

『あのねえ。「ねえ？」じゃないでしょ。思いっきり、葉月の元彼じゃない』

「あははっ、もう十数年も前の話だし、元彼なんて言葉は使わないわよ」

私は苦笑しながら、そつと片手で自分のバッグから手帳を取り出す。

そこに入っているのは色あせた写真が一枚。

まだ若い頃の私が男性に抱きつく形で幸せそうに笑っている写真だ。

相手の彼は佐々木信彦、まだ私が新人ナースだった時に初めて交際した男。

私より2歳ほど年上の彼も当時はまだ新米の医者でお互いに仕事を覚えるのが大変ながらも、付き合った1年間はとても楽しかったし、充実していた。

「信彦さんが院長として正式にあの病院を引き継いだらしいの。昔の縁であの病院で働いてみないかって言われたのよ」

『……あのさあ、葉月。気を悪くしたらごめん。翔ちゃんの父親ってもしかして?』

「聞かないでよ。理沙の意地悪……」

理沙にもあの子の父親については語った事がない。ずっと未婚だった事も気にしてくれていたと思う。

彼女の言うとおり、翔太の父親は信彦さんだ……そもそも、ひとりしか交際したこともないし。

この事実是谁にも言った事がない。

『……そうだったの。でも、それならどうして?彼と付き合ってたんじゃないの?優しくて頼れる人だって当時もすごく自慢してたじゃない』

「どうして、かな。きっと捨てられるのが怖かったら……」

『そりゃ、相手は家柄も優秀なお医者さんだったけど、付き合ってたなら話すべきだったんじゃないの?その言い方だと彼にも翔ちゃんの事を言っていないのね?』

私は「ええ」と返事しながら、もう一度写真の方へと視線を向ける。

あの頃の私はとにかく、嫌われたくない事に必死だったんだ。

「今は向こうも結婚している身よ。妻も子供もいるみたいだし、そ

れにもう何年も経ってる。そちらの関係の方は今さらよ」

『葉月は今でも彼の事は好きなの？』

「……好きよ。好きな男の人の子供だから、私は翔太が大好きなんだもの。大切な息子として可愛いと思えるの。憎しみなんてあの人に抱いた事はないわ」

そして、自分が選んだ選択肢は間違いではなかったと今も信じている。

あの時、こうして身を引くことが一番正しかったんだって。

『葉月はバカね』

「うわっ、あっさり言ってくれるじゃない。親友なのに冷たい」

『バカよ、本当に……。今まで事情を相談してくれなかった事も含めてね』

理沙は親友だから話せない、そう言う事もある。

「葉月は幸せになるべきよ。いつまでも独り身でいるつもり？翔ちゃんだって独立する歳もそう遠くないんだから」

「それと同じセリフを翔太に言われたわ」

あの子も私の幸せを願ってくれている。

私のエゴイストな考えで、翔太には片親と言う苦労の生活を強いり、普通の子供が体験するような家族としての温もりも、人並みの幸せも与えてあげられなかった。

それなのに、あの子は責めることなく、私の幸せを考えてくれた。母親として間違っていないって、思わせてくれた事が何よりも嬉しかった。

『さすが翔ちゃん。ちゃんと葉月の息子として見てきているのよ。さすが琴乃が見込んだ彼氏だけのことはあるわ。……佐々木さんの事はダメだとしても、相手くらいそろそろ見つけなさいよ』

「考えておくわ。私もまだ若いうちに相手くらい出会わないと後悔しそうだもの」

翔太が私を許してくれた事で、私も自分の事を考えられるようになった。

自分の人生はまだまだ長くてやり直せる。
彼がそう私に思わせてくれたんだ。

私が翔太を身籠ったのは21歳の時だ。
ちょうど1年前に私はある人に出会った。

憧れていた看護師の仕事を目指して、専門学校を卒業し、新米ナースとして仕事に追われる日々を過ごしていた。

ある日、私は仕事である経験をして、休憩室でお茶を飲んでいた。
缶の紅茶を手に持ちながら私はうなだれていたんだ。

「どうかしたのか？」

私に声をかけてきたのは若い男の医者。

「こんな場所で泣いて……何かあったのかい？」

泣いている、と彼に言われて初めて気づいた。

私の頬をゆっくりと伝う涙に。

白衣に身を包んだ彼は私にハンカチを差し出す。

私はそれを受け取って溢れ出る涙をぬぐう。

「すみません……うつ……」

泣いているところを人に見られた事は恥ずかしいけど、それ以上に辛かった。

「よければ話をしてくれ。僕も研修医で新人だけど話くらいなら聞いてあげられる」

私は先ほど、起きたばかりの話を彼にしていた。

つい先日まで私はひとりの少女の看護の世話を担当していた。

その子は5日ほど前に交通事故で運ばれてきたまだ幼い少女。

彼女は最初こそ、足を骨折してただけで命の別状はないと判断されていた。

早く退院して、友達とお話したい、遊びたいと楽しそうに私に笑顔を見せていた。

だけど、昨日になって容体が急変、意識不明になり、今朝方、急死してしまったのだ。

交通事故に会った時に頭を打っており、後からになって命を落とす事態の悪化を招いた。

「私も早く異変に気付けていればあの子を救えたかもしれない。そう思ったら、私はすごく悔しくて、悲しくて、無力でした」

あの子の笑顔が忘れられない。

笑顔を救えなかった事の後悔が私を苛んでいた。

「人の生死に関わるのがこの仕事です。分かつてはいるんですよ。ひとつひとつの事に落ち込み続けてはいけない事くらい。それでも、私は……救ってあげたかった。私、この仕事を続けていけるか、自信をなくしてしまつて……」

「キミは看護師だ。救えなかった事を悔やむ気持ちは分かる。綺麗事や理想、安易な奇跡はこの病院という世界にはない。現実にあるのは理不尽な辛い物も多い」

夢を見てきた看護師という職業はあまりにも辛くて、大変なのだと思います。知らされている。

「けれど、キミや僕らは多くの患者を救う事もできる。それを忘れてはいけないよ。キミは無力だと言ったが、これから先、キミも多くの人を救う事になる。もちろん、救えない人もいるだろう。だからと言って、諦めてしまえばそれで終わりだ」

彼はそつと私の頭を撫でる。

その手の温もりに私は心を動かされていた。

「……救えなかった命は確かに辛い。全ての人を救う事はできない。この職業は人の命と関わる大変仕事だ。それでも、僕らには僕らの出来る事があるはずなんだ。心に整理をつけて、キミは前を向いてくれ」

私は頷くと彼は「今は辛いだろうけど、いい看護師になれるように頑張ってくれ」と、彼は私を励ましてくれた。

私がしなくちゃいけないのは落ち込み続ける事じゃない。

あの子のような子供を二度と出さないように、私もしっかりと仕事をしなくちゃいけないんだ。

そのまま立ち去ろうとする彼、私は彼のハンカチを握りしめていた。

「あ、あの、このハンカチ。洗ってお返しします。お名前を教えてくださいませんか？」

「佐々木信彦。この病院で今は外科の研修医をしている」

「私は井上葉月です。また近いうちに届けますから」

彼は微笑を浮かべて頷いてくれた。

私と彼の出会いはここから始まったんだ。

第31章：愛ゆえに〈後編〉（前書き）

葉月視点です。

第31章：愛ゆえに〈後編〉

【SIDE：井上葉月】

18年前の出会い、私と信彦さんの関係。

「信彦さんはどうして医者になりたいと思ったんですか？」

医者である信彦さんと出会ってから、私達は何度か話をし、やがて、惹かれあつて付き合ひ始めることになった。

恋人になってから数ヶ月。

まだどちらも新人なので大変だけど、お互いにいい感じに癒し合っている。

今日は彼が食事に連れてきてくれて、レストランで食事をしていた。

「……ん、僕かい？僕は親も祖父も、代々、医者の家系だからね。自然な成り行きで、なっている所はある。もちろん、人の命を救いたいと言う信念はちゃんと持っている」

「それじゃ、将来的には御実家の病院を継ぐんですか？」

「そう言う事になるかな。それまでは、いろんな場所で経験を積みたいと思っている。葉月はどうして看護婦に？」

「私は……」

思わず、そこで言葉が止まってしまふ。

けれど、彼相手に隠す事もしたくないので正直に答えた。

「私、実親と仲が悪いんですよ」

「そうなのか？」

「はい……その、親は再婚していて、義父の方との折り合いが悪くて、実家には居づらくて……。就職したいと思って選んだ道が看護婦なんです。元々興味はありましたけど、長く続けられる仕事を考えてそう思いました」

「そうか。だが、大変な仕事を選んだな。夜勤も続くし、不規則で大変だろう？」

私は頷きながらも「やりがいのある仕事ですから」と言葉を返した。

実家から逃げだすように私はこの道を選んだ。

それでも、人の命にかかわる仕事の責任感とやりがいは選んでよかったと思っている。

「あつ……」

彼は私を抱きしめてくれる。

「僕達はまだまだ未熟だ。仕事を頑張らないとな」

「……はいっ」

彼を恋人として慕い、仕事の仲間としても信頼していた。
恋人でいる事に幸せを抱き続けていた。

だけど、それはタイミングが悪い時期に重なって起きてしまった。私が妊娠の事実気づいたのは彼と付き合い始めて1年が経った頃。

ちょうど、友人の理沙が妊娠したと話をしていたので、私も気にしていた。

いつかは私も子供ができて、家庭を持つかもしれない、と。それが思わぬ形で私に現実を突きつける。

異変を感じて調べてもらったら案の定、私は妊娠をしていた。

この妊娠の事を彼に相談するかどうか、悩んでいた。

信彦さんはここ最近、とても忙しくほとんど会えてない。

噂では別の病院に移ると言う話もあり、私は不安だった。

彼はこれからも出世する人間で、私なんかと一緒ににはなれない。

そういう意味合いの話を先日、彼の母親からされてショックを受けていたのに、この事実が判明して以来、私は夜も眠れない日が続いていた。

その時は信彦さんは気にしないでいいと慰めてくれたけど、意識する程に辛くなる。

私はどうすればいいの？

どうしたいのか、それは当然、彼と結婚して彼の子供を産み育てたい。

だけど、それは望みたくても望めない。

現実という壁が邪魔をする。

私と彼では立場が違いすぎるから。

それに信彦さんには夢もあり、ここで私が邪魔をしちゃいけないと思った。

「……久しぶりだな、葉月。今まで、中々連絡もできずにすまなか

った」

久々に彼に呼び出された私は夜景の綺麗な高台の公園にきていた。初めは綺麗だと思っていた夜景。だけど、彼と話をしているうちに寂しさが胸に込み上げてくる。

「信彦さん。話があるって何ですか？」

「……葉月。聞いて欲しい。僕は、病院を変わる事になった」

やはり、噂通りだったらしい。

この仕事で大変なのは病院を変わったりする事がよくあること。看護師ではそれほどういけれど、医師の場合は本当によくある話。特に彼は今年で研修医も終わり、ちゃんとした医者としての仕事が始まる。

「そ、そうなんですか」

「今度、行く病院は他県なんだ。でも、葉月との関係は続けたい。僕はキミが好きだ。その気持ちは変わらない、遠距離になるけれど付き合い続けてくれないか？」

信彦さんの言葉は嬉しい、私を想ってくれているからその想いに応えたい。

でも、ダメなの……私はもう、付き合えない。

「……ごめんなさい」

私の言葉に彼は動揺する。

「葉月……？」

「ダメですよ。その、私も信彦さんの事が好きです、大好きです。でも、これから先、信彦さんの事を考えれば私は……」

彼との交際を自分から終わらせるなんてしたくないのに。

今すぐにでも、私は彼に言いたかった。

貴方との子供ができたんだって。

「この前の母の事は忘れてくれ。あんなひどい言葉を言っなんて思っ
ていなくて、キミを傷つけてしまった。すまない」

「仕方ないですよ。信彦さんの立場を思えば、お母さんの言っ事は
もつともです」

「立場なんて関係ない。僕は葉月と一緒にいたいんだよ？考え直し
てくれないか？出来る限り、時間だって作るから」

信彦さんは私の手に触れて説得してくる。

私だって別れたくない。

ずっと、貴方の傍にいたい……。

「……いい機会なんだと思います。私達の間係を終えるために。信
彦さんのためですよ」

頬を伝うのは冷たい涙。

私は眞実を隠し続けて、彼との別れを決意する。

今の私は彼の将来を考えれば足かせになってしまふ。

彼の事を思えばここで身を引いた方が良いに決まっている。

「なぜだ、葉月……？僕のためってどういうことだ。キミがいれば、僕は」

「お願いですから、これ以上、私を苦しめないください。私が本音で貴方を嫌っているわけがない。一緒にいたいです。それでも、私は貴方のために何もしてあげられません……」

好きなのに別れなくちゃいけない、そんな理不尽はない。

それにこのお腹にいる子を考えても、信彦さんと離れてしまう事は大きな不安だ。

それでも、どんなに考えても、悩んでも、私には彼と別れる以外の選択肢を選ぶ事なんてできなかったの……。

夢を抱く彼のために、私が出来る事はひとつしかなかった。

もしも、私が今ここで子供がいると話せば彼はどういう反応を見せるか。

彼は子供を堕ろせと言う人間ではない。

責任を持つ形で私を支えてくれるに違いない、それは分かっていた。

そこに不安はなくても、私の不安は私自身の問題だ。

「好きか嫌いか、そんな単純な理由で好きでい続けられたらどんなに幸せだったか……信彦さんは私にとっては立場が違いすぎるんです。同じ立場には絶対に立てませんから」

代々続く医者のお金持ち。

次世代を担うと期待されている医者としての未来も潰せない。

「葉月……キミを僕は苦しめていたのか？」

私は涙を流しながら彼の手を離す。

言わなくちゃいけない、私は自分の口から別れの言葉を言わないといけないんだ。

「……さよなら、信彦さん。貴方と付き合えて、私は幸せでしたよ」

最後は頑張つて笑おうとしたけど、やっぱり泣いてしまった。

涙ぐんだ瞳で見つめた彼は何とも言えない顔をして沈みきつていた。

「ごめんなさい、信彦さん。」

私は胸の痛みに耐えながら彼との別れを受け止めようとしていた。

それから数ヶ月後、彼は病院を去り、私も出産のために病院をひとまずやめた。

だから、下手な噂にならずに済んだと思う。

あのまま病院にいれば、遠くの彼にも子供の話が届くかもしれない。

その後、産まれてきた翔太を私はひとりで育て続けていた。

大切な人との子供、私にとっては彼との絆だ。

不仲だった両親はシングルマザーの道を選んだ私を責めたけれども、出産費用の資金を援助してくれたりして不安定な生活を続ける私を支えてくれた。

翔太には悪い事をし続けてきたと思う。

楽ではない暮らしを強いり、我が俤すら聞いてあげられない。

親としては最低な自分を私は責めていた。

そんな私の葛藤をよそに翔太は良い息子に育ってくれていた。

彼が3歳になった頃に、私は再び看護師の道を進んでいた。

新しい病院に採用されて忙しいながらも、翔太との二人暮らしを

続けていた。

けれど、彼が8歳の小学2年の夏。

私は病院を移り変わる事になり、しばらくの間、慌ただしくなるために翔太を親友の理沙に預ける事にした。

その時、彼は初めて家族の温もりと言うモノに触れたんだろう。

理沙からもらった息子の写真は楽しそうな笑顔を浮かべていた。

彼を迎えに来た時は、私に抱きついて嬉しそうに笑ってくれた子供の顔が今でも忘れられない。

この子には普通に両親がいて、家族のいる生活をさせてあげられない。

そんな自分のふがいなさや翔太への罪悪感に胸を締め付けられた。

信彦さんとはアレ以来、何度か合う事はあったけれど翔太の事は話せずにいる。

本当の話をできるわけがなかった。

信彦さんと別れた事が正しかったのは証明されていた。

彼は身分のいい女性と結婚して、勤め先の病院でも出世しており、順調に名前も有名になり、名医として評価されていた。

今になって隠し子がいたなんて到底話せるわけもない。

時は早いモノで十数年も経ち、翔太も高校2年生になった。

少しヘタレ気味だけど、優しい子だし、最近は恋人もできた。

どこかで反抗期を迎えて、捻くれることもなく真つすぐに育ってくれたのが嬉しい。

父親の事はちゃんと話せてはいないけれど、いずれは向き合わなくちゃいけない。

信彦さんとの関係も、再び同じ病院に勤務する事になったりして私自身にも変化が起き始めている。

“過去”を受け止めなくちゃいけない時が来ているような気がしていたの。

第31章：愛ゆえに〈後編〉（後書き）

次回からは新展開です。琴乃のつき続けている嘘。その真実が明らかになる……。

第32章：キス、時々、嵐へ前編

【SIDE：井上翔太】

ゴールデンウィークと言う事もあり、遊園地は子供連れやカップルで賑わっている。

俺達もその中のひと組であり、デートを楽しんでいた。

「……ほんの数週間前にはありえなかったんだよな」

俺に恋人ができて、一緒にデートするとは夢の世界の出来事のような気がしていた。

恋人がいなかった昔はよく恋人がいる奴らを妬んでいたものだ。

琴乃ちゃんは「まず最初はどこにしましょう？」とパンフレットを見ている。

俺にとってはちゃんと遊園地を楽しむのはかなり久々なので正直、どこでもいい。

どこでも今日の俺は楽しめそうだから。

「……雨は夜に降るって話だったか」

空を見上げるとお日様が照っているが、遠くの方に暗い雨雲が見える。

夕方までは天気が持つが、その後は豪雨らしい。

「天気が崩れない事を祈るしかないな」

俺はそう呟いて琴乃ちゃんに声をかける。

「どこにするか決まった……?」

「はい、まずは一番最初なので軽めのものにしましょう」

「おつ、いいねえ。それで軽めの奴って?」

「ウォータースライダーです」

……はい、なんですか、それ?

いかな、無知とは恥ずかしいものだ。

いくら俺が遊園地という物に対して全然知らなくても、ここで尋ね返すのは恥ずかしい。

ウォーター、例えば水。

スライダーということは野球の球種か?

勝手な想像を組み合わせた結果、水絡みの何かというイメージが浮かぶ。

気楽な感じで俺はウォータースライダーに乗り込んだのだが……。

「ぐあーっ!?!」

水の上を船のようなものが急加速して突っ込み、曲がりくねりを繰り返して最後は滝からダイブというスリル溢れる絶叫系。

予想してなかった展開であり、俺にとっては心の準備ができていなくて大変だった。

ウォータースライダー終了後、何とか無事に帰れた俺はフラつきながら、

「ゆ、遊園地の初心者には少々辛いものだったな。琴乃ちゃん、出来れば次からはどういうものなのか、説明を求む」

「あははっ。ごめんなさい、わざと最初に選びました」

ガンっ、琴乃ちゃんに遊ばれている！？

「だって、何も知らない先輩の反応が可愛くて」

「可愛さなんていないから。俺、怖い苦手だから」

「そういう事言つと、つい意地悪したくなりますよ？」

今日は立場逆転、琴乃ちゃんのペースに乗せられた。
こうなると、俺は身を任せるしかない。

「そうですね、次はアレを行います」

「アレって何？」

「アレはアレですよ。さあ、行きましょっつ」

琴乃ちゃんは俺の手を取り、楽しそうに笑う彼女。
女の子の手ってどうしてこんなに小さいんだろ。
手を繋ぐだけで幸せになれる。

そんな俺の些細な幸せをぶち壊すように、琴乃ちゃんが連れてきたアレと言う正体が明らかになるわけだが……。

廃病院風の建物が怖々と俺達を誘ってやがるぜ。

アレ〃お化け屋敷。

……琴乃ちゃんも俺の苦手分野ばかりをチョイスしてくれる。

「ここデスか？」

「ここですよ？先輩はこーいうのがダメでしたっけ？」

「いえ、全然問題はナイデスヨ」

声を上擦らせながら俺は答える。

彼女は俺の内心の怯えを知ってか知らずか、

「そうですね。こんな子供騙しの作り物、全然怖くありませんよね？」

「そ、そりゃそうだろ？あははっ、怖くないって……さあ、行くのか」

に、逃げ場がないっ！？

追い込まれた俺は仕方なくお化け屋敷に突入する事になる。

廃病院を舞台にしたお化け屋敷なんて雰囲気だけさ。

とか思っていたらリアリティー溢れる人形や人の演出が続出。

次々と恐怖が俺達を襲ってきやがる。

しかも、俺は暗くて狭い場所は過去のトラウマで大嫌いなものでもはやノックダウン寸前。

「大丈夫ですか？顔色悪いですけど？途中でリタイアします？」

琴乃ちゃんは全然、怖がっておらずむしろ楽しそうにしている。

この子はこういうのが得意なのだろうか？

うーん、女の子って見た目のイメージと違う時があるから怖い。

「怖いなら怖いと認めたらいいんです。先輩、意地なんて張らないでください」

「意地を見せなきゃいけない時があるんだよ、男の子にはね」

「くすつ。先輩、台詞はカッコいいですけど、真っ青な顔色で言われても……」

薄暗いこの場所で顔色までは分からないのでからかわれているだけだ。

実際に恐怖で何かなりそうだが……。

ちくしょう、男として情けなさすぎる。

「それじゃ、私は怖いのでリードしてください」

嘘だ、めっちゃ楽しんでいたくせに、怖いわけない!?

琴乃ちゃんの意外な一面、この子、意外とSだ……。

その後もお化け屋敷の恐怖と悪戯をしかけてくる琴乃ちゃんのダブルアタックに俺は散々な目にあわされることになる。

うぎゃー……ガクッ。

お化け屋敷にすっかりと力を奪われた俺は、その後も絶叫系のジェットコースターに敗北してぐったりとうなだれていた。

重力を断ち切られたような激しいアップダウン。

加速するコースターを前に人間は何とも無力なのだろう。

食事もかねてベンチで一休みの俺は呆然としていた。

もうダメです、俺の最後は今日かもしれない。

ただ今の俺は口から魂が抜けそうなイメージ。

「せ、先輩？ホントに大丈夫ですか？」

さすがに俺の顔色の悪さに琴乃ちゃんも焦る。

「翔太先輩。私、少し調子に乗ってました。先輩が遊園地、初めてなのに、“怖い物”がダメなの知っていたのに」

グサツと地味に傷つけないでくれ。

「……琴乃ちゃんって案外、意地悪っ子だったんだな」

「ううっ。そ、それは……先輩の反応が可愛いからってさっきも言いました」

「琴乃ちゃん。こっちにきてくれ」

俺は？と不思議そうな顔をする彼女をぎゅっと抱きしめる。

「せ、先輩……？」

こういう場所だ、誰かに見られても雰囲気的に悪くないだろう。俺は遠慮することなく琴乃ちゃんの温もりを感じる。俺の腕の中で大人しくしている彼女。

「じつしてるとすごく安心できる」

「……先輩、怒ってます？」

「怒らないよ。琴乃ちゃんの事、俺が嫌うはずがない」

軽い悪ふざけ程度、誰でもすることだ。

それに琴乃ちゃんが俺にしてくると言う事は心を許してくれている証拠だ。

初めは互いに距離を取りあっていた気がするけど、今は本当に距離も近い。

「俺さ、暗い所、全然ダメなんだよな」

「……え？」

「つい最近、麻由美に聞いたんだけど、俺って鈴音って子と一緒に幽霊屋敷に閉じ込められてた事があるって話を聞いた。それ絡みらしいんだけど」

「あの事件で……ごめんなさい、先輩。そうとも知らずに私は……」

シュンツとしてしまう彼女、俺は抱きしめ続けながら言葉を紡ぐ。

「気にしないでいいよ。俺もいつまでも暗闇を恐れちゃいけないし。あのさ、琴乃ちゃん。ついでだから、聞いてもいいかな？」

「はい。何ですか？」

「鈴音って誰なのかな？」

俺がずっと気になっていた相手。

もうひとりの幼馴染、鈴音。

ずっと彼女の存在が気になっていた。

麻由美はゴールデンウィークになれば会えると言っていた。今はどこか別の場所にいるらしい。

「……鈴音、ですか？」

「話しにくいのなら聞かないけど？」

「別に話しにくいわけではありませんよ。だって、鈴音は私の……」

「もしかして、琴乃ちゃんの“妹”？」

俺の言葉に彼女は黙り込んで、やがて静かに頷いた。

「そうなんだ。なるほど、そう言う事が」

それなら今までの過去の話にもつじつまが合う。

琴乃ちゃんの妹、鈴音……。

『 翔お兄ちゃん 』

大人しくて物静かだった鈴音の事を思いだす。

「あ、あの、私……」

「どうしたの、琴乃ちゃん？」

「……いえ、何でもないです」

琴乃ちゃんは何か言うのをやめてしまう。

まただ、この話題はどうしても彼女の表情を暗くさせてしまう。

琴乃ちゃんは妹とは不仲なのか？

「そろそろ、俺も復活してきたから、次のアトラクションへ行こう」

か。出来れば大人しい奴を希望するよ。激しいのは苦手だ」

「ということは、メリーゴーランドですか？」

「……そこまでお子様レベルにしないでいい。普通でお願いします」

俺達はそう言って笑いあう。

例え、彼女が何かを隠していたとしても俺はどんな真実でも受け入れる。

俺が琴乃ちゃんを愛していると言う事実には微塵の揺らぎもないから。

第33章：キス、時々、嵐へ後編

【SIDE：井上翔太】

……。

小学2年の夏、俺はいつだって琴乃ちゃんと一緒だった。遊びに連れていく彼女、明るくて元気な彼女に翻弄される毎日。それが楽しくて、俺もいつも彼女の後ろを追っていた。

「翔ちゃんっ。ねえ、見て。大きなセミを捕まえたの」

相変わらず、彼女は虫を素手でつかんで遊んでいた。

ミーンと鳴くセミが可哀想で俺は逃がしてあげるように言う。

「えーっ。せっかく捕まえたのに？でも、いいや。翔ちゃんがそう言うなら、逃がしてあげる。セミも短い命で夏を楽しまなきゃいけないものね」

セミを空へと放り投げて逃がす彼女。

「そうだ。“鈴音”と“麻由美”を連れて幽霊屋敷に行かない？」

「幽霊屋敷って何？」

「向こうの方にある大きなお屋敷。ずっと前から荒れていて、皆から幽霊屋敷って言われているの。ほら、探検に行くよ」

琴乃ちゃんに連れられた俺は途中で麻由美と鈴音を誘い、問題の幽霊屋敷に行く事に。

古びたお屋敷、それはどう見ても怖い。

「こ、ここなんだ？」

思いつきり雰囲気が出ていて俺は足がすくむ。

「ちゃんと懐中電灯も持ってきたから行くよ」

「……やめておいた方がいいよ、お姉ちゃん」

鈴音が声を震わせて琴乃ちゃんを止める。

けれど、彼女は「行くと決めたら行くのっ」と俺達に有無を言わせない。

「琴乃ちゃんって怖いものはないの？」

「ん？そうねえ、怖いのは幽霊とか虫とかは問題ないよ。本当に怖いのは……」

「怖いのは？」

「私のお母さん。すぐに怒るから怖い。お母さん以外は怖くない」

苦笑いをする琴乃ちゃんに俺は「理沙おばさんか」と思わず納得してしまっていた。

あの人ならばしょうがない、ホントに怒ると鬼ように怖い。

「鈴音は怖いものあるか？」

「私は……暗い所が嫌い。虫も、大嫌い……」

「鈴音は怖がりだもの。虫とかホントに嫌いよね？」

「だ、だって、あんなに気持ち悪い恰好してるんだもん。誰だって怖いよ」

鈴音がそう言って怖がるのに琴乃ちゃんは平気な顔をしていた。姉妹でもこれだけ差があるんだな。

「ほら、翔太くんっ。鈴音もこっちゃんも早く行こうよっ」

麻由美は麻由美で乗り気になって鈴音の背中を押して屋敷内に入る。

薄暗くてほこりっぽい屋敷、そこで何が待ち受けていたのか。その時の俺達はまだ知る由もなかった。

……。

ハッと意識を取り戻した俺は気がつけば夕焼けの空の下にいた。隣を歩いていた琴乃ちゃんは少し疲れた様子だ。

「先輩？次は最後です。観覧車ですよ？」

「あ、ああ……」

どうやら、その前のジェットコースター（本日3回目）で意識を失っていたらしい。

まったく持って遊園地とは怖い所である。

「琴乃ちゃんに怖い物はないのか？」

「はい？私ですか？……ありますよ、怖い物くらい」

「そうなのか？」

俺の記憶では琴乃ちゃんにはそういうもの、なさそうだったが。

「ええ。昔は暗いところも大嫌いだったんです。でも、いつからか大丈夫になったんですね。それでも、今でも嫌いなモノはあります」

「……例えば？」

「“虫”です。虫だけは今でも全然ダメなんですよ。気持ち悪くて触れません」

俺はその言葉にどこか引っかけりを感じていた。

琴乃ちゃんは虫が嫌い？

むしろ、得意だったような気が……俺の記憶違いか？

「ほら、そんなことより、並びましょう。この観覧車で今日のデートも最後なんですから。最後はちゃんと楽しみましょう」

「ああ、そうだな。さすがに観覧車は重力を断ち切られる事もない」

「……観覧車でそんなプレイがあったら、ある意味、怖すぎますよね」

俺はそれ以上、深くは考えずに目の前の現実を楽しむ。

後にして思えば、色々と考えておくべきだったのかもしれない。
現実の目で見てきた琴乃ちゃんと、過去の記憶の琴乃ちゃん。
少しずつずれていく、矛盾を持った記憶。

「……違う、何か違う?」

違和感を抱きつつも、俺にはそれを否定できる明確な確信がある
わけではない。

俺達の番がやってきて観覧車に乗りこむ。
徐々に上へと上がって行く観覧車。

「あつ、すみません。電話です」

彼女は携帯電話にかかってきた電話に出る。

「お母さん?どうしたの?……え?」

どうやら電話相手は理沙おばさんのようだ。

「あ、うん……分かった。翔太先輩、うちの母が代わって欲しいと
言ってます」

「理沙おばさんが?」

俺が電話を代わると理沙おばさんがいつもの明るい声で言う。

『デート中にごめんね、翔ちゃん。今日は帰りはうちによってご飯
を食べて行つてと言うお誘いな。翔ちゃんが琴乃をホテルでも連
れ込む予定があるなら別だけど』

「……本日はそのような予定はありませんから」

『そうなの？全然、全く娘の身体に興味なし？それはそれでどうと思っわ』

「琴乃ちゃんの意味を俺は尊重してるので。とにかく話は分かりました」

俺は理沙おばさんに変な突っ込みをされたくないので電話を切る。
今日は俺も家に母さんがいるのでその旨を伝えておく。

「ここから眺めるのって綺麗ですよね」

「そうだな。俺は遊園地は平和なアトラクションが好きだ」

「くすつ。先輩、今日は楽しめましたか？」

「まあね。何だかんだで楽しかったのは事実だ」

それは遊園地のアトラクションもあるが、琴乃ちゃんと一緒だったのが楽しかった。

やっぱり、彼女とのデートって最高です。

「……遊園地って知らない事ばかりで驚いたよ」

本当に小さな頃に来た以来だったので、ジェットコースターとかあんなにすごいとは思わなかったのだ。

「今日はありがとう、琴乃ちゃん」

「無理をさせてしまったんじゃないかって、思いました」

「大変ではあったけど、楽しかったよ」

狭い室内、観覧車って特別な感じがする。

「……先輩、私のこと、好きですか？」

それはちょうど観覧車が頂上付近にたどり着いた頃のこと。

琴乃ちゃんは俺に尋ねると真っすぐに可愛い瞳をこちらに向ける。

「大好きだよ」

ふたりつきりなので恥ずかしさなどもなく言い切る。

「私も大好きですよ。ずっと昔から好きです」

「琴乃ちゃん……？」

いつもと違う雰囲気の琴乃ちゃん。

それは彼女なりの覚悟があったのかもしれない。

「先輩。私は先輩にずっと嘘をついてきたんです」

「嘘……？それはどういう嘘なんだ？」

「それは……それ、は……」

彼女は言葉を詰まらせる。

今にも泣きそうな顔をしながら俺に何かを言おうとする。

「無理しなくていいよ、琴乃ちゃん」

「ダメなんです。本当はもうずっと前に会った時から言わなくちゃいけなかったのに。私はずるくて言えませんでした。このまま先も私は先輩をだまし続ける事が辛くて、嫌われてもいいから真実を言った方がいいって……」

彼女が嘘をついている。

それは一体、何なのか？

けれど、俺は涙を流しそうになる彼女を抱きしめてしまった。

「例え、キミが何の嘘をついていても嫌いになる事はない。それは安心していいから。それだけは俺を信じていて欲しい」

「翔太、先輩っ」

「無理して言わなくていいよ。琴乃ちゃんが話せるようになったら言って欲しい。その時は俺も話をちゃんと聞くから」

彼女の覚悟を押しつぶすような気がしたけれども、こんなにも震えている彼女に無理をさせて言わせることじゃな気がした。

ふたりで観覧車から眺めた赤く染まる空。

「先輩……ごめんなさい……」

俺たちはキスをかわす、観覧車が下へとつくまでの間……。琴乃ちゃんを守りたい、どんな嘘でも受け止めるつもりでいた。だけど、彼女のついた嘘が俺達の関係そのものに影響していたな

んて思わなかった。

理沙おばさんの誘いで俺はデートの帰りに彼女の家に寄る事になった。

一応は恋人の母親と言う事で対応にはいささか困る。
琴乃ちゃん家は家に向かうにつれて無言になっていく。
何かがあるのかな、と思いながらもそれを聞けずにいた。
俺達が玄関の前に立ち、扉を開いたその時。

「あつ、おかえりなさい」

明るい声で出迎えてくれたのはひとりの美少女。
俺は一目で分かってしまった。

目の前にいた女の子が“誰”なのか。

淡いブラウンの髪が印象的な彼女は俺に満面の笑みを見せる。

「久しぶりだね、“翔ちゃん”。10年ぶりかな、ずっと会いたかったよ」

「まさか……鈴音、なのか？」

「そうだよ。鈴音です。ホントに久しぶりだよね」

明るい笑顔で微笑む鈴音。

もうひとりの幼馴染、鈴音との再会は“琴乃ちゃん”との“別れ”を意味していた。

第34章：嘘がバレる時

【SIDE：井上翔太】

俺は一目で分かってしまった。

目の前にいた女の子が“誰”なのか。

淡いブラウンの髪が印象的な彼女は俺に満面の笑みを見せる。

「久しぶりだね、“翔ちゃん”。10年ぶりかな、ずっと会いたかったよ」

「まさか……鈴音、なのか？」

この女の子が鈴音、ずっと俺が思いだせなかった彼女。

「そうだよ、鈴音です。こうして会うの、本当に久しぶり」

俺と対面する鈴音、それに動揺を示したのは琴乃ちゃんだった。顔を青ざめさせて、何も言わずに家の中へと入ってしまう。

「あつ、琴乃ちゃん……？」

「せっかく琴乃にも何ヶ月かぶりに会うのに。まあ、いいや。ほら、早く家に入って。懐かしい話も色々したいもの」

俺の想像と違う鈴音の姿に戸惑う。

この子は、こんな子だっただろうか。違う、何かが違う。

リビングに通されると料理の準備をする理沙おばさんがいた。

「翔ちゃん、おかえり。琴乃とのデートは楽しかった？」

「ええ、それはいいんですが……」

「懐かしいでしょ？今日は鈴音も寮から帰って来たのよ」

全寮制の学校に通っていると行っていた。

だけど、それ以上に俺の違和感の正体が俺は知りたい。
ソファに座りながら、俺は鈴音を見つめる。

「ホント、10年ぶりって長いよね。翔ちゃんも身長も高くなって、成長してるし」

「……鈴音も綺麗になったと思うよ」

「あははっ。ありがとう。でも、琴乃と付き合ってるんだって？聞いた時には、ちょっとびっくりした。翔ちゃんがまさか“妹”と付き合うなんてね。琴乃の方が先に彼氏ができるなんて思ってもなかったわ」

違和感が納得に変わる。

彼女が俺を“翔お兄ちゃん”と呼ばずに“翔ちゃん”と呼ぶワケも。

ずっと鈴音は琴乃ちゃんの妹だと思っていたのに、姉であるという事実も……。

「あ、あのさ、鈴音ってもしかして、俺と同年？」

「え？そくだよ、高校2年生。何？そんな事も忘れちゃった？」

「もうひとつだけ。琴乃ちゃんって、昔は俺の事を何て呼んでいた……？」

「普通に“翔お兄ちゃん”。だって、年下だし、あの子ってばすごく控えめな子だったけど、翔ちゃんに懐いてたもの。私の妹ながらお淑やかで大人しいもんね」

……ずっとトゲのように突き刺さっていた違和感の正体。

それは俺が間違えていたという現実。

どうしても、鈴音を思い出せなかった理由。

それは当然のことだ、俺が彼女と琴乃ちゃんを認識として間違えていたから。

俺が琴乃ちゃんと思っていた明るい女の子が鈴音だった。逆に鈴音だと思っていた大人しい女の子こそ、琴乃ちゃんだったんだ。

記憶違い、思いこみ。

だから、思い出せない、思い出せるはずがない。

「あつ、私、翔ちゃんに謝らないといけないんだ。昔、いつかまた会おうって約束してたけど、中々会えずにいてごめんね？」

小さな頃に約束をしていた。

『会えなくても、私から会いに行くから』

その約束相手が鈴音だった。

間違いない、俺はずっと思い違いをしていたんだ……。

これまでも琴乃ちゃんと接してきて抱いてきた違和感の数々。そして、琴乃ちゃんがついていると言っていた嘘のこと。

あの子が時々見せていた悲しみの表情の意味。

すべてが俺に衝撃と言う形を持って、驚きを与える。

俺は動揺しながらも、不思議そうな顔をする鈴音と会話を続ける。麻由美が言っていた通り、俺が昔にとても仲が良かったのは鈴音だ。

彼女の妹であり、大人しい女の子の方が琴乃ちゃんだったのだから。

頭がものすごく混乱している。

けれども、これまで思いだせなかった事が思い出せていく。

「そうそう、それで翔ちゃんと私が幽霊屋敷で行方不明になっちゃったんだよね。あとですごく皆に怒られたんだから」

「……鈴音と一緒に地下に閉じ込められたんだよね？」

「うん。重い扉が閉じちゃって真っ暗中でふたりでずっと一緒にいたの。泣いちゃいそうな私を励ましてくれたんだよ。それが嬉しかったし、安心できたもの。あの時は本当に怖かったよね」

懐かしい話を彼女から聞きたびに、俺は過去を思い出していく。

「そう言えば、琴乃と翔ちゃんってどこで知り合ったの？」

「学校だよ。同じ学校だったから偶然にも再会して、すぐに琴乃ちゃんに告白されたんだ。向こうはそれ以前に俺の事を知ってたらしいけど、俺にとっては急でびっくりした。いきなり可愛い子に告白されたってな」

「あははっ。そうなの？ 琴乃らしいね」

話が弾んでいると、理沙おばさんが料理ができたと料理を運んでくる。

「お待たせっつ。あれ？ ふたりだけ？ 琴乃はどうしたの？」

「そう言えば、帰ってきてから全然出てこないね。あの子、様子も変だったし何かあったのかな？」

「翔ちゃん、呼んできてよ。ご飯だって。部屋の場合は分かるわよね」

「あ、はい。それじゃ、呼んできます」

そうは言ったけども、俺はどんな顔をして彼女に会えばいいのか分からない。

俺が悪いんだよな、最初に琴乃ちゃんと鈴音を勘違いしてしまったから。

俺はずっと彼女を傷つけてきたんだろう。思い出せば思い出すたびに彼女は俺に違うというメッセージを伝えようとしていた。

「琴乃ちゃん、俺だよ」

部屋をノックするけども、返事はない。

「あれ？ 琴乃ちゃん？」

何度、ノックしても返事はなくて。

「入るよ、琴乃ちゃん」

俺はそつとドアノブを回して部屋に入るけど、そこにはデートの時に使っていたバッグが置かれていただけで誰もいなかった。

「……携帯もここにあるし、どこに行つたんだ？」

机の上に置かれていた彼女の携帯電話。

窓の外を見ると暗い夜に雨が降り始めていた。

「思つた通りに天気が崩れてきたな」

今日はこのまま雨が降り続くと聞いている。

デートの時じゃなくて本当によかった。

「それにしても、琴乃ちゃんはどこにいるんだ？」

俺は不思議に思いながら部屋のドアを閉じて立ち去る。

リビングにいる鈴音とおばさんに琴乃ちゃんがない事を伝える。

「え？琴乃、いないの？」

「……ちよつと待っていて」

鈴音が確認してくると、どうやら靴もなかったようだ。

「おかしいなあ。でも、話をしている時に廊下は誰も通っていないよね？あの子の部屋から外に出るには絶対にここを通らないといけないのにどうやって外に出たの？」

廊下に出て確認すると、俺達はある事に気づく。

裏の方にある扉の力ギが開いていたのだ。

ゴミを出すためにあるドアでここからも外へ出ていける。

「なるほど、ここから出て行ったのか。……それで、何であの子が逃げ出すわけ？」

理沙おばさんに尋ねられて、俺はこれまでの事を正直に話す事にした。

夕食を食べながら、彼女達には琴乃ちゃんのついていた嘘について話す。

俺がずっと琴乃ちゃんだと思っていたのは鈴音だったこと。

そして、思い違いをしていたことも。

「そう言う事だったのね。私もおかしいとは思ってたのよ。昔から大人しいあの子を翔ちゃんは明るい子と言っていたし、琴乃と鈴音を勘違いしているんじゃないかって」

「俺が悪いんです。勘違いしていたのに」

「あの子も、あの子でそれを利用してたんじゃないかな？」

「……俺、琴乃ちゃんを探してきます」

食後、俺はそう言って外に出る準備をする。

まだ琴乃ちゃんは帰ってこない。

時計を見ればまだ8時過ぎだが、この雨を考えても放っておくわけにはいかない。

「あのさ、翔ちゃん。琴乃が翔ちゃんを好きにだったの、私、知ってたよ。ずっとあの子は翔ちゃんの背中を見続けていたから。あの子にとっては初めて親しくなった男の子だった。きっと初恋だったんだと思う」

「鈴音とばかり仲が良くて、正直言つてあの頃の俺は琴乃ちゃんの影は薄かった気がする。でも、幾つかの思い出はあるよ」

「琴乃は待っているんだよ、きっと……。早く、あの子を見つけてあげて」

鈴音がそう言つて俺に傘を二つ手渡す。

「携帯電話の番号を交換しよ？あの子を見つけたら連絡して。お風呂の準備をして待つてゐるから。それと、これも……」

「これは……？」

俺は鈴音から小さな袋を手渡される。

「あの子に渡せば分かるから。あとはよろしく」

「ああ、分かったよ。……そうだ、鈴音。変なことだけどさ、確認してもいいかな？」

「ん？いいけど、何？」

「あのさ、俺と鈴音って　だよね？」

鈴音から“ある事”の確認をして俺は玄関を出る。

降りしきる雨はまだ小雨だ。

これから本降りになる前に何とか琴乃ちゃんを探さないといけない。

「……琴乃ちゃん」

俺と顔を合わせづらい、その意味は理解できる。
だけど、俺にも責任があるんだ。

琴乃ちゃんに俺は嘘をつかせてしまった。

俺の勘違いが彼女に鈴音を演じさせてしまったのだ。

「そついや、琴乃ちゃんが言ってたな。俺は琴乃ちゃんの事は思い出せていないって」

あの時はその意味が分からなかった。
けれど、今ならその意味を理解できる。

「俺はバカだ。大事な恋人なのに、全然、気づいてやれなかったなんて……」

自己嫌悪と後悔をしながら俺は雨の夜を歩きだした。
サーッと降る小粒の雨。

「さて、それじゃ、片っぱしから思い出の場所を行ってみようか？」

俺は本当の琴乃ちゃんの記憶を、思い出を、思い出さなくちゃいけない。

彼女はきつと思い出の場所にいるはずだ。

俺と琴乃ちゃんが体験した思い出のある場所に　。

第35章：別れの時間

【SIDE：井上翔太】

記憶の中で俺が琴乃ちゃんだと思っていた相手は鈴音だった。

そして、鈴音だと思い込んでいた年下の少女。

大人しくて物静かで、いつも俺達の後をついてきていた女の子。

その子こそが、琴乃ちゃんだったんだ。

俺の思い込みによる記憶違い。

彼女はそれを否定せずに、ずっと彼女を苦しめてきたに違いない。

俺はバカだな。

どうして、ここまで思いだせなかったのか。

麻由美の言葉を思い出しながら俺は過去の記憶をたどる。

俺達の前から姿を消した琴乃ちゃんを探すために小雨の降る町を走る。

「琴乃ちゃんはどこにいるんだ？」

まずは近くの森林公園に向かう事にした。

俺達がよく遊んでいた場所。

何度も訪れて、たくさんの思い出があるその場所は電灯がひとつあるだけで静まり返って、どこか不気味な気さえする。

俺は森林公園に入ると辺りを見渡すが琴乃ちゃんの姿はない。

「ここじゃないのか？」

虫嫌いだった琴乃ちゃん、初めて仲良くなれたのはこの場所だった。

だけど、それ以上にここは鈴音との思い出の方が多い。

「琴乃ちゃんは琴乃ちゃんとの思い出がある場所にいると言う事が
それを思い出せなければ俺はきつと彼女に会う資格がない。
恋人失格、そうならないために俺は何としても思い出さないと
けないんだ。」

「そういや、この大木によく上っていた時にも彼女は……」

俺は大木を見つめてある事に気づく。

それは初めて琴乃ちゃんと来た時に抱いた違和感。

この場所で体格差のある子供達が遊んでいた時の光景を思い出す。
俺はなぜあの時に気づかなかったのだろう。

「あのぐらいの歳の差は体格に大きな差が出る。一つ年下の彼女が
俺より木のぼりが上手に出来るわけがないんだ」

この木にのぼるのが得意だったのは鈴音だ。

アウトドアが好きで、男に負けない動きを見せていた。

そして、それを「危ないよっ」とドキドキした顔を眺めてい
たのが琴乃ちゃん。

俺と遊んだ時に彼女は一度もこの木には登れなかった。

「あんなに思いたせなかったのに、今はこんなにも簡単に思い出せ
る」

思いたすべき相手が間違えていたのだから仕方がない。
人の記憶つてのは都合のいいように出来ていやる。

「……ここじゃないとしたら、次はどこだ？」

幽霊屋敷の方が近いのでそちらを訪れることにする。

無人の屋敷は何度来ても不気味で、荒れ果てたままだ。
夜の雨の幽霊屋敷は雰囲気が出過ぎだろう。

「さすがにここにはいないよなあ……」

ここにいたら、それはそれで怖い。

あの夏、俺はここで鈴音と一夜を過ごした。

真っ暗なワインセラー、どこにも逃げ場もなく、俺達は恐怖に耐えていた。

それは今でも俺に暗所恐怖症というトラウマを残している。

「琴乃ちゃんはここにもいない。思いだせ、あの子との思い出があるはずだ」

そう、どこかあるはずなのだ。

琴乃ちゃんだけの思い出が何か……。

薄らと記憶に引っかけかりを感じている。

次は高台の空き地、それ以外にも遊んだと思われる場所を訪れる。
どこにもいない、どこにいるんだ？

俺は一度琴乃ちゃんの家連絡を入れると鈴音はまだ帰っていないと言う。

「そうか。まだ帰ってきていないか」

『あ、でも、何かヒントになるかもしれない事はある。今日の昼、麻由美にあったのよ。ほら、幼馴染の麻由美。分かる？』

「ああ、麻由美なら最近ちよくちよく会ってるからな。それで、麻

由美が何か？」

『あの子から翔ちゃんと琴乃が付き合ってるのを聞いたの。その時に琴乃はある思い出があって、翔ちゃんを好きになったと言っていた。その場所で待っているんじゃないの？』

ある思い出とは何か、それは俺が先程彼女に確認した事と関係している。

『……翔ちゃんが思いだしてあげて。あの子との過去を、思い出を』

「分かった。善処するよ。俺にもひとつ、心あたりを思い出した」

『それなら任せるわ。翔ちゃん、琴乃の事が好きなのよね？』

「だから、こうして探しているんだよ。過去も嘘も俺は気にしていない。再会できた時から始まったと思っている」

だけど、琴乃ちゃんにとっては違うのだ。

ずっと昔から始まっていた、それに気付けなかった俺が悪い。口では何と言っても、本音では苦しみ続けてきたに違いない。

「必ず連れて帰るから」

約束をして俺はその場所へと向かう。

俺はずっと気になっていた鈴音の言葉を思い出していた。それは先ほど出て行く時に彼女に確認したことだ。

『なあ、鈴音。俺達ってキスはしてないよな？』

『キス？してないよ、私が覚えている限りはね』

そう、どんな偽りの記憶でも、ひとつだけ真実があった。

それは俺がキスをしたのは琴乃ちゃんが相手だと言う事だ。

色々頭が混乱して忘れかけていたが、俺と琴乃ちゃんの思い出の場所がある。

「……最後はここか」

俺は古びた教会へとたどり着いた。

麻由美の祖父が神父をしている教会。

『俺達が初めてキスをした場所。それって、あの教会じゃないか？』

『はい。そうです。やっと、思い出してくれましたね。些細な事でも、“本当の私”を思い出してくれてよかった。翔太先輩』

あの時の会話、俺は違和感があったけども、確かに相手は琴乃ちゃんだった。

ファーストキスの思い出の少女は鈴音じゃない。

この思い出だけは俺達の思い出のはずだ。

「ここにいるのか、琴乃ちゃん……」

教会の扉が開いていたので俺は中へと入り込む。

揺れるろうそくの炎、ステンドグラスは明かりに照らされて綺麗だ。

「……へえ、思ったより早く来たね。翔太くん」

だが、そこで俺を待っていたのは麻由美だった。

「そういうことか」

麻由美は彼女の親友だから、彼女をかくまう事も容易だろう。

「鈴音と会ったんだ？そして、こっちゃんがつき続けた嘘にも気づいた」

「お前は気づいていたのか？彼女が嘘をついていた事に？」

「当然。ふたりの話を聞けば、何かが違う事も分かる。それでも、こっちゃんからは口止めされてたけどね。あの子の嘘は翔太くんには衝撃的なモノだった？」

「……俺が思い違いをしていたなんて思わなかった。彼女を苦しめていたのは俺だ」

俺の勘違いさえなければ、彼女に嘘をつかせる事もなかったのだから。

「そうだね。でも、人って弱いからさ。嘘でも何でも、自分の幸せを守るためなら利用するの。こっちゃんは翔太くんが自分を鈴音だと思い込んでいる事を利用した。自分の思い出まで捨てて、嘘をつき続けたの」

「麻由美……琴乃ちゃんはどこにいる？ここにはないのか？」

「そつだよ、残念ながら彼女はここにはいない。惜しいけど、違ふみたいだよ。確かにここは翔太くんとこっちゃんの思い出がある場

所だよね。ファーストキスをした場所だって聞いたけど？」

「琴乃ちゃんから聞いたのか。だったら、麻由美はどうしてここに
いる？」

琴乃ちゃんの代わりに麻由美がここにいる理由が分からない。
思い出の場所はここじゃないのか？

「ここも正解には違いない。ファーストキスって大事なもの。でも、
こっちゃんには私に言ったの。本当に思い出がある場所はここじゃな
いって言ってたわ」

「何だって……？」

もう俺の知る限りの場所行きつくしたはずだ。
この近所で行っていない場所はないはず。

「……私は彼女から電話で翔太くんが来たらここにはいない、とだ
け告げてと言われた。でも、あの子、辛そうだったよ。本当は探し
て欲しくないんだと思う。矛盾してるよね、探してほしいのに探し
てほしくないって」

「どついう事だ？」

「翔太くんに嘘をついてた。鈴音のふりをして騙していた事を責め
られるのは覚悟済みな。あの子が本当に恐れているのは嘘を怒ら
れる事じゃない。逃げてしまいたくなるほどに悲しいのは……」

麻由美はそつと指先をステンドグラスに向ける。
俺が子供の頃に見ていたと言う天使の絵が描かれたステンドグラ

ス。

「贖罪と懺悔。^{じゅくざい}……神は人の罪を許すために存在する」

「許す？それが今の話とどう関係あるんだ？」

「こっちゃんは許されたい事がある。そう、今の彼女は許されたい場所にいる。こっちゃんは鈴音と翔太くんが再会するのを望んでいなかった。それは嘘がバレる事ともうひとつの罪が明らかになるのを恐れていたから」

もうひとつの罪……？

琴乃ちゃんは何を恐れていたんだろう？

「……もう一度、全てを最初から思い出して？そうすれば、分かるはずだから」

麻由美は俺にそう告げて、俺を教会から追い出す。

「こっちゃんを見つけてあげて。翔太くん」

「最後は自分で思い出せってことか」

「そういうこと。今なら誤解もせずきちんと翔太くんも思い出せるはずだからね」

忘れていた過去を思い出す。

それは10年前の夏、俺達の記憶。

俺は琴乃ちゃんの居場所を思いだせるのだろうか。

このまま彼女と別れる事だけは避けなきゃいけない。

琴乃ちゃん、キミは今、どこに
いるんだよ？

第36章：夏の思い出へ前編

【SIDE：井上翔太】

それは俺にとって10年も昔の話だ。

まだ7歳の小学2年生だった夏のこと。

俺は母さんの仕事の都合で夏休みの間、彼女の友人の家に預けられる事になった。

琴乃ちゃんや鈴音との出会い。

あの日々は俺にとってかけがえない思い出になった。

俺は思い出す、その日々を……思いだなければいけない事がある。俺と琴乃ちゃん、本当の思い出とは一体何なのか？

……。

小学2年の夏休み、また暑い夏がやってきた。
夏は暑いからあまり好きじゃない。

「それじゃ、翔太。お利口にしてるのよ？」

「うんっ。母さんも早くむかえにきて」

「……ええ、そうするわ。電話とかはするからね」

母さんのお仕事の都合で俺はあった事もない人の家に預けられる事になったのだ。

そこには歳が近い女の子がふたりいると聞かされていた。

仲良くして遊びなさい、と母さんに言われたけれど、幼稚園からあまり女の子とは付き合えない俺はどうすればいいのか実際に会うまで微妙に分からなかった。

母さんの友達で俺を預かってくれる理沙おばさん。

彼女に家に連れてかれてリビングで俺は自己紹介をする。

「はじめまして、翔太です。お世話になりますっ」

「へえ、挨拶もしっかりしてるし、可愛い子じゃない。赤ちゃんの頃にあつた事はあつたけど、それ以来だからね」

「よろしくおねがいしまーす。おばさん」

俺がそう言うとな彼女は不満そうに訂正をさせる。

「おばさんじゃないわ。いい？私の事はおねーさんって呼びなさい。いいわね？」

「お、おねーさん」

言わなければ怒られる、怖い、と幼心に俺は悟った。

「よろしい。翔太君、遠慮しないでくつろいで。私の娘も呼んでくるわ」

理沙おねーさんはそう言っただけで一人の女の子を連れてくる。一目見れば分かる明るい女の子がそこにいた。

「夏の間だけど、よろしくね。俺は翔太って言うんだ。キミは？」

「私は……私は“鈴音”だよ。仲良くしようね、“翔ちゃん”っ！」

鈴音、それが俺にとって初めて親しくなる女の子。

同じ年でもあり、気さくな性格の彼女とすぐに意気投合して俺達は仲良くなる。

案内されたのは布団の敷かれた畳の部屋だった。

「ここが翔太君のお部屋よ」

「私の部屋は隣なのよ。翔ちゃん」

「鈴音、彼と遊んであげて。あら、琴乃はどうしたのかしら？」

「あー、琴乃なら一人で部屋でぬいぐるみと遊んでる。翔ちゃんは男の子だから恥ずかしいのかな？」

琴乃、と言うのは鈴音の妹らしい。

俺よりもひとつ下、小学1年生だって聞いた。

理沙おねーさんが夕食の準備をしている間に俺は部屋に荷物をおく。

段ボール箱に入っているのは自分の着替えの服などだ。

「どーして、翔ちゃんはここに來たの？」

「お母さんがお仕事なんだって。一緒にはついていけないから1ヶ月間、預けられる事になったんだ。こんなに長い間、離れて暮らすのは初めてだからちよつと不安なのはあるよ」

「そつなんだ。ママがお仕事でいなくなっちゃたの？寂しくない？」

「うーん。寂しいかもしれないけど、今は大丈夫だよ」

まだ実感がない。

いつも仕事で夜にいない日もあるから特別な寂しさはなかった。

「私なら無理。ママがいないとダメだよ。翔ちゃんはすごいね?」

「鈴音は理沙おねーさんが大好きなんだ?」

「うんつ。大好きだよ。パパも大好きつ!翔ちゃんのパパは?」

パパ、お父さんは俺にはいない。

俺が生まれてからずっといない。

普通の家にはお父さんとお母さんがいるんだって……。

学校の皆にはいるからどういう存在なのか想像するしかない。

「ずっと前からお父さんはいない、あつた事もないからお父さんつてよく分からない。ねえ、お父さんつてどういう人なの?」

「パパ?えつとねえ、パパはね……」

俺が鈴音の家に来て、初めて触れた本当の家族と言うもの。

お母さんがいて、お父さんがいる、そんな普通の家族と言うものを初めて感じた。

家族、その言葉の意味を俺は知る。

……どーして、俺にはお父さんがいないんだろう?

お母さんが迎えに来てくれたら、聞いてみようかな?

俺が鈴音の家に預けられて数日が経過した。
他人の家での生活には慣れ始めてきた。

理沙おねーさんは優しいし、料理も美味しい。
いつもお仕事で忙しいおじさんもキャッチボールを俺としてくれる。

鈴音は可愛くて、いつも楽しく俺と遊んでくれていた。
毎日が楽しかったけれど、俺はまだ挨拶しかしたことのない女の子がいた。

……鈴音の妹、琴乃ちゃん。

控えめな性格の女の子らしく、中々会話もできない。
俺が話そうとするとすぐに逃げてしまうから。

「えーっ。琴乃と仲良くなりたいの？」

「だって、いつも逃げられちゃうから気になって」

「うーん。あの子、男の子が基本的に苦手なもの。幼稚園の頃から
お話だってしないし」

黒髪がよく似合う人形のように整った顔。

お人形のようなという表現はよく合っていた。

俺が話しかけてもビクツとするだけで何も話をしてくれない。

だけど、それは思わぬ形で仲良くなれるきっかけができた。

琴乃ちゃんが苦手なのは昆虫。

偶然にも彼女の服についた虫を払ってあげた事が彼女との和解の
きっかけになる。

それは夏のある日、カブトムシを捕まえた鈴音に俺は逃がすように言った。

「翔ちゃん？どうしたの？」

「え？あつ、その……カブトムシ、可哀想だから逃がしてもいい？」

「可哀想？翔ちゃんって優しいんだね。いいよ、逃がしてあげて。どうせ、家では飼えないもの。“琴乃”が怖がるから」

「琴乃ちゃんはカブトムシが嫌いなんだ？」

実の所、俺も虫はあまり好きではない。

「虫とか大嫌いだよ。足がうによってしてるのが嫌みたい」

俺と同じ理由だった、あの無意味に多い足がすごく嫌いだ。そんな時、大人しい声で俺達を呼ぶ声に気づく。

「あ、あの、お姉ちゃん。しょ、翔お兄ちゃん。ママがお昼ご飯だから帰ってきてって」

「そう？分かった、すぐに帰る。ほら、行こう、翔ちゃん」

琴乃ちゃんが呼びに来てくれて、鈴音は俺の手を引いて歩きだす。

「あつ！？」

捕まえていたカブトムシをつい手放してしまったのだ。

逃げ出すカブトムシが向かった先は琴乃ちゃん。

「い、嫌！？は、離れてよっ！？」

服にへばりついたカブトムシに大声で叫び出す。

誰だって苦手なものがあって、俺も直に触れるのはすごく複雑な気持ちだ。

「た、助けて、うえーん」

泣きだしてしまった彼女を放っておけずに俺はすぐにカブトムシを引き離す。

「翔お兄ちゃん……？」

涙に濡れた瞳で俺の顔を見つめてくる琴乃ちゃん。

「もう、大丈夫だよ、琴乃ちゃん」

「ありがとう、お兄ちゃん」

安心した琴乃ちゃんの顔を見て俺も少し照れくさくなった。

こんな笑みを見せる子なんだ。

それが素直な本音で、俺も微笑みを返す。

その事件をきっかけに俺達は急激に仲良くなり始めた。

と言っても、いつも鈴音と遊びに行く時に後ろについてくるだけだ。

琴乃ちゃんはあまり構って欲しいとは言わない。

だから、俺の方から積極的に絡むようになっていた。

可愛い年下の彼女に慕われるのは俺としても妹ができたようで嬉

しかったんだ。

ある程度仲良くなった8月上旬、俺は琴乃ちゃんの幼馴染を紹介される。

古びた教会に連れて行かれた中には何人かの子供が遊んでいた。

「ふーん。この子がこっちゃんがお兄ちゃんって呼ぶ男の子なんだ」

「……えっと、キミは誰？」

「私は麻由美だよ。この教会の神父様はお祖父ちゃんなんだ」

そう言った彼女は中を案内してくれる。

教会で目を惹かれたのは大きなステンドグラスだった。

一目で俺はそのステンドグラスに釘付けにされてしまった。

なんて綺麗な光景なんだろう？

キラキラと輝くガラスがあまりにも綺麗で俺はずっとそれを見続けていた。

初めて見た立派なステンドグラス。

別に俺は男だし、綺麗な物に興味があつたわけじゃない。

それなのに、俺はその幻想的な光景に身動きできずにいた。

天使が女の子を優しく包み込む絵が描かれている。

「……本当に綺麗だ」

それは親と引き離された俺の寂しさを癒してくれた。

「翔太くん、どうしたの？そろそろ、行くよーっ」

「あ、うんっ。分かったよ」

麻由美に呼ばれたので俺はその場を離れようとする。

もう一度だけ、俺はステンドグラスを眺めた。

教会のステンドグラスは俺にとって安心できる場所だった。

やっぱり、お母さんに会えない事は俺にとって不安だったから。

第37章：夏の思い出へ中編

【SIDE：井上翔太】

小学2年の夏休みも半ばに入った。

仲良くなった鈴音と俺は毎日のように遊びに出かける。

おじさんにキャンプに連れていってもらったり、海で遊んだりした。

それはこれまで自分がした事がない事ばかり。

家族で何かをしたりする事は楽しいのだと初めて知った。

朝からリビングに鈴音に集められた俺と琴乃ちゃん。

「というわけで、今日は探検に出かけます！」

「……私はいや」

すぐに否定する琴乃ちゃん。

鈴音は「琴乃もついてくるのよ」と強引に誘う。

嫌がる彼女だけど、姉には逆らえない。

「だ、だって、あのユーレイ屋敷でしょ？」

「そうよ。幽霊屋敷に行くの。ちゃんと準備もするから大丈夫」

「幽霊屋敷って何なの、鈴音？」

俺の疑問に彼女は意地悪く笑いながら言う。

「ふふふっ。それはね………ついてからの楽しみっ」

「……翔太お兄ちゃん、お姉ちゃんについて行っちゃダメ」

「そんなに怖い場所なのか」

俺の服の裾をつまみながら怖がる琴乃ちゃん。

ずいぶんと俺にも懐いてくれたのは嬉しいが、俺も鈴音にノーとは言えない。

「懐中電灯は2つあればいいよね。あとは……お菓子、と、他には……」

鈴音は適当にリュックサックに詰めて意気揚々としている。

琴乃ちゃんは正反対に顔を青ざめさせていた。

「お兄ちゃん、気をつけて。ユーレイ屋敷はホントに怖い」

「そんなに怖いんだ？」

「うん。前にマユと一緒に行って、すっごく暗くて怖くて泣きそうになったの」

思っただけで怖いんだろうか。

彼女は顔色がとても悪いので心配になる。

「琴乃はビビりすぎなのよ。暗い所が怖いだけでしょ」

「……お姉ちゃんだって怖がりなのに」

「あははっ。私が怖がり？そんなことないもん」

鈴音は怖がる様子もなく、荷物を詰め込んだ鞆を俺に渡す。

「荷物は翔ちゃんが持つて。さあ、行くわよ」

外で待ち合わせをしていた麻由美を加えた4人。

その4人で幽霊屋敷と呼ばれる場所に行った。

古びた屋敷、今にも壊れそうな扉を抜けた。

「足元だけは気をつけて。床がボロボロだからね」

懐中電灯を照らしながら建物の中をゆっくりと歩く。

「真っ暗だねー。ホント、いつ来てもここって怖いなあ」

麻由美はそう言いながらも楽しんでいる様子だ。

「……うう、暗い所は嫌い。怖いよ、お兄ちゃん」

そう言つて、俺から離れずにいる琴乃ちゃん。

鈴音は先陣を切つて、鼻歌まじりに探検気分を楽しんでいる。

「くすつ。これよ、これ。やっぱり、探検つてこうじゃないと」

女の子なんだからもっと大人しい方がいいのに。

と、俺は内心、思いながらそのあとをついていく。

「翔ちゃん、見て見て。この辺から雰囲気が出てくるの」

俺の手を引いて前へ前へと進む鈴音。

俺の後ろにいた琴乃ちゃんは泣きそうになりながら、麻由美の方へと逃げる。

「こっちゃん。大丈夫だって、そんな泣きそうな顔をしないで？」

「だって、ここって……ううっ」

震えあがってしまっている琴乃ちゃんに俺は「？」と不思議に思う。

「見てよ、あの絵。ここから先はまだ中にいろいろと残ってるんだよ」

埃っぽい部屋の中に飾られている洋画。

カビ臭いのであまり部屋の中にはいたくない。

「……鈴音、私とこっちゃんは先に外に出てもいい？」

「何よ、麻由美まで？」

「何ていうか、今日は雨が降りそうな天気でしょ？風もあって私も怖いから外で待ってる。1時間くらいしたら出てきてね」

彼女は腕時計を指差して言う。

「私、時計持ってない。翔ちゃん、持ってる？」

「うん。持ってる」

「そっか。じゃ、1時間後ね。空き地の方で遊んでいて」

「分かった。翔太くんも気をつけてね」

麻由美が怖がって動けなくなった琴乃ちゃんを連れて外へと出る。

「……あー、もう、あの子ったらホントに弱虫なんだからっ」

「でも、怖いんだったらしょうがないよ」

俺も男じゃなければ逃げ出したい。

暗い廊下をぐるっと回って、元の場所へと戻ってくる。

広い屋敷の中を回っていると、方向感覚が分からなくなる。

「ねえ、ここって何だろう？」

キッチンと思われる場所。

そこには下へと続く階段がある。

「入ってみる？」

「うーん。何だか怖いなあ。ちょっと待って」

俺は机の上に目印となるハンカチを置いていく。

「これで何かあったら分かるよな」

そう、俺は嫌な予感がしていたのだ。

階段をおりると子供にとっては大きな空間が広がっていた。

重い扉を開けると、古い木で出来た棚が並んでいる。

懐中電灯で照らすと「ワインセラー」と書かれていた。

「わいんせらー？って何だろう？」

鈴音も初めて来たのか、興味津々と言った感じだ。

「ワイン、っていうお酒をいれておく棚みたい」

「ふーん。パパもたまに飲んでるよ」

「……お酒置き場なんだ」

光もなく、すごく不気味な場所だけに早く去りたい。
ほんのりと何かの香りがする、そこだけは特別な空間のような気がした。

「もう飽きたから帰ろっか。琴乃たちを待たせたくないもん」

時計はちょうど1時間が経過していたのでそろそろ帰ろうとする。
だけど、彼女は扉の前で身動きを取れないでいる。

「……鈴音、どうしたの？」

「あ、あれ？おかしいなあ、さっきは簡単に開いたのに」

ガチャガチャとドアノブを押したり回したりするけど、ドアが開かない。

先ほどまで余裕の表情だった鈴音が戸惑って焦り始める。

「ドアが開かなくなっちゃった」

さつと顔を青ざめさせる鈴音。

俺も代わりにドアを開けようとするけど、どうしても開かない。蹴ったり、押したりと頑張っては見たものの、扉は開く気配もなかった。

「もしかして、俺達、閉じ込められた……？」

あれからどれくらいの間が経っただろうか。

「しくしく……ぐすっ……」

あの鈴音が泣いている、俺は驚きながら見つめていた。俺の隣で声を上擦らせて泣いている鈴音を俺は慰めようとする。

「大丈夫だって。すぐに誰か助けに来てくれる」

「ホントに？だって、もう何時間経ってるの？誰も来ないじゃない」

懐中電灯で時計を見ると夜の8時過ぎ。

さすがに俺も不安になりながら、鈴音に寄り添う。

「……ごめんね、翔ちゃん」

「仕方ないよ。閉じ込められちゃったんだから」

鈴音はシュンツとしながら、うなだれていた。普段の彼女からは想像できないけど、彼女も女の子なんだ。

「翔ちゃん。お腹空いたよ」

「確か、リュックの中にお菓子があつたはず」

俺達はリュックに入っていたお菓子を食べて空腹を満たす。
それからさらに時間が経って、夜の10時を過ぎた頃、悪夢は始
まった。

つけっぱなしだった懐中電灯が電池切れをしてしまったんだ。
何も明かりもなく、真っ暗になってしまい、ふたりして震える。

「な、何も見えないよ。翔ちゃん？」

「俺はここにいるから……」

俺は鈴音の手を握りながら不安を打ち消そうとする。

「……幽霊屋敷なんて来なければよかった」

真っ暗の室内、ふたりして後悔しながら雑談で不安をぬぐう。

「翔ちゃんは琴乃と仲良くなっていいお兄ちゃんみたいだね」

「そうかな？」

「そうだよ。だって、琴乃って男の子と話をするのだって苦手なん
だよ？」

心を許してくれたのか、琴乃ちゃんとの距離は縮まったように思
う。

兄妹のいない俺にはどこかくすぐったい気持ちになる。

「私はダメなお姉ちゃん。いつだって琴乃の嫌なことしかしてない。今日だって、琴乃は嫌がってたのに無理に連れてきたし。嫌われるかもねー」

「……でも、琴乃ちゃんも嫌いじゃないはず」

「うん。ホントに嫌ならしないけど、あの子っていつも大人しいから。私が何とかしてあげたいって……そう思ってるのに空回ってるかな。翔ちゃんも私の事、嫌いになった？」

不安げな鈴音を俺は励まし続けた。

「そんなことないよ」

本音を言えば俺も怖くて、不安で押しつぶされそうだった。それでも自分は男の子だと言う意地だけで、鈴音を守ろうとしていた。

翌朝、眠りについてた俺達を大人たちが見つけてくれた。

あの後、様子がおかしい事に気づいた琴乃ちゃん達が知らせられて、皆が探してくれたようだ。

あのハンカチに気づいてくれてここを見つけてくれたらしい。

それから、理沙おねーさんに俺達は怒られたけど、心配させたから当然だ。

幸いなことに大した怪我もなく、無事に助かったんだけど、それ

から数日の間はさすがの鈴音も大人しくなっていた。

「……あ、あの、翔太お兄ちゃん？」

「ん？どうしたんだい、琴乃ちゃん」

鈴音が大人しいので暇な俺は琴乃ちゃんに声をかけられた。

「あのね、私と一緒にあでかけしない？」

彼女から俺を誘ってくれたの初めてだったので俺はすぐに頷いた。
琴乃ちゃんと一緒に向かった先、教会で俺達は初めての思い出を
作ることに。

第38章：夏の思い出〈後編〉

【SIDE：井上翔太】

琴乃ちゃんの誘いを受けて訪れたのは教会だった。
いつもより人の数が多くてびっくりする。

「人がいっぱいいるけど、何かあるの？」

「あのね。結婚式があるんだって」

「結婚式？へえ、そうなんだ」

よく見れば中には花嫁姿の女の人がいた。

「キレイっつ。花嫁さん、可愛い」

「本当に綺麗だ。花もたくさん舞ってるね」

紙吹雪のように花が宙を舞う。

そして、花嫁と新郎が互いに見合っけてキスを交わす。

「キスってあんなのなんだ？はじめて見た」

話では聞いたことがある。

キスってというのは好きな人同士が唇を触れ合わせる行為だ、と。

「私も……見たのは初めて」

ほんのりと顔を赤める琴乃ちゃん。

「ああいうのって楽しそうだね」

「楽しい……？」

彼女は何か考えるような顔をしている。

そして、普段の彼女からは想像もできない一言を告げる。

「翔お兄ちゃん。あのね……私とキスしてみない？」

「え？き、キス？」

「ママが言っていたの。キスは特別な人とするものだって」

琴乃ちゃんの瞳が俺だけを見つめている。

「……ちゅっ」

俺は見よう見まねで彼女に唇を押しつけた。
小さな水音をたてる唇同士の接触。

「これがキス……？」

初めてのキスは何だかこそばゆい感じがした。

「お兄ちゃんとしたかった。すごく嬉しいよ？」

琴乃ちゃんが顔を真っ赤にさせている。
それが可愛いと素直に思った。

照れくさくなつて俺は笑顔で誤魔化す。

「あのね、翔お兄ちゃん。いつもお姉ちゃんと仲いいよね？」

「そうだな。鈴音とはもう1ヶ月近く一緒にいるからな……」

「私もお兄ちゃんと仲良くしたい」

いつも控えめな彼女が自己主張するのは珍しい。

「俺も琴乃ちゃんと仲良くしたいよ」

「ホント！？それじゃ、こっちに来てよ。もうひとつ、来て欲しい所があるの」

俺に繋がれたのは小さな手だった。

俺よりもずっと小さくて、でも、温かくて。

それが琴乃ちゃんの温もり何だと思いつながら彼女の後をついて行く。

いつも遊んでいる森林公園の近く、そこには古い神社があった。その境内の中にある一本の大木。

「ここは？」

「ここはね、“えんむすび”の木なんだってママが言ってたの」

「えんむすび？って何？」

「私もよく分からないけど、大切な人と一緒に来ると幸せになれるんだって」

琴乃ちゃんは俺に笑いかけながら、

「この紙をここに結ぶのっ」

「へえ、そうなんだ」

神社には他の人もいない。

俺は琴乃ちゃんに言われるがままに一緒に紙きれを木の枝に結びつける。

「……これでいいの？」

「うん。そうだよ、あとは……大人になったらまた一緒にここに来てくれる？」

“えんむすび”のために、俺達は再会をする約束をする。

「大人になったらまた来よう」

「えへへっ。約束だよ、翔お兄ちゃんっ！」

それが琴乃ちゃんとの唯一の約束。
俺が彼女とした大事な約束なんだ。

……。

あの約束から数週間後、俺は母さんが戻って来たので再び家に戻

ることになった。

たった1ヶ月程度、幼い頃に預けられてただけの関係。それ以来、会う事もなく、俺達は10年以上も離れ離れになっていた。

鈴音との記憶ばかりが思い出されていて、俺は琴乃ちゃんの記憶を忘れていた。

これが俺と琴乃ちゃんの過去、大事な俺達だけの思い出。

「思い出した、俺は……琴乃ちゃんと約束をしていたんだ」

過去を思い出した俺は小雨の降る中、あの神社へと向かう。再会してからずっと行っていなかった場所。

だけど、キスをした教会よりも大事な場所があつた場所だ。

「確か、この道をのぼった気がする」

何度か迷いながらも俺はその場所へとたどり着いた。

いつしか降り続いてた雨が大ぶりの雨へと変わっていた。

すっかりと濡れた服の気持ち悪さを我慢しながらも俺はゆっくりと階段を上る。

その先にある神社は管理者もいないような古い小さな神社だった。実際、誰かが手入れをしているようには見えない。

鳥居をくぐった先、朽ち果てた建物だけがある。

夜に来るには少し雰囲気があつて嫌だな。

だけど、この先に琴乃ちゃんがいるはずなんだ。

「約束したんだ。大人になったらもう一度ここにこようって」

彼女との約束は“えんむすび”、あの頃は意味が分からなかった。だが、今なら理解できる。

“縁結び”、琴乃ちゃんは俺とのつながりを求めていた。人生の中でたった1ヶ月の間の出来事だったはずなのに。彼女は10年間も俺の事を想い続け、約束を覚えてくれていた。

「俺って奴は琴乃ちゃん存在を覚えていなくて、拳句の果てに鈴音を琴乃ちゃんだと勘違いしていたのか。最悪だな」

まったく麻由美の言うとおり、俺は薄情者以外の何物でもなかった。

「鈴音は確かに俺の淡い初恋ではあったが、ちゃんと琴乃ちゃんも妹みたいで可愛かった記憶があったはずなのに何で忘れてたんだろ。10年前の事なんて覚えてないのが普通だったのはただの言い訳だよな」

人の記憶はそれほど脆いものなのか。

長いと思える時間の積み重ねも、過ぎ去れば短かったと感じる時間の流れ。

あの頃、俺の中に琴乃ちゃんはただの鈴音の妹でしかなかった。だが、10年の時を経て、俺達の関係は変わったんだ。今の俺達は恋人なのだと強く意識する。

彼女は俺が思いだすのを待ち続けていたんだ。

嘘をついてまで俺の傍にようとしてくれていた。

その嘘は彼女にとってどれだけ辛い思いをさせたのか。

「俺は本当のバカだ。けれど、バカだけでも、俺の気持ちは……」

鳥居を抜けた先、雨に打たれながらも木に背をもたれながら俺を待ち続けていた。

「……翔太、先輩？」

あの頃と変わらない、同じ瞳をして琴乃ちゃんはそこにいた。

「10年ぶりだ。やっと会えたね、琴乃ちゃん」

本当の意味で俺と琴乃ちゃんは再会を果たした。
。

第39章：10年ぶりの再会（前書き）

琴乃視点です。

第39章：10年ぶりの再会

【SIDE：藤原琴乃】

小さな頃、お兄ちゃんみたいに親しく、優しく接してくれた翔太先輩。

たった1ヶ月の出来事が自分にとってはずっと忘れられない思い出になった。

それなのに、先輩はその事を覚えていなくて。

正確に言えば、あの夏の出来事を私の記憶だけを忘れていた。

私は鈴音お姉ちゃんに比べれば影は薄かったから仕方ない。

だけど、先輩は私をお姉ちゃんと勘違いしている事に気づいた。

『覚えてない？俺達、約束しただろ。また会おうって』

『木登りが得意だったよな、琴乃ちゃん』

『この写真の女の子、一体誰なんだろう？』

私は先輩の思い出の中にいなかったという事実にはショックを受けた。

どこにもいない、忘れられた存在。

代わりに先輩の中にいたのはお姉ちゃんが存在だった。

彼女と過ごした日々だけは覚えていて……。

それが悔しくて、私は違うと言えなかった。

先輩が私を勘違いしているのならそれを利用してでも好かれようとした。

幸いにも大抵の思い出は私も共有していて矛盾はほとんどなかった。

いつだって彼らを後ろから見つめていたもの。

鈴音お姉ちゃんの代わり、私は思い出の少女だと自らを偽った。どうせ、いつかはバレる嘘なのに、私は嘘をつき続けてた。

翔太先輩に好きでいて欲しかったから。

私が先輩の思い出の女の子になりたかったから。

先輩の初恋の相手、私じゃなくてお姉ちゃんだと気づいていたのに。

私はずっと思い出の少女になりたくて、それを演じ続けることに最初は感じていたはずの罪悪感を抱かなくなり始めていた。

いつからか、私が先輩にとっての思い出の少女なんだと思いこむようになっていたの。

現実には目を覚まされたのはGWにお姉ちゃんが帰ってくると言うこと。

お母さん経由で私と翔太先輩が付き合ってるのを知られて、帰省中に会わせて欲しいと言われて私はどうしようもなくなった。

嘘をつき続けた私への罰が下ろうとしている。

嘘つきは天罰をくだされる運命なんだ。

大雨が降る中で私は古い神社の大木の下で翔太先輩を待っていた。思わず家からは逃げだしてしまっていた。この場所は先輩と私だけの思い出がある数少ない場所。実はこの神社は老朽化が進んで、別の場所に本殿は移動されている。

夏ごろには解体工事もされて完全に消えてなくなると言われていた。

なので、今、ここにあるのは思い出の残る大木だけだ。

私と先輩が縁結びを誓いあった場所。

先輩は思いだしてくれるだろうか。

騙し続けていた事を怒っているかもしれない。

私は全ての批判を受け入れる覚悟はできていた。

最悪、関係が壊れてしまうと言うことも……。

私は先輩を騙していた事実には違いない。

「……寒い」

まだ5月上旬、さすがに雨に濡れ続けると寒気がする。

けれど、私は物影に隠れることもせずその場に立ちつくしていた。

「もっと、先輩とたくさん思い出を作りたかったなあ」

思い返せば思い返すたびに、後悔の念がわく。

私と先輩が再会してから3週間。

そんな僅かな時間しかまだ経っていない。

それなのに、思い出せば思いだすほどに私は幸せな記憶が蘇る。

たくさんの思い出を先輩は私に与えてくれた。

「先輩も私を愛してくれて、これ以上の幸せないのに……」

今日だって遊園地デートを思う存分に楽しんできた。

私は最後のデートになるかもしれないと、少しハメを外すくらいに明るく振る舞った。

素直に「ごめんなさい」と言えばよかった。

私じゃなくて、先輩が好きだった思い出の少女はお姉ちゃんだって言えばよかった。

「言えなかったのは知られるのが怖かっただけじゃない。私はずっとお姉ちゃんになりたかったんだ。先輩に愛されたかった」

込み上げてくる涙をぬぐおうとするけど、我慢できずに嗚咽が漏れた。

「ぐすつ……うつ……」

震える身体を腕で押さえて誤魔化す。

「先輩に嫌われたく、うあつ……嫌われたくないよお」

先輩が好き、大好き。

あの頃は憧れだった、今は本当に心の奥底から先輩を愛している。泣き疲れかけていた頃、誰かが境内に登ってくる足音が聞こえた。私の心臓がドキツと鼓動がはねる。

翔太先輩が私の前に姿を現す、彼も髪の毛を雨に濡らしていた。

「ここにいたんだね、琴乃ちゃん。ずいぶんと探したよ」

「……翔太先輩」

「俺、ようやく思い出したんだ。俺がずっと琴乃ちゃんだと思い込んでいたのは鈴音だった。逆に鈴音だと思っていたのが琴乃ちゃんだった。バカだよな、そんな勘違いをするなんて。矛盾とかいろいろとあったはずなのに」

先輩を前に私は立ちすくんでしまう。

身動きも、喋る事もできずに彼の言葉を聞く。

「思い出の少女……それは琴乃ちゃんじゃなかったんだ。正直に言う、俺は子供の頃は鈴音の事が好きだったと思う。仲が良くて可

愛くて、一緒にいるのが楽しかった」

先輩の口から聞かされる現実には涙があふれ出す。
我慢しなくちゃいけないのに。

これは私の罰、例えどんなに辛い先輩の言葉を受け入れるって決めたの。

「鈴音の事ばかり気にしていたから、琴乃ちゃんの事は記憶にも薄かった。鈴音の妹、それだけの存在でしかなかったんだ」

「そうでしょうね。先輩はいつだってお姉ちゃんと一緒にで、羨ましくらいに仲がよかったんですよ。どこに行くのも、遊ぶのも、家にいる時も一緒だったんです」

だからこそ、私はお姉ちゃんになりたかった。
私も先輩との思い出があるのに、思い出してもらえなかった事が悔しかった。

「先輩の大切な思い出の中に私がいない事が寂しくて、悔しくて、悲しかった。それゆえに、私は先輩に嘘をつきました。先輩がホントの私を忘れていたし、10年もたっていれば記憶もあやふやです。私は先輩が覚えていない事を利用しました」

例え、偽りだとしても、先輩が私に向けてくれる優しさが幸せだった。

「……琴乃ちゃん」

「翔太先輩。覚えてますか？ここに来てくれたと言うことは少しは思い出してくれたんですね。10年前、この場所で私達が約束を

した事を」

私が約束したのは再会の約束じゃない。

先輩と仲良くしたいと言う些細な願いだった。

縁結びなんて、神様に祈るような小さな願い事……。

「思い出した。俺達は教会で見様見真似のキスをして、ここで縁結びを誓い合った。あの頃は意味も分からなかったけどな」

「……私も本当の意味は知りません。仲良くなれるおまじない程度にしか理解できていませんでした。それでも、その2つの思い出だけは私と先輩だけの思い出なんです。それ以外は全部、先輩にとっではお姉ちゃんとの思い出です」

ふう、と深呼吸をひとつして私は先輩の瞳を見つめる。

「今まで嘘をつき続けてごめんなさい。騙した事を責めたい先輩の気持ちは理解しています。思い出の少女を自分のために演じてきたこと。どんなに謝っても許される事じゃありませんけれど、私は……」

謝罪する私はぎゅっと先輩に抱きしめられていた。

「……しょ、翔太先輩？」

思いもよらない展開に私は動揺するしかない。

「ごめんな、そんな嘘をつかせてしまって。琴乃ちゃん、久しぶり。10年ぶりに再会できたね」

「あつ……はいつ。あつ、ああつ……ううつ……あああ……」

やっと出会えた……本当の私と先輩。

抑えきれない程の涙が瞳から溢れ出てくる。

頬を伝う涙、それは悲しい涙じゃなくて嬉しい時に流れる涙だったの。

先輩がようやく私を認めてくれた、それが何よりも嬉しかったから。

「今、俺達はようやく再会できた。本当のキミと、再会できたんだ。だから、ここから始めないか？俺と琴乃ちゃんの間を、初めからやり直さないか。思い出の少女とか関係なくて、藤原琴乃という女の子として……」

泣き崩れる私を先輩は抱きしめながら私に想いを伝えてくる。

「俺は琴乃ちゃんが好きだよ。大好きで、本当に大事にしたい女の子だと思っている」

許されることも、好きだと言われるも思っていなかった。

ここで私達の間が終わってしまうのだとばかり、思っていたのに。

先輩の身体の温もりが伝わってくる。

顔を見上げた私には優しい微笑みを向けてくれていた。

「何度でも言うよ、“琴乃”。俺と付き合っただけいいよな？」

「……は、はい。私でよければ、先輩の恋人になりたいです」

涙をあふれさせながらも私は頷いて返事をする。

「よかった。断られたらどうしようって思っていたんだ」

「それは……私のセリフです。先輩に嫌われたくなくて、それなのに、先輩は……」

どうしてこんなにも優しいんだろう。

優しすぎて私は彼にどんな風に接すればいいか分からなくなる。

「琴乃と過ごしたこの3週間、俺がどれだけキミに惚れているか分かってないな？恋人としてこれだけ愛してるのに」

「翔太先輩……」

私達は10年前に会っていたけれど、それはただのいい思い出。

この10年後の再会から全てが始まり、私たちは同じ時間を歩んでいく。

「琴乃が好きだよ、誰よりも好きだから俺の恋人でいて欲しいんだ」

先輩の腕の中に抱きしめられながらしばらくの間、優しい雨を浴び続ける。

縁結びの神様はもうここにもいないかもしれないけど、報告だけはしておきたい。

真っ暗な夜の神社、私達以外、誰もいないその場所で私は口づけをかわす。

「愛しています、先輩」

そして、本当の私達の恋人関係がここから始まったの。

第39章：10年ぶりの再会（後書き）

次回からクライマックスの新展開です。

第40章：父親は誰なのか？

【SIDE：井上翔太】

鈴音との再会に伴う“琴乃”の失踪事件は無事に解決をした。
琴乃とは本当の意味での10年ぶりの再会を果たし、恋人としての新しい関係を築くことができたのだ。
彼女がついた嘘。

いや、正確に言うならば、琴乃につかせてしまった嘘。
俺はその嘘が悪いことだとは思わない。
誰もが嘘をついてしまうことはある。
何かを誤魔化す時、知られたくない事を知らせる時。
嘘には二つの嘘がある。

悪意を抱き人を騙すための嘘。
もうひとつは優しい嘘だ。

相手を想うがゆえについた嘘は悩み、苦しむこともある。
琴乃はそうだった。

自分のついた嘘にこの数週間も苦しみ続けてきたのだ。
その苦しみから解放された彼女。

今は俺の恋人して明るい表情を見せてくれている。

琴乃が愛おしい、大切な恋人だと俺は幸せに満ちていた。

鈴音とも楽しく過ごせたゴールデンウィークが終わり、6月に入ろうとしていた。

そんな俺にある出来事が起きようとしていた。
己の出生に関わる重要なことが……。

「しよ、翔太っ、来てっ!？」

夜になって俺が自室でのんびりしているとリビングから母さんの悲鳴が聞こえる。

「何だよ、母さん。何か変なモノでもいたのか？幽霊なら間に合ってるぞ」

「違うわよ、あれを見なさい」

彼女が指差す先には大きな蜘蛛が壁にへばりついている。普通の家に住む蜘蛛ではなく、足が長い気持ち悪い蜘蛛だ。

「あーっ。母さんって蜘蛛が苦手だっけ？黒いゴキは大丈夫なくせに」

「うるさいっ。いいから処理しなさいっ」

「はいはい。蜘蛛ぐらいで驚くなよ。びっくりするだろ」

俺はその蜘蛛には家の外へと退散してもらうことにした。ティッシュで掴んで、窓から放り投げて任務終了。

「はう……」

ぐったりとする母さんに「虫くらいでびびらなくても」と呆れていた。

「私、蜘蛛だけはダメなのよ。小さな頃に実家の部屋の物置で大量に溢れ出た蜘蛛の子供達を見てから気持ち悪くてトラウマなの。何度もアンタにも言ったでしょうが。ああ、気持ち悪い……」

幼女時代にそんなグロい物を見れば当然だろう。

「つて、あれ？母さん、何で？今日は夜勤じゃなかったのか？」

確か看護師の都合が悪くて連続で夜勤が続くと電話があつたはず。

「その予定だつただけど、代わりに別の人が入ってくれて解放されたの」

「よかったじゃん。今から風呂をいれる？」

「うん。任せるわ。あつ、夕食はどうするつもりだったの？」

「またどこかへ飯でも食べに行こうかなって思ってた。ついでに母さんの弁当でも買ってこようか？疲れているんだろう？」

仮眠ぐらいは取ってるようだが、疲れは目に見えている。

「そうねえ。そうしようかな」

「OK。それじゃ、風呂をいれてくる」

俺はお風呂をいれてくると、リビングで母さんが携帯電話を片手に硬直していた。

「風呂いれてきたけど……どうしたんだ？」

「……お弁当を買うのは中止よ。これから夕食に出かけることになったわ」

彼女は表情を強張らせながら呟く。

「え？ 外食？ 珍しいなあ、母さんが外で飯を食べようなんて」

「……そうね。お風呂を出るまで待っていて」

言葉短く告げると彼女は風呂場へと入って行った。

母さんの様子が変だったのは気のせいだろうか？

風呂からあがってきた母さんはすぐに出かける支度をしると告げた。

そんなこんなで外へと出ると、そこには前に見たことのある車が止まっている。

「これって……？」

「いいから黙って。翔太、何も余計なことはいわないように」

母さんの様子がいつもとおかしいのに気付いていた。

何て言うか、焦りと書動揺とかを必死に隠しているような。

その車に近づくと中から出てきたのは母さんの勤める病院の院長さんである佐々木さんだった。

「佐々木さん？ こんばんは、ご無沙汰してます」

「ああ、翔太君。こんばんは。葉月も夜勤明けで大変だろう？」

「……別に。慣れているもの。それで私達を食事に誘うなんてどう
いうつもり？」

佐々木さんの誘いだっただのか、なるほど外食と言う選択肢の理由
が分かった。

母さんと佐々木さんはお互いに目で会話をしている。

「まあ、理由なんていいじゃないか。食事は皆で楽しく取りたいも
のだろう？」

「何をバカなことを……」

「……いろいろと葉月とも話をしたくてね。翔太君、今日は悪いが
冬美の面倒を見ていてあげてくれないかな？」

「ええ、分かりました」

どうやら大人同士で話があるようだ。

俺は車の後ろの席に座っていた冬美ちゃんに声をかける。

「こんばんは、お兄ちゃんっ」

「うん。冬美ちゃんは今日も可愛いねえ。今日は赤色と白色のリボ
ンなんだ？よく似合ってるよ」

「ありがとっ。えへへっ」

俺が彼女の頭を撫でてやると嬉しそうに微笑む。
それを見ていた母さんが思わずつぶやいた言葉。

「ロリコン？……翔太ってまさかそういう趣味なの？我が息子としてそれはないわ」

「それは誤解だあ！？」

誰もロリ属性などない、冬美ちゃんが可愛いのは認めるけどね。親に疑惑の目を向けられることが寂しい。

しばらくして、以前に佐々木さんに連れてきてもらったレストランに到着する。

今回もあの極上のステーキを食べさせてもらえるようだ。

「お兄ちゃん、フォークとナイフの使い方は覚えた？」

「おうよ。冬美ちゃんに教えてもらったおかげでばっちりだ」

俺のセリフに母さんは頭を抱えて俺に言うのだ。

「ごめん、翔太。私、貴方の育て方を少し間違えていたわ。フォークもナイフも使えない子だったなんて。なんて不憫なの」

「まさか、母親に同情された！？」

ナイフとフォークの使い方が分からないだけでダメな子ですか！？？

恥ずかしさはあるが、俺はそれを恥とは思わない。

うちの家庭事情を思えばそんなお店に行くことなんてないわけで。

「ファミレスくらい使えるようにこれからはお金もあげるから」

「やめて、変な同情しないで！？これ以上、俺を可哀想な子扱いしないで！？」

「……だって、我が子としてあまりにも可哀想なんだもの」

ちなみにファミレスとかのナイフとフォークくらい使ったことはある。

こういう高級店のいくつもナイフとフォークがあるようなお店に来たのが初めてで戸惑っただけで、決して、それすら使えない程可哀そうな子ではない、と思う……そう思いたい。

「私達を夕食に誘うなんて、どういう意図を持ってるのかしら？」

食事をしながら、母さんは佐々木さんに視線を向ける。

「キミともじつくりと話して見たい事があってね。食事の後でいいから、まずは食事を楽しんでくれ。冬美、どうした？」

冬美ちゃんがジッと母さんの方を見つめていた。

「あのね、パパがすごく楽しそうだなって思ったの」

「……そうだね。葉月と話すのは楽しいよ」

「な、何を言って……」

「母さん、何か照れてる？」

母さんが戸惑いながら、俺に「こっち見るな」と睨んできた。
ぐすつ……俺だけ扱い悪くありませんか？
人生2度目の高級ステーキの味に大満足の俺。
そのまま楽しい雰囲気で食事を続けていた。

「ふたりだけで話があるんだ」

食後に佐々木さんに言われてデザートを食べ終わった冬美ちゃん
を連れて外へと出る。

彼女の小さな手を繋いで街をしばらく歩いてみることにする。

「お兄ちゃんのママと私のパパって仲がいいの？」

「そう、なのかな？俺もよく分からないや」

佐々木さんと母さんの仲はいいのか、どうなのか。

過去を含めて俺はよく知らないのである。

古い友人と言っただけあって、親しそうではあるけども。

「1時間ほど時間をくれと言われたから、冬美ちゃんはどこかに行
きたい所ある？」

「うーん。そうだ。ゲームセンターに行きたいっ」

「おっ、ゲーセンか。冬美ちゃんでもそう言う所に行きたいと思

うんだ？」

お金持ちの娘なのに庶民の娯楽、ゲーセンに行きたいとは意外だ。まあ、子供だからセレブちっくなどところに行きたいなど言わないだろう。

「学校の友達が行って楽しかったって言ってたの。パパはダメって言って連れて行ってくれなくて、私は行った事がないから連れて行ってくれる、お兄ちゃん？」

「おう。そう言う事なら任せてくれ」

俺は彼女をゲームセンターへと連れて行く。

賑わうゲーセン内でUFOキャッチャーでぬいぐるみを何個か取ってあげたり、ふたりでゲームをしてしばらくの間、楽しむ。

「すごく可愛いのに、このぬいぐるみ。ありがとう、お兄ちゃん」

ぬいぐるみを抱きしめる冬美ちゃん、喜んでもらえてこちらも楽しい。

……それに、小学生の子と一緒にプリクラを撮る経験なんてそうあるものじゃない。

これは俺の心の中にしまいこんでおくことにしよう。
さもなくば俺にロリ疑惑が……それだけは避けておきたい。

「次はあのゲームがしたいのっ。お兄ちゃんっ」

「よしっ、次は俺と勝負をしようか？」

「うんっ。えへへっ。お兄ちゃんに勝つよーっ」

彼女の笑顔に和みながら、俺達は次々とゲームで遊んで行く。
その間、レストランであのふたりが何を話していたのか。
それが俺の出生の秘密にも関わることなんて思いもししていなかったんだ。

第41章：彼の母として

【SIDE：井上葉月】

佐々木信彦、私が唯一愛した男の人。

今は病院の院長をしているけれども、私が交際していた時はまだ新人の医者だった。

別れて17年が経っても、年に数回は会っていた。

彼が結婚して子供が出来たりして、私と会う回数も徐々に減りつつあった。

私たちの子供の翔太のことは絶対に伝える事は出来なかった。

あの日、私が決めた事だから彼が幸せならばそれでいいと思ったの。

彼の負担にならないように、とそれだけを考えてた。

嘘だ、私はずっと翔太が生まれてから彼に嫌われるのが怖かった。お互いのために、と言いつつしながら距離を取り続ける。

それなのに、去年くらいから彼と会う頻度が高くなった。

私はそれを別に嫌と思わないし、望んではいる事だけでも、彼も結婚している身だ。

相手の奥さんに下手な勘違いはされたくない。

私と翔太、彼に夕食を招待された。

その理由がよく分からずにいたの。

何回か食事に連れて行ってもらったことのあるホテルの最上階にあるレストラン。

食事を終えた私たちは二人っきりになって話をしていた。

翔太と冬美ちゃんはいしばらく席をはずしてもらっている。

「どういいうつもりの、信彦さん？」

「……ん？ここの料理は気に入らなかったか？」

「そういうわけじゃない。翔太を連れて食事になんて。貴方の考え
ている事が分からない。貴方は結婚しているんでしょう」

彼が何を考えて行動しているのか本気で分からない。
こんなことしても、意味なんてないのに。

「言ってなかったが、妻とは3年前にすでに離婚している。今は冬
美と二人で暮らしているんだよ」

「えっ！？そんなの私は聞いていないわ」

彼の口から聞かされた思いもよらない一言に私は動揺する。
信彦さんがすでに離婚していたなんて病院でも噂を聞いてない。

「3年も前だから、今さら噂にはならないって」

「何で黙っていたの？」

「キミも息子がいるのはずっと黙っていたじゃないか」

「それは、その……そうだけど」

お互いに秘密を隠し続けてた。

というより、こんな風に自分たちの事を話すのは久しぶりだもの。

「……黙っていたのは悪気があつてのことじゃない。キミの態度を
確かめたかった。あの17年前の日に、別れてからも友人として接
してきたが、諦めきれなくてな。葉月と再婚を含めて距離を詰めた

かったのが僕の本音だ」

「さ、再婚！？私と……？」

「そのつもりで、キミを今の病院に呼び寄せたんだ。キミは来てくれた、その事に僕は勝手に期待していたんだ」

今回の事にそんな期待がなかったとは言えない。

わざわざ彼が誘ってくれたことに期待したのは事実。

彼が結婚しているので考えないようにしていたのに、まさか離婚していたなんて……。

「キミだけなら僕が望めばついてきてくれると思っていた。しかし、翔太君がいると言われて、僕は驚いたよ。そして、17年前の事にも納得が言った。キミがなぜ、僕の前から去る事を選んだのか」

「……」

私は黙り込んでしまう。

翔太が彼との子供だと言う事を伝える事はできない。

彼は落ち着いてコーヒーを飲みながら、

「長い付き合いだと言うのに、僕は何も知らなかった。あの時、既にキミが身籠っていたなんて。その後、僕も病院を離れてしまったから全然知らなかった」

「……やめましょう、信彦さん。そんな話はしたくない」

「正直に話してくれ。翔太君は僕と葉月の子供で間違いがないんだな？」

私の沈黙に彼は肯定と受け取ったらしい。

翔太を一人で育ててきた事だけは知られなくなかった。

「そうか。葉月はなぜ僕に相談しなかった？僕が信用できなかったからか」

「違う、そんなことじゃないの」

「ならば、どうして？確かにあの頃はまだ新人で生活も苦しかったが、それでも一人の子供の父親としての責任は果たすつもりだった。葉月との関係だって、あの時に告げた結婚の意思を持ったものだった」

そう、彼は悪くない。

結婚の話も出ていたし、私はただそれに頷けばよかった。

できなかったのは彼の未来と私の弱さを考えてしまったせいだ。

信彦さんは真剣な様子で私を見つめている。

もう誤魔化せない、嘘は重ねられない。

「そうよ。あの子は貴方との子供、私達が交際してた時に出来た子供なの」

「……僕に相談しなかった理由は？真面目なキミのことだ。何かあったんだろう？」

「子供が出来た時に色々と考えたわ。どうするのが一番いいのか。貴方に相談しようとした、けれども、信彦さんは他病院へ行くことが決まり、順調に出世していく事も分かっていた。私と結婚すれば、その道に影響が出るのは目に見えていたわ」

今でこそ院長と言う立場だけでも、そう簡単になれたものじゃない。

いくら自分の一族の病院だとしても、彼は周りを認めさせるのに時間はかかった。

彼の努力が報われた成果、それが今の彼の立場なの。

「私は貴方に嫌われなくなかった。だから、逃げて話せなかった。子供を嫌われたらどうしようって本気で悩んで、何も言えなかった。だから、私たちが身を引くしかないって」

レストランだと言うのに、私は人目も気にせずに彼に想いをぶつける。

「結婚のことも、立場作りのための結婚だと以前に貴方から聞いた。それを聞いた時に私は間違いないじゃなかったって思えたの。私みたいなただの看護師じゃなくて、立場のある人と結婚するのが貴方にとって正しい道なんだって」

「……今の立場に上り詰める前に子供が出来たと分かっていたら、確かに影響があったかもしれない。だが、キミは僕の考えを勘違いしている。僕は誰かの幸せを踏みつけてまで出世して、偉くなりたかったわけじゃない」

それは１７年前に夢を語っていた彼の今。

「キミとの幸せを考えた事がなかったと本気で思うのか？あの時に告白した想いは遊びでもなければ、適当でもない。キミだからこそ、僕の傍にいて欲しかった。キミ一人に負担を押し付けるつもりなんてなかったんだ」

「……私は、今も自分のした事は間違いじゃないって信じてる。これでよかったのよ。貴方はちゃんと夢を叶えることができたもの。無駄じゃなかったって思えるわ」

「その夢のためにキミと翔太君を犠牲にした僕の立場はどうなる？彼の出生を今まで知らず、何も知らないでたことは？」

「翔太はある程度受け入れてくれている。お願い、あの子には貴方の事を話さないで」

「自分の子供が生まれた事も知らずにいた僕には父親の資格がないと？」

そういうことじゃない。

これ以上、翔太を巻き込んで動揺させたくないの。

「僕はキミの本当の気持ちを知らなかった。そこまで自分を追いこんでいた事も。今の僕には立場があり、冬美と言う子供もいる。違う未来を歩んでしまっている。そんな僕をキミたちは責めるかい？」

「責めるはずなどない。私が望んだ事だもの。翔太には辛い想いをさせたけども、私のしたことは間違いじゃない」

私には信彦さんの未来が大事だった。

彼の夢のために、それは言い訳だとしても私の覚悟でもあった。

「……17年だ。本当に長い時間だけでも、過去は当然ながら取り戻す事なんてできない。だからこそ、すべてを“今さら”で終わらせるには早い。葉月、僕の今の気持ちを伝えよう。僕は今もキ

ミを愛している」

「何で、そんなことを……？」

私達が過ごしてきた時間、17年と言う“時の刻み”。

「結婚して欲しい。17年も時間は経ってしまったが、僕もキミと人生を歩みたい。今もその気持ちは変わらない。やり直したいんだ。翔太君の事も、責任を取りたい。葉月、キミをひとりにしておきたい」

……この歳になってまだプロポーズされるとは思ってもいなくて彼の言葉に嬉しさは感じて、私は即座に言葉は返せなかった。

「翔太は、いえ……少しだけ考えさせて」

私はそう答えるに精一杯だった。

「いい答えを期待しているよ。僕も男だからさ。こんな年齢になつてしまったが、まだ人生は長い。キミと一緒にならば楽しい人生を過ごせると確信している」

「……信彦さん。貴方は私を許してくれるの？」

「それは僕のセリフだろう。キミたちが僕を許し、認めてくれるかそれだけなんだ。僕も一人の子の親としての責任は果たしたい。彼の父親だと名乗る資格を与えて欲しいんだよ」

すべての過去の過ちは私に原因がある。

あの時、信彦さんに嫌われ、捨てられるのが嫌で決断したこと。

今さら、翔太は認めてくれるだろうか。

私の気持ちは揺れ動き、今、信彦さんの方に傾こうとしている。

翔太はきつと私の幸せを認め、応援してくれるかもしれない。

だけど、１７年も苦しめてしまったことに対する罪悪感が消えるわけじゃない。

私が信彦さんから離れたのは自分の意思。

けれども、あの子には私のエゴで普通じゃない家庭を過ごさせてしまった。

翔太は決して寂しいと口にした事はないが、小さな頃から私も留守がちで寂しくないわけがなかったはずなんだ。

私自身、両親との仲が悪くて幼い頃からとても辛かった。

それと同じ事を結果として彼にしまった事は、母親としては最低だと自覚している。

ここで私だけが幸せを得てしまう現実はあまりにもあの子の気持ちを無視している。

どうすればいいの、私は……。

とても長い時間を経て再び動き出した運命の歯車は、私をどう導くのか。

第42章：繋げる心

【SIDE：井上翔太】

俺には父親の記憶は一切ない。

生まれてからずっと母さんとの二人暮らし。

父親と言う存在がどういうものなのかもよく分からない。

けれど、俺は誰が俺の父親なのかは気になっていた。

母さんが俺に教えてくれたのは俺の父親は立場があり、別の家族を持ち、俺は認知されていないと言う事実のみ。

一度でもいい、どんな人が会ってみたい。

父親と話をしてみたいんだ。

相手がどう思つかは分からないけども、俺はそうしたい。

冬美ちゃんと遊んで、レストランに戻り、そのまま家に帰るはずだった。

けれど、母さんだけが家の前に降りて、俺は佐々木さんの家に招待されることになった。

「大事な話があったんだ」

佐々木さんは俺にそう言って、母さんもそれを了承したらしい。

彼の家は金持ちが多く暮らすエリア。

同じ市でもこの辺りは一度も来た事がない。

家の中かなり広く、俺は素直に驚いていた。

応接間の方に通されると、緊張しながらも椅子に座る。

「待たせてすまなかったね。冬美を寝かしつけてきた」

「いえ、かまいません」

「冬美がぬいぐるみを何個も翔太君に取ってもらったと喜んでいたよ。今日は抱いて眠るそうだ。あの子の面倒を見てくれて、ありがとう」

「俺も楽しかったですよ。妹みたいで可愛かったです」

俺の言葉に彼は微笑で答える。

俺は本題を尋ねるために彼に問う。

「……それで、俺に話があると言うのはどういうことでしょうか？」

「以前に話をしていた件だ。葉月の話だよ、キミの父親が誰かと言う事だ」

「母さんから名前が聞けたんですか!？」

俺は向かい合う佐々木さんに尋ねた。

彼は何とも言えない表情を浮かべながら言うんだ。

「僕はキミに嘘をついてた。その事をまず謝らせて欲しい。すまない」

「えっと、佐々木さん。何のことですか……?」

「僕と葉月の関係だ。僕は葉月と友人だと言っていたが、それは違

う。当時、彼女と交際していたのは僕なんだ。僕が彼女の恋人だった」

佐々木さんが恋人だった相手？

彼は神妙な面持ちで俺に真つすぐな視線を向ける。

「これから僕の知る限りの真実を話す。聞いてくれるかい」

「……はい」

「18年前の事だ。僕と葉月は互いに惹かれて、交際を始めた。約1年間ほどの交際で僕は結婚も考えていた。しかし、僕が別の病院に移ることになり、彼女にその話をしたら別れを切り出されてしまった」

俺は黙り込んで彼の話を聞き続ける。

母さんが何で彼と別れたのか。

愛している相手と別れるには、理由として離れてしまう事は理解できる。

「僕は諦めたくはなかったが、仕方なく別れることにして彼女と離れた。それから数年後に僕はある私立病院の理事長の娘と結婚した。やがて、冬美が生まれて僕は家族を持った。順調に出世もし、僕は対外的にも認められて、去年、ようやく院長にまでなれた」

医者としても人間としても、人生の成功者と言っていいたいだろう。いくら実家が大病院の家系とはいえ、院長になるのは大変そう
だ。

「3年前、不仲となった妻と離婚した。その後、僕は破局後も友人

としての関係を続けていた葉月と1年ほど前から会う機会が増えてね。僕は再び彼女に対して……愛情を抱くようになったんだ」

「それで病院の方に母さんを誘ったんですね。俺の母さんの事が好きなんですか？」

「ああ。愛しているよ。だが、葉月は自分の事は一切話さなかった。今、誰と暮らしているのか、結婚はしているのか。そういう自分に関する事は一切だ」

母さんが黙りつづけていた理由。

佐々木さんも俺と実際に出会うまで子供がいると知らなかったかな。

「今日、すべての真実を彼女から聞いた。なぜ、彼女が僕の元を去ったのか。その理由は……キミが僕の息子である、という事だそうだ」

「佐々木さんが俺の父親……？」

話の流れ的に容易に想像はついてたが、本当なのか？

俺は今、自分の会いたいと望んでいた父親と話をしているのか？

「……葉月は僕が院長になるために身を引いたと言った。あの頃、子供が出来て葉月と結婚していれば、今の立場はなかったかもしれない。それでも僕は、言い訳になるが、本当に葉月を愛して結婚したかった。地位よりも、葉月を、キミを選びたかった」

「母さんが黙っていた、それで俺の事は佐々木さんも知らなかったんですね」

「17年間、僕は翔太君の存在を知らないままに過ごしてきた。これは罪だ、ひとりのこの親としての最低限の責務も果たせず、存在すら知らずにいたなんて」

母さんが言っていた通りだったんだ。

相手には立場も別の家族もあり、俺は隠し子として認知されていない。

佐々木さんは俺に頭を下げた謝罪をする。

「すまなかった、翔太君。僕がキミの父親なんだ。キミと出会った
で僕は自分の子供は冬美だけだと思っていた。自分の子供が別に
いるなんて思いもしていなかった」

「……知らなかったことならば、仕方がないんじゃないですか？」

「知らないと言えば済む話ではない。僕はキミに対して、父親としての……」

俺は父親と会えばいろいろと話がしたかった。

憎んでもいない相手を責めるつもりはない。

ただ、親子として認めてもらいたくて、話をしてみたかったんだ。

「頭をあげてください。前にも言いましたよね。俺は父親が誰であ
ろうと責めるつもりはありません。佐々木さん、俺は母さんとの二
人暮らしでも不幸せだとか、恨みを抱い事はないんですよ。父親が
いない、確かに小学生くらいの時は多少は嫌な思い出があります。
周りの友人達には当たり前前の用にいる存在でしたから」

「……翔太君」

「だけど、母さんは俺を大切に育ててくれました。母親として、自分の時間を削り遊んでくれたり、一生懸命に働いてくれたり。そんな生活に不満はないんですよ」

母さんにも事情があつたのだろう。

彼から身を引き、自分ひとりで俺を生み育てると決めた覚悟。それがどんなにも大変で辛いことだったのか。

俺には想像しかできないけども、精神的に本当にしんどいことだったはずだ。

「佐々木さんは母さんを愛していると言いました。結婚するつもりはあるんですか？」

「……僕は数年前から結婚したいと願っていた。先ほど、僕は彼女に正式にプロポーズをした。結婚して欲しい、と」

「そうなんですか。母さんは了承したんですか？」

「すぐに返事はもらえていない。キミの事もあるだろう。だからこそ、僕は葉月に頼んで、翔太君と話をする機会を作ってもらったんだ」

なるほど、母さんが何も言わずに俺と佐々木さんを引き合わせたわけか。

俺の父親だと、彼は勇気を持ってカミングアウトしてくれた。

彼は彼なりに考えて、今、俺の目の前にいる。

「佐々木さん。俺に批判される事、覚悟してました？」

「僕には父親である資格がない。キミや葉月の事なんて思いもせず、別の家族を持ち、それなりに幸せな家庭を築いていた。責められて憎まれて当然だろう」

「……当然、と言われても困るんですよね。俺も貴方を知らなかった。憎いと思った事はない、俺は俺で、本当に幸せな家庭で育ったと思っています」

俺は彼にそつと手を差し出した。

「だけど、俺は父親である貴方の事をもっと知りたい、話したいと思っています。母さんと結婚したいと言うのなら、それに俺も賛成しますよ。彼女は幸せになるべきだ」

「……キミは優しいな。僕も翔太君の事を知りたいと思うよ。こんな僕でも父親だと認めてくれると言うのかい？」

「誰だって、最初があつて当然なんです。こうして出会えた事に意味があると思いませんか、“父さん”。今さらだから、なんて言わずに、ここから始めたって遅くはないと俺は思いますよ」

俺が生まれて初めて、誰かを父さんと呼んだ。

人生において初めてだ。

彼はしばらく言葉を詰まらせていたが、やがて「ありがとう」と俺に言った。

それから俺達はいろいろな事を話した。母さんのこと、お互いの話や、俺は琴乃と言う恋人がいること。些細なことでもいい、話をして少しでも理解しあえるようにする。まずはそこから始めて行こうと思ったんだ。

夜も遅くなった頃に、俺は彼の車で家まで送ってもらった。

「父さん。今日は話ができて楽しかったです」

「僕もだよ、翔太君。キミに認めてもらえた事が嬉しい」

未だに敬語口調なのは互いの距離だが、これは仕方ない。
呼び方と関係だけは変わったのだ。

他はゆっくりと変えていけばいい。

俺達は……血の繋がりがあつた家族なのだから。

「冬美ちゃんとも話をさせてください。彼女も、異母とはいえ兄妹ですから」

「ああ、ぜひそうしてあげてくれ。それでは、また。おやすみ」

「はい。おやすみなさい。また、ゆっくりと話をしましょう」

彼の車が去るのを俺は眺めながらどこか不思議な気持ちだった。

あの人が俺の父親だと言われて、すんなりと心で受け止める事ができた。

それは自分ではある意味の驚きではあつたんだ。

長い時間がかかったが、俺と父さんの関係は何とかなった。

あとは母さんの方だな。

あの人は何気に俺の事をかなり気にしてくれている。

プロポーズされたとき、内心はずっと思い抱いてた感情で即答しなかったはずだ。

俺は十分に幸せに生きている。

ならばこそ、母さんには本当の意味で幸せになつてもらいたい。

俺は家に帰ると、母さんは眠りもせず待っていた。

彼女がテーブルに広げて眺めているのはアルバム。

けれど、俺が見たことない色のアルバムで、それは母さんが隠し続けてきた父さんとの思い出の写真の数々をのせているものだった。

「おかえりなさい、翔太。信彦さんと話はできた？」

「話は全て聞いたよ、彼が俺の父さんだってこともね。母さん、話を聞いてくれる？」

俺が母さんに出来ること。

17年という時間に囚われた彼女の心を解放させられるのは俺だけなんだ。

第43章：愛の形

【SIDE：井上翔太】

リビングで向き合う形、こうして母さんと話をするのはいつ以来だ。

確か、俺の父親の話をした時以来かもしれない。

「……まずは確認なんだけどさ。本当に俺の父さんは佐々木さんなんだよな？」

「ええ、そうよ。信彦さんが貴方の父親。彼にはこの事を一切、話していなかったの。信彦さんには今日、初めて真実を告げたわ。だから、信彦さんは悪くない。悪いのは全部、私なのよ」

母さんと父さんの関係。

何年もの間、嘘をつき続けてきた。

彼女の心境を思うと、何とも言えない。

「父さんが別の相手と結婚して、それでよかったわけ？」

「それがあの人の夢を叶えるためなら、いいと思ったわ。私と付き合うよりも、将来性や立場のある女性と結婚する方がいい。私はそう思って、彼と別れる事を選んだの。もちろん、翔太と暮らしていくことに不安がなかったわけじゃない」

色々悩んだ結果なんだろうな。

そんなのは分かり切っている。

苦しみながらも選んだ母さんの決意。

「そうして、父さんの事ばかり考えて、母さんは幸せだったのか？」

「それは……」

「好きな人を諦めて、距離も遠ざけて、それで父さんも幸せになれたのか？」

俺はあえてキツイ言い方をする。

母さんは顔を俯かせながら俺に言う。

「……私はそう信じているわ。私の行動に間違いはなかった。翔太には本当に悪い事をしたと思っている。片親のせいで苦労をかけたことも、寂しい思いをさせたことも」

「父さんだけが幸せになって、それでよかったんだ？」

「翔太に対しては申し訳なく思ってる。私が辛いのは私の責任だもの。けれど、そんなエゴで貴方を巻き込み続けてきたのは本当に悪かったわ」

初めて俺の父の事を語って解きと同じく母さんは俺に謝罪をする。何かがズレている。

俺はそう感じざるを得なかった。

そして、俺はようやく気づくんだ。

「そうか。そういうことか……」

「……翔太？」

「結局、母さんの中には最初から俺と父さん、母さんの3人で家族になると言う選択はなかったのか？母さん達が結婚して一緒になると言うビジョンは……」

「……っ……！？」

母さんは何も言えなくなり、黙り込んでしまう。

母さんの中にある、父さんと一緒に生きていきたいって本音。なぜ、それを彼女は表に出さない、出せない？

「彼の立場とか、そんなことよりも大事なのは母さんが幸せになりたいって気持ちじゃないのか？何で最初から諦めているんだよ。何で、父さんと向き合おうとしないんだよ。それってただ、一方的に愛を押し付けてるだけじゃないか」

「それしかなかった。そうすることしか、私は」

「母さんは自分勝手なんだよっ」

責めるつもりはなかったのに、俺は声を荒げてしまう。

俺の言葉に彼女はハツとする。

何で、母さんは平気なフリをするんだよ。

こんなにも長い間、ひとりでいるんだよ。

「母さんの言う父さんの幸せは父さんが望んだ事なのか？」

「……あっ……」

唇をかみしめる彼女、それでも俺は言わなくちゃいけない。

「父さんの夢のために。言葉で言えば綺麗だけどさ、それはただ母さんがそうして欲しいと望む未来を彼に押しつけただけだ。父さんは俺に言っていたよ。１７年前、出来る事なら、母さんと一緒になりたかった、と」

そうしたい、ああしたい、そうしなければいけない、それがいい。彼女の想いは“愛の形”と言う名の“エゴ”でしかない。

その“結果”は誰も幸せになれていない。

「父さんはこうも言っていた。俺の事があるから結婚の話だつて受け入れてくれない。今もまだ母さんが彼を拒み続ける理由なんてあるのか？」

「翔太のためよ。私だけが幸せになったら、翔太はどうするのよ。貴方に与え続けてしまった苦痛はとりかえしがつかない」

「俺の事を言い訳にするなよっ！まだ逃げるのか？母さんが俺を育ててくれたのは感謝している。苦労ばかりしてきたはずだ。そんな現実を受け入れてる。母さんが向き合わなきゃいけないのは父さんだろうがっ！」

「子供の事を思わない母親がどこにいるっていうのよ。子供を産むって事は責任なのっ。親である私にはアンタを育てる責任があるの。私が信彦さんの事を優先して考えてしまったら……しまったら……」

うなだれる母さんを俺は不器用な人だと感じていた。

自分を無理やり抑え込んでいる感情があるはずなのに。

「もっと素直になれよ、母さん。自分に嘘をついて、他人に嘘をついて、そうして作られた今の関係で本当にいいのか？」

俺は琴乃との事を彼女に話すことにした。

彼女との思い出も、今回の事によく似ているんだ。

「俺の話だけどさ。琴乃は俺に嘘をついていた。俺があの子の事を忘れてしまったから、鈴音だと勘違いしているのを利用した。そうして、付き合いはじめて、彼女は嘘をつき続けた。その事を苦悩して、それでも俺と一緒にいたいと言う気持ち優先した」

彼女を思いだせずに嘘をつかせ続けてしまった俺が悪い。

あの子を苦しませていたのは嘘をついたせいで生まれた罪悪感。

「琴乃は悪くない。嘘をつかせたのは俺のためだ、俺さえしつかりしていれば、あんな事をさせることもなかったのに。俺はそれが悔しいんだよ。好きな子を悲しませるのが自分のせいだってのはさ」

「……琴乃ちゃんと初めて会った時に、翔太への対応が違うように見たのはそのせいだったのね。嘘つきの恋、か」

「嘘をつくのは簡単だよ。嘘をつけば、自分を守れる。だけどさ、嘘をついたり、誤魔化したりして逃げるという選択をしても、幸せにはなれない。逃げてばかりじゃダメなんだ」

琴乃にそんな無理をさせてしまった俺は自分を恥じた。

どうして、俺に素直に話してくれなかったんだって思った。

彼女一人を苦しめるつもりなんて俺にはなかったのに。

それは奇しくも、俺の父さんと同じ気持ちだったに違いない。

「俺と彼女の問題なんだ。真実を知りたいと思うのが当然だろう。父さんもそうだ。俺の事を知らず、自分のために母さんに身を引か

せてしまった。その事を悔いているはずなんだよ」

嘘をついても、結局、いつかは嘘がバレる。

嘘は逃げだ、逃げてても何も解決などしない。

「もう逃げずに父さんと向き合って欲しい。俺が望むのはそれだけだ。俺は母さんと暮らしてきて幸せだったよ。俺は父さんも母さんも恨んじやいない、これから先、一緒に暮らせるようになればそれでいいと思うんだ」

「今さら、そんな都合のいいことなんて……」

「今さら？逃げるのをやめてから言ってくれよ。今さらでも、何でもいい。物事を始めるのに、遅くたっていいんだよ。俺は今度こそ、母さんに幸せになってもらいたい」

「……私はずっと怖かったのよ。信彦さんにも、翔太にも拒絶されてしまう事が怖かった。黙っていれば、責められる事はない。けれど、それは貴方の言うとおり、逃げでしかない。私だって、幸せにはなりたいの」

母さんは静かに目を瞑ってから、ゆっくりと見開く。

もう悩まないでいいんだ、と自分に言い聞かせているように見えた。

「私は今からでも幸せになってもいいの、翔太？」

「当然。だって、俺達は家族なんだ。誰だって家族の幸せは望むものだろう？」

俺がそう言うとな彼女は嬉しそうに笑った。

人が幸せで、笑顔で暮らしていくには障害はいくらでもある。
それを苦勞して乗り越える時、人って言うのは幸せの大切さを知
るんだ。

母さんも、父さんも、冬美ちゃんも、俺も……家族になればきつ
と何かが変わる。

家族の誰もが幸せになれるように。

きつとなれるはずなんだと俺は信じたい。

第44章：愛しき者へ

【SIDE：井上翔太】

両親が結婚してから数ヶ月後。

母さんもようやく前に進むことができ、父さんと一緒に道を歩けるようになった。

俺はといえば、いきなり大病院の院長の息子という立場になり、家もあの豪邸に引っ越したりと少し戸惑いつつも新しい家族には満足していた。

父さんとの関係も徐々に改善されつつあるし、冬美ちゃんともちゃんと兄妹として仲良くしているのだ。

なぜか、いまだに母さんからは口リコン扱いされるのが困るのだが。

本当にめまぐるしく変わる現実。

どんなに変わっても、変わらないものもある。

俺と琴乃も恋人関係はすこぶる順調だった。

季節は夏、夏休みに入ってから琴乃も俺の家で過ごす事が多くなつた。

新しい家となった屋敷はホントに広い。

留守がちな両親の代わりに料理をしてくれたり（大半のことは家政婦のおばさんがしてくれる）、冬美ちゃんと遊んだり、恋人の琴乃と愛を育みあったりと楽しい毎日だ。

今日も夕食を作りに来てくれて、キッチンで料理中だ。

俺は琴乃の後姿を見つめながら声をかける。

「いつも悪いね、琴乃。助かってるよ」

「翔太先輩の役に立てるなら、それでいいんです。もう少し待ってください」

「ありがとう。それじゃ、待たせてもらうよ」

俺は絵を描いている冬美ちゃんに言う。

「冬美ちゃん。夕食はもう少しだつてさ」

「うんつ。ねえ、お兄ちゃん。琴乃お姉ちゃんとお付き合ひしてるんでしょ？」

「そうだよ。恋人同士なんだ、それがどうしたのかな？」

小学生の彼女の面倒を見るのも、俺の役割となりつつある。いくら家政婦がいるとはいえ、遊び相手ではない。

こうして俺が遊んであげるだけでも彼女にとっては寂しさを感じさせずにすむ。

「あのねっ？好きな人がいるってどういう気持ちなのかなって」

「冬美ちゃんは恋愛に興味があるお年頃なのか」

俺がこの子くらいの時はちょうど、鈴音に出会って初恋のようなものをした。

だから、興味があるのは当然だと思う。

「好きな人がいるって事は幸せなことだ。ほら、父さんと母さんだって、好き同士だろ？見てれば仲がいいのはよく分かる。冬美ちゃんもそう思うから聞いたんだろ？」

「うん。パパもママも、すっごく仲がいいもんねっ」

結婚してからはよく二人で旅行をしたりとか、デートに出かけたとか、お互いの距離を縮めあうように彼らは仲がいい。

十数年の月日は取り戻せなくても、今からだって遅くはないと思うんだ。

「冬美ちゃんには仲がいい男の子とかいるのか？」

「うーん。クラスでよく話をする子はあるよ。でも、恋とは違う気がする」

「そうか。冬美ちゃんがこの人いいなって思える相手に出会えればいいね」

俺はそう言って彼女の頭を撫でると嬉しそうに俺の膝の上に乗ってくる。

こうやって妹に甘えられると兄としては純粹な意味で嬉しいのだ。何気ない幸せ、手を伸ばせばそこにある。

俺は小さな彼女を抱きしめながら、家族の温もりを感じる。

「……ジーツ」

背後からの視線さえなければ、ね？

まさに絶対零度な冷たい視線。

俺は慌てて感じた視線の先を追うと琴乃が俺を微妙な表情で見つ

めていた。

「ご、ご飯、出来たんだ？」

「出来ましたけど……前から思っていたんですけど、先輩ってロリな人ですか？」

「だから、母さんみたいな事を言わないで！？琴乃にまで誤解されたくないっ！？」

母親だけではなく、恋人にまでロリコン扱いされるのはマジで勘弁願いたい。

「だって、冬美ちゃんともものすっごく仲がいいですよね？」

「妹としてね？あくまでも、妹だからっ！？」

「……先輩はそういう言い訳をしているようにしか聞こえませんか」

俺の腕の中で冬美ちゃんは「ふにゅ？」と不思議そうな顔をしている。

可愛いけど、ものすごく可愛いけども、この子は妹なのだ。
別に俺もロリ疑惑を抱かれるような属性もちではない。

「妹を可愛がる兄の構図に見えませんか？」

「怪しいお兄さんが妹という無垢な少女に悪戯しようとしているように見えます」

「俺、犯罪者予備軍扱いっ！？」

何たるショック、恋人にそんな扱いされたくねー。

俺が凹んでいると冬美ちゃんが優しい笑顔で俺を癒してくれる。

「お兄ちゃん、どうしたの？元氣ないよ？」

「ふふつ。何でもないさ」

「……はあ。先輩、ロリコンは犯罪なんですよ。自重してください」

呆れた声で俺を責める琴乃。

本当の意味で恋人になれてから互いに遠慮はなくなった分、こうして琴乃に責められることも多々あるという……。

俺ってもしか、ダメ彼氏？

「冬美ちゃん。夕食の前に手洗いをしてきて」

「はい、琴乃お姉ちゃん」

彼女は俺から離れて洗面所の方へと行ってしまふ。

さて、残された俺はロリコン疑惑を恋人に突きつけられて逃げ場がない。

「お、俺も手を洗いに……」

「行かなくていいです。はあ、先輩。あのですね、冬美ちゃんが可愛いのは分かりますけど、ベタベタし過ぎるのはどうかと思います。ホントにそんな趣味があつたりするとか？私じゃ不満ですか？ロリ系じゃないとダメなんですか？」

「ありません。妹に手を出す変態でもないです。それに冬美ちゃん
って俺にとって異母兄妹で実妹なんだからさ。そこだけは俺を信頼
して欲しい。愛しているのはキミだ」

ずっと兄妹がいれば、と懂れていた分、冬美ちゃん
の存在は大きい。

シスコンと言われようが可愛いものは可愛いのだ。

「……それに、冬美ちゃんばかり可愛がられるのも何だか嫌です。
私、先輩の恋人なのに。あんな風に抱きしめたりしてくれませんか
ね？あそこまで可愛がってとは言いませんけど、もう少し愛情表現
があってもいいと思うんです」

「え？あ、あれは、その、恥ずかしいって言うか」

さすがに露骨な抱き締め方と言うのは俺としては抵抗がある。
それを琴乃は拗ねた口調で俺を責めるのだ。

「別にいいですけど。恋人くく越えられない壁く実妹、というわけ
ですか」

「ごめんなさい、お願いだからそう言う事だけは言わないで？ね？」

俺は琴乃のご機嫌伺いに必死だ。

この子は案外、嫉妬深くて、そこが可愛かったりする。

ただその可愛さは時々、変な方向に発揮されるので要注意だ。

女の子の嫉妬が可愛いうちが華ってね、それがヤンデレ化したら
手に負えない。

「だったら、私もかまってください」

「いいよ。それじゃ、明日にはデートでもしよっか？冬美ちゃんも友達と朝から遊びに行くらしいから、遠出だってできるよ」

「ホントですか、先輩？」

不機嫌も一転して彼女は笑みを見せる。

恋人つてのは本当に大変です。

だけど、好きな子だから苦労は仕方ないと思う。

人間だから時にはすれ違う事もある。

それでも、相手を信じあうことが大切なんだって俺は思うんだ。

恋人には嘘をつく事もなく、素直でいたい。

「それじゃ、夕食にしましょう。今日は先輩の好きなピーマンの肉詰めです」

「それ、俺の苦手な奴じゃんっ!？」

「子供じゃないんですから、ピーマンくらいで文句は言わないでください。好き嫌いしちゃダメなんですからね。冬美ちゃんだって美味しいって食べるんですよ?」

琴乃は何だか最近、俺に厳しいです。

地味に仕返しされたりしてるのは気のせいじゃない、はず。

まあ、いいか。

こういう関係つてのも自然でいい関係だと俺は思うからさ。

ただ、ピーマンだけは勘弁してください。

最終章：恋人と海と青空と

【SIDE：井上翔太】

ガールフレンド。

英語を日本語に直訳すると女友達。

だが、本来の意味で言うのなら恋人と言う意味だ。

俺はこの言葉にすぐ意味がある気がする。

最初は友達、けれど親しみを持つとその関係は恋人へと変わる。

琴乃と俺は今、海へと来ていた。

眩しいくらいに照りつける太陽の日差し。

蒼い海は波打たせながら人々を楽しませている。

「翔太先輩と海に来るなんて初めてですねっ」

「そうだな。俺って実は海に来るのは5年ぶりくらいなんだよな」

「そっなんですか？」

「遠出してまで海に来るって事が中々なかったからさ」

電車を乗り継いでまで、海にこようとは思わなかった。

せいぜいプールがいい所だった。

だから、泳げないって事はないんだけどね。

「先輩と海に来たかったです。またひとつ、私の夢が叶いました」

「琴乃って小さい夢をいっぱい持っているな」

「小さい夢の積み重ねは大きい幸せになるんですよ？」

可愛い顔をして、彼女は俺にそう言い放った。

……まったく、こちらが照れくさくなるじゃないか。

「可愛い事を言ってくれる」

「あつ、先輩つてば照れてます？可愛いのは先輩の方ですよっ」

くすつと微笑をする彼女に俺はやられた。

琴乃のような恋人がいて、俺は本当に幸せだなんて思っただ。

「はいはい。そんな事はいいから早く泳ごうぜ」

「ふふつ。先輩、そんなに私の水着が見たいんですか？」

「ぐふつ！？そ、それは……」

見たくないとも言えず、がつつくように見たいとも言えず。

彼女に俺はからかわれながら、逃げるように更衣室に行く。

水着に着替えた後は砂浜で琴乃が来るのを待っていた。

砂浜が暑くて足が焼けそうだ。

さっさと海に入りたい。

「お待たせしました、先輩っ」

「おっ、来たか……琴乃？」

普段はストレートの髪の毛をツインにまとめた彼女。

それだけでも可愛いのに、青色の花柄模様のワンピーススタイルの水着はよく似合ってる。

スタイルは……まあ、これから期待ってことで。

「先輩？凝視ばかりしないで感想をください」

「スクール水着じゃないんだな」

「くっ。そうきますか？先輩はスク水派。分かりました、次からはそうします」

「しなくていいから！？冗談だよ、冗談。俺にそのようなマニアックな趣味はない」

初めから言わなきゃいいのという視線を向けられてしまった。

「素直に褒めてくださいよ？」

「分かってるよ。えっと、その、うん。可愛いと思うぞ？」

「？がついてますけど微妙ですか？スタイルに問題があるのは仕方ありませんけど」

今度は不機嫌になりかけている。

マズイ、そうなると琴乃は手強いのだ。

前に機嫌を損ねた時は麻由美に手助けしてもらってようやく解決したからなあ。

「可愛いよ。すごく似合ってると思う。スタイルだって、悪くない」

「最後の辺りが何となくご機嫌取りが混じってる気がします、それでいいです。先輩に褒めてもらえると嬉しいですね」

「……本当だつてば」

可愛いと褒めても疑われるのはどうかと。
俺の信頼度が足りてない？

「翔太先輩。私、実は……」

「胸はパッドあります？」

「先輩。女の子の秘密に触れたら　　が　　して、　　しますよ？」

ちよ、おまつ！？

思わずふせ字にしなきゃいけない事を笑顔で言う琴乃にマジでびる。

本気で女の子の笑顔が怖いと思った。

これ以上、琴乃を怒らせないようにしよう。

「ごめんなさい」

「もうっ、先輩つてば女の子をなんだと思ってるんですか？」

琴乃が言いたかったのは「実は私、泳ぎが下手なんです」というものだった。

浮き輪の着用を求める彼女に俺は承諾する。

こういう事は下手して溺れても困るからな。

俺達は海へと入ると、冷たい水の感触に心地よさを感じる。

外がこれだけ炎天下なので本当に海に入ると気持ちがいい。

「少し、波が荒いですね」

浮き輪で浮きながら彼女は海を進む。

俺もその後をついて行くと、いきなり足がつかない深さになりはじめた。

ここからは泳がないとダメか。

「なあ、琴乃？鈴音はどうしているんだ？」

「お姉ちゃんですか？お盆前に一度だけ帰ってくるそうですよ」

全寮制の高校なので鈴音に会えるのは本当にわずかなのだ。

麻由美は学校では昼飯を食べる時によく顔を合わすけどな。

「そうか。また会えるといいな」

「むっ。もしや、お姉ちゃんを狙うつもりでは？」

「琴乃がいるのにそんなことするはずないだろ？」

「分かりませんよ。時々、不安になることもあります。あの一件で私達の関係は変わりました。本当の意味での再会、それは意味があったと思います」

ゴールデンウィークのあの出来事。

俺が琴乃を鈴音と勘違いしていた奴だ。

だが、お互いに受け入れて、前を向き始めたことにより、今はこうして甘い恋人関係が続ける事ができている。

「……先輩の初恋ってお姉ちゃんですよ？」

「まあ、そうだけど。今、好きなのは琴乃だぞ」

「分かってます。分かってるんです。だけど、どうしても気になる事があって。私、本当にダメだなんて……。先輩が好きと言ってくれるのに、心のどこかで本当に私でいいのって思ってしまうんですよ」

静かに波に浮く俺達は黙り込んでしまった。

琴乃は時折、そういう自信のなさを見せる。

性格的なものだから無理は言えないけども、俺は俺を信じて欲しい。

「琴乃、おいで？」

俺は琴乃の手を引きながら、海で足のつく所まで戻る。

顔を俯かせる彼女に俺はポンッと軽く頭を撫でた。

「俺は、琴乃と一緒にいられて幸せだよ。可愛い彼女がいて、毎日が楽しくて満たされている。琴乃、自分で言ったよな。小さな夢の積み重ねが自分の幸せだって」

「……はい」

「俺も同じなんだ。こうして一緒にいる、楽しい思い出を作り、同じ時間を過ごしていく。その幸せは俺も同じなんだよ」

琴乃が不安に思う事なんてない。

俺の気持ちを信じてくれれば、それでいいのに。

だけど、人間はそう言う事は言葉にしないと伝わらない。

他人同士が理解し合うには本当に傍にいなきゃ分からないんだ。

両親のようなすれ違いを俺は琴乃とはしたくない。

「俺は琴乃が好きだ。本当に好きなんだ」

「……翔太、先輩」

「だから、これからも俺と一緒にたくさんの思い出を過ごして欲しい。俺の隣で微笑んでいて欲しい。これが俺の望み、俺の夢なんだよ」

人を信じるのは難しい。

だからこそ、話をして分かりあう事が必要なんだ。

分かったふりをして、嘘をついて、誤魔化して。

そんな関係を続けていたらダメになるのはお互いに理解している。

「琴乃のそういう不安、俺は話してほしいよ。俺は琴乃を理解したい。琴乃の想いを知りたいからさ。ふたりで解決していけば、俺達はずっと幸せなんじゃないかな」

琴乃はしばらく黙りつづけていた。

瞳に端にうつすらと涙を浮かべていたが、やがて、落ち着いたのか笑顔を見せる。

「ありがとうございます、先輩。そう言ってもらえると、私も嬉しいです」

「琴乃には笑顔でいてもらわないとな」

「私、先輩の事を好きになって本当によかったと思います」

俺達は海の水の中で抱きしめあう。

周囲の視線が少し気になるがかまいやしない。

「……皆の前で抱擁されるとさすがに恥ずかしいですね」

「どこにでもいるカップルの構図だ。気にしないでいい」

「先輩って意外な所で大胆ですよ」

俺は琴乃を抱擁していた腕をゆっくりと離れた。

「こうしてちゃんと態度に出さないと琴乃が不安があるからさ」

「……先輩って優しいです。時々」

「ちょい待て。時々っていつもは？」

「くすつ。それは、まあ、気にしないでください」

いつもの関係、いつもの琴乃がそこにいる。

「さあて、それじゃまた泳ぐとするか。何なら勝負でもするか？」

「浮き輪OKなら私は負けませんよ？」

「いや、浮き輪じゃ絶対に俺には勝てないから」

水しぶきとともに笑い声が海に響く、大切な子が俺のすぐ傍で笑っている。

その現実には俺は幸せを実感している。
これから何度も互いに喧嘩したり、不安になったりしていくんだろっ。

それでも、俺達はどんな試練も乗り越えて見せる。
この幸せな日々を続けていくために。

【 THE END 】

最終章：恋人と海と青空と（後書き）

これで完結です。

思い出って、人間、つい忘れて行くモノなんですよね。ふと懐かしい過去を思い出す、小学生時代、仲の良かった友達、好きになった異性の相手。……あれ、でも、名前とか顔とか思い出せねー。と言うのが普通なんですけど。だからこそ、初恋だったり、昔をふと思い出してみる時間も必要なのではないでしょうか？

基本的に過去の回想、翔太が琴乃だと思っていた相手は鈴音です。作品は少し分かりづらいところもあると思うので、もう一度読み返してもらえれば、なるほどねと思ってもらえるはずです。

この作品を楽しんでもらえたら幸いです。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3402q/>

G・F～ガールフレンド～

2011年2月28日09時10分発行